

## はじめに

この本は「登校拒否・非行少年・非行少女」と呼ばれている思春期の真っ盛りの子どもたちとその家族、学校などのことを中心に書いたものです。

私は一九八九年の夏に『葛藤する思春期——登校拒否・非行・家庭内暴力と家族精神療法』という本を日本評論社から出版していただきました。この本の読者から、問い合わせやご依頼が数多くあったのですが、電話や手紙で応対しているうちに「こちらから出かけてみましょう」ということになって、日本全国を駆け回ることになったのです。訪問した家族はもう五〇を越したでしょうか。

「本人は治療の場に出かけて来なくても、家族の指導だけで治療はできる」と主張する人たちもいますが、それが可能なのは、ごく一部でしかないというのが私の考えです。その理由は、子どもの症状の深さ、家族の治療的な変化への柔軟性の度合いなど、家族によってさまざまであるからです。そういうわけで、治療にとりくめなくて困り果てている家族は、日本全国に数限りなくおられるようです。ところが、現在のところ、こういう家族に対して援助の手をさしのべることのできる機関はごく少ないのです。そのために怪しげな「治療施設」に頼ってしまって、多額の金銭を巻きあげられたり、子どもの心にとりかえしのつかない傷害を残してしまったりすることになっているのです。

こういう事態をふりかえてみると、十分な治療システムを提供できていない社会のほうに責任は大きいといえるでしょう。学校がその仕事の一端をになわないといけないのですが、そのことについては第五章で少しくわしく述べています。

これから進めていく話は、私自身がこの四～五年のあいだに往診して回った家族の中での体験を中心にして展開してみたいと思います。プライバシーの侵害にならないように脚色したり、いろいろと想像の部分も交えたりしますが、私が体験した事実の中心は曲げていません。

往診した治療期間は家族によって、あるいは悪くなってからの期間の長さなど、症状の深さによってちがいます。一回の往診でよくなった家族もあれば、もう一年近くも通っている家族もあります。私は、二、三日分の着替えをカバンに詰め込んで訪問して歩くうち

に、いずれの家族の人たちからもいろいろの新しいことを学ばせていただくことができました。

そういう意味で、今までの仕事は私自身の勉強でもあったのですが、この本は、そういう往診の途中の空港での待ち時間やホテルのベッドの上などで、とりとめなく想像しているときのようなスタイルで書いていこうと思います。

ところで、前著の『葛藤する思春期』は、「登校拒否や非行や家庭内暴力の成り立ち」「その治療方法としての家族療法」「学校のとるべき対応方法」などを整理したもので、いわばこの本の理論編にあたります。私はその中で「登校拒否、非行、家庭内暴力の本質はまったく同じものであり、これらをひっくるめて思春期自己確立葛藤症と呼びたい」と述べました。しかしここで、直接の症状を現わしているのは当の子どもですが、この症状はひとり「その子どもだけのもの」ではない、ということ強調しておかなければなりません。この本を読んでいただくと、子どもをはぐくんできた家族の中のたいせつななにかを、この子どもひとりが深刻に背負い込まされているのだ、ということに気づいていただけるでしょう。家族は「息詰まりそうななにか」を抱え込んで立ちすくんでいます。感じやすい一人の子どもが動けなくなったり、人から嫌われ、軽蔑されるようなことをわざとせざるをえなくなってしまうたりして、この子どもの周りで家族はますますうろたえ、立ちすくみ、言葉をなくして悪循環の中に閉塞していきます。この家族の中にふたたび言葉が生まれ、子どもの背中の「重いものの姿」が見えはじめて、ようやく家族はよい方向へ循環していくのです。

こうして、暗かった家族の中に明りがともりはじめるのですが、それは夜が明けることに、あるいは花がひらくことにたとえることができるでしょう。家族がひらくのは家族の力によってです。私ができることは、ほんの少しのお手伝いだけです。ほんとうに家族がひらくとき、学校も社会全体もひらいていくはずで、子どもが家族の中の核であるとすれば、家族は学校の中の核であり、学校は社会全体の中の核であるのですから。

## ●目次

はじめに 1

## 第一章 重い甲羅を少しずつ…………… 4

一年近くの往診で・5 登校拒否から家庭内暴力へ・6 つくられた分裂病・8 初対面の五分間勝負・10 家に入れな  
い父親・13 入院治療を勧めたが・15 逃げの姿勢をやめ  
る・18 急激な変化をこわがる家族・21 親子の間に適当  
な距離をつくる・23 大事になるまで「ほっとけ、うるさ  
い!」・26 性へのこだわり・27 父親と瓜二つ・29 な  
ぜ警察への電話を母親に強要するのか・32 親しかったいと  
こと一緒に食事・35 最後の面接・36

## 第二章 親子でピース…………… 37

少女に支配される家族・38 ババアもジジイも今日は帰らね  
えよ!・39 母親だけが離れて座る・41 金を出せと暴れ  
て・42 ひそひそ声の会話・45 宮崎へおいでよ・46 て  
めえ! 水野に洗脳されたな!・48 二年生になってから急  
速に・49 強制入院を決心するまで・51 座布団を頭に部  
屋に駆け込む・53 野島診療所での入院生活・57 教師の  
暴力と昭子の興奮・59 新婚旅行のコースをたどって・64  
荒れるエネルギーの供給源・67

## 第三章 初めて親子が本音で話す…………… 69

四年もシンナーを吸いつづけ・71 ナイフで足を切る・74  
古い街並みの一角に・75 無口な父親と夢見る母親・76 こ  
わがらずに本当のことではじめないと・79 シンナーだけは  
やめよう・81 初めて聞いた両親の話・84 往診先で食事  
をする効用・86 姉が加わると席を立つ・89 不愉快な表  
情を捨てて・91 母親に怒りをたたきつける父親・95

## 第四章 押してもだめなら引いてみな…………… 98

泥酔状態で保護室に・102 元暴走族との関係を断たせたい  
 両親・104 遊びじゃなくて本気・107 けじめをつけた  
 交際を・111 四つの約束で退院・113 子どもたちとカ  
 ラオケに・115 二人の性関係をめぐって・118 父親と  
 母親がけんか?・123 自分自身の生き方を大切に・125  
 担任の粘り腰にも支えられて・129 友だちと一緒によくな  
 る・132

## 第五章 学校も変わらなければ…………… 135

少年法・児童福祉法・教育基本法の定める機関・136 早く  
 なくしたい少年法体系下のシステム・138 芥川龍之介の「河  
 童」への共感・140 先生たちとの対話記録・142 「学  
 校に出てくるな」と言う教師・144 四角四面な校則の遵守・  
 146 校則を緩めると他の子どもも緩む・151 一ヶ月だ  
 け認めては・153 来ない子どもたちをどうするのか・15  
 6 教育者ではない管理者の言葉・157 スパルタ式は教育  
 に非ず・161 校長への援護射撃をかいくぐって・163 学  
 校を変革していく力・169

あとがき 171

## 第一章 重い甲羅を少しずつ

登校拒否にはじまって、家庭内に閉じこもり、最終的には父親も母  
 親も家の中に住めなくなってしまう少年の話からはじめてみるこ  
 とにしましょう。この家族の場合には、「ずさんな精神病院を選んで  
 しまって、症状をこじらせた」ということが、今ひとつ大きくから  
 んでいたのです。

はじめて往診させていただいた時点で、親子の正常な交流はまっ  
 たくもてなくて、父親は家の中にもはいれないという状態でしたの  
 で、私は「早めに入院治療にもっていくのが適当であろう」と考え  
 ていたのです。しかし、入院に対しては家族の抵抗が大きすぎたの  
 で、結局一〇回ほどの往診をくりかえすことになったのです。そ  
 して、途中からは「入院させずにやってきてほんとうによかった」

と、はじめの判断をおおいに反省することになった症例です。

これほどはげしい家族攻撃をする少年を「入院させずにやっていく」のには、家族の強い忍耐力を要しました。言葉に尽くせないような家族のがまんと努力があったのですが、家族にその力と意気込みがありさえすれば「入院させなくてもやっていけるケースはかなりある」ということを、この家族は教えてくれています。

### ●——一年近くの往診で

このケースの場合、私がかかわる約一年まえに、とんでもない精神病院に子どもをあずけてしまっていたのです。そのために家族には、「子どもに対して悪いことをしてしまった」という強い後悔と罪責の念があったのですが、このことがこの家族をそこまでがんばらせる力の一つとなった、といえるでしょう。

この少年は警察の力を使って強制的に入院させられたのですが、そのときの恐怖体験が、私が診察した時点での、いろいろな症状の中心のテーマとなっていました。具体的にいいますと、母親の耳に電話機をあてがって「警察に今すぐ電話しろ、すぐ来るように電話しろ」と強要するのです。このことはあとでまたくわしく述べますが、「警察の力で入院させられたこと」そして「入院後の病院でのとり扱い」、それらのすべてが少年にとっては不愉快であり、恐怖であった、ということ表現しています。彼としては、その記憶を一刻も早く消し去りたい、しかし、どうやったらそうできるのかわからない、という混乱の中にあっただのです。そこで、自分をそんな病院にぶち込ませた家族に怒りをぶつけることによって「どうにかしてくれよ」と訴えつづけているのです。だれにも答えようがなく、いわば「出口なしの蟻地獄」の中に家族全体が陥っているのです。そういうわけで、「入院治療ということは、なにがあっても、まず考えられない」という姿勢が、この家族の全体的な雰囲気の中にあっただようなのです。

私としては、自分たちの過ちを反省しながら、子どもから押しつけられる無理難題にとほうにくれながらもがまんしておられる両親に、深く感動しました。「今度こそ、自分たちのわがままで、子どもに苦しい思いはさせまいぞ」と決心されているようすを肌で感じる事ができたのでした。私はこの蟻地獄の中からの出口を見つける手伝いをするために、月に一回くらい、多いときには二回の往診を

くりかえしたのです。

### ●——登校拒否から家庭内暴力へ

少年の名前を川上晃ということにしましょう。川上家は四大家族です。父親は一流会社の課長さんです。もうそろそろ五〇の年が近づいています。母親は専業主婦、父親より四歳年下です。結婚はいわゆる「職場結婚」です。弟の学が二歳年下で、私が診療をはじめた当時、学は高校三年生でした。晃は成績が優秀ですが、学は少し劣ります。幼いころから、晃は母親を独り占めにしている、弟を排除していました。しかし、それは母親をめぐることで、兄と弟の関係では悪くなかったのです。兄はすごく弟思いで、近所づきあいの中では「いいお兄ちゃんの役割」を演じることができるのです。弟も、たとえば修学旅行から帰ってきたときなど、真っ先に兄のところへ行って「ハイ、お兄ちゃんおみやげ」といった関係だったのです。

晃が登校拒否をはじめたのは、高校一年の一学期の途中からでした。高校はたいいの人やうらやましがらうような有名進学高校だったのですが、彼が狙っていたのは教育ママたちから日本一の高校とって羨望されている某高校だったのです。ところが、その第一志望校に落ちてしまったのです。このことは、彼のプライドを大きく傷つけてしまう事件でした。この事件が彼の登校拒否をひきおこす引き金の一つとなったということは、まちがいないでしょう。しかし、それはよく誤解されるように、登校拒否の原因ではけっしてないのです。というのも、もし彼が第一志望の高校に受かっていたとしても、どこかでいずれは集団不適應をおこしていたにちがいないからです。それは、登校拒否ではなくて、職場拒否であったり、婚姻拒否であったりするとしても。

そのことはこの本全体の中で、おいおい述べていくこととして、彼は学校に行かなくなったあと、家にひきこもってしまいます。そして、多くの登校拒否の子どもたちがそうであるように、母親への暴言暴行が進行していくのです。

暴言の内容はといえば、母親として対処しようもないことでした。たとえば、「自分は背が低い。それはおまえがあんな父親と結婚したからだ。どうしてくれる？」というぐあいです。そういう暴言からはじまって、最後にはなぐる、ける、包丁が出るということになっ

て、母親は命が危ないという事態に至ります。そこで、精神科の病院に相談に行かれることになるのです。

用心深い母親ですから、精神科の病院に行かれるにあたって、どの病院を選べばいいのかずいぶんと迷われたようです。一般的に病気にかけた場合、どの病院へ行くか、多くの方はまずは身近な周りの人の評判などを聞いて選ばれることになるでしょう。ところが、精神科となると、たいていの家族がそうやすやすとは相談できないのです。しかも身近な人にしても、精神科を知っている人となると、そう多くはないわけです。そこで、晃の両親が A 精神科を選ぶことになったのは、「この病院は大学病院から先生たちが派遣されてくる病院ということだから、悪い病院ではなかろう」というだけのことだったのです。

ところが、実際にはそういう病院ほどずさんなところが多い、というのが私の印象です。そういうところは、まず経営者が医者でないところが多いのです。かりに医者であったにしても、診療の中心を大学医学部の精神科医局スタッフに任せてしまうということは、「自分自身の治療方針とか医者としてのプライドは全然ない」ということを物語っています。そしてそれは、「病院運営は単に経営者感覚だけである」ということを示しているのです。経営者はえてして、お金で人を動かすことになります。大学の医局に残っている人たちは大学を研究の場所であると心得ていて、精神科の病院は、そこが民間の病院であれ、公立の病院であれ、お金稼ぎにいくところであると割り切っている医者が多いのです。だいたい、立身出世を願う医者の多くは大学病院内部にいたがるのです。教授やら助教授やら精神科医局の中核スタッフ、つまり主流派の近くにいるほうが、その覚えもよろしかろう、というわけです。ですから、大学外の病院にやらされると、何となく左遷されたという気持ちになってしまうのです。そこでまた、精神科病院は単にお金を稼ぎに行くところと、投げやりになってしまう傾向を助長することになります。そう割り切ってしまうえば、高給を出してくれる病院ほど人気は高くなりますので、経営者としては医者を集めやすい、ということになるのです。

少し経営のことにたちいって述べてみますと、医者にお金を高く出せる病院ほどよくない病院経営をしている、ということがいえま。なぜなら、病院の収入は保険医療にもとづくものがほとんどですから、医者に高給を出すためには、他の職員の給料を減らしたり、

心理療法士とかケースワーカーとか保健医療収入の直接的な増加に結びつかないようなスタッフはなるべく雇わない、ということになっていくのです。そうすると、医療の質などは犠牲にして「給料を少しでも多く欲しい」という職員が増えていきますので、病院の質の低下は雪だるま式に進んでいくこととなります。パートで病院にやってくる医者ができることは、常勤の医者の三分の一もないでしょう。パートの医者では他のスタッフとのチームワークなどはほとんどできませんから、外来診察にはいくらか役立つとしても、入院患者さんの治療に関してはまずほとんどなんの役にも立ちません。なぜそんな無意味な医者を病院がおくのかといえば、それはいわば保健所のお役人の「病院監査」の目をだますためだけです。わが国のお役人は「書類上の数さえそろえばそれでいい」のです。質は問わないのです。これはまさに、世界に恥ずべきわが国独特の「まやかしの合法化儀礼」である、と断言してよいでしょう。悪名高い宇都宮病院も東大医学部から医師の派遣を受けていた病院でした。病院内部で行なわれてきたことが医療からはほど遠い質のものであることは、かけだしの医者にもわかっていたはずですが、ところが、良心の目を曇らせて、「自分たちが受けていた高い給料の出所を守る」というわが身の保全のほうを多くの医者を選んで「知らぬふり」を決め込んでいたのでしょう。蜿蜒とつづいたそういう「一人ひとりの医者の良心の欠如の蓄積」が、まさに病院の中の腐敗の進行にエネルギーを供給していたと考えることができます。

わが国の平均的な精神科医療は、このような構造の上に成り立っているのです。したがって、「わが国の精神科医療は内部から体質を変えていく力を完全に失っている」ということができます。それは変化する力を失った家族と同じで、精神科医療の外の世界の人びとからの働きかけがなければ「いい方向への変化」は現れず、ますます悪化していくはかりでしょう。

晃が入院させられた病院は、まさに典型的な「大学医学部と癒着した悪徳病院」だったのでした。その実態は、あとから家族の言葉で語られます。

## ●——つくられた分裂病

私たちはまず入院させるまえに、どんな子どもなのか、ほんとうに入院させなければならない症状なのか、ということを慎重に検討



します。そのために何回か外来に来ていただいたり、来れない子どもを抱えた家族の場合にはこちらから往診したりして、時間をかけるのです。ところが、晃の両親が訪れた A 病院の場合には、母親の述べる今までの経過と現在の症状を聞いただけで、「分裂病でしょう。この薬を飲ませてください。暴れて手に負えないときには警察を呼んで、病院まで連れてきてください」という指導をしているのです。本人の診察もせずに診断を下すなんていうのは、まさに名人芸です。診断するにあたって私たちもいろいろの推測はします。しかし、本人をみて確認するまでは最終的な診断は下せないのです。もちろん投薬などはとうていできません。それは、設計士が現地測量もせずに建築図面を描いて、そのまま建築をはじめていくようなものです。しかも医療の場合には相手は「とりかえしのつかない人間」なので、A 病院の「人間軽視」ははなはだしいといっておいてよいでしょう。両親によると、ケースワーカーも「一回入院させたほうがいいですよ。暴れれば警察はすぐ来てくれます」と言って、警察を利用することを勧めたというのです。そこで両親は、「がまんできないほどの暴力ではなかったが、入院させるために警察を呼んでしまった」と言うのです。

晃は、入院させられることにはげしく抵抗しました。そして保護室という名の独房に入れられて、薬漬けにされたのです。そのあいだにほとんど心理的な治療を受けるチャンスを与えられていません。そういう入院のあり方だったわけですから、心理治療など成立したはずもありませんが。

約一週間後に家族が面会に訪れると、晃は「手や足をぶるぶるとふるわせ、よだれを流しっぱなしで、食事もとれずにふらふらして、言葉もはっきりしない」という状態だったのでした。それを見て、親はようやく「これはおかしい」と判断されます。そして、入院一ヵ月目にして、自宅に連れて帰られたのです。症状は薬の副作用であったわけですから、退院して薬を飲まなくなった日から日を追って回復していったのでした。

両親はこうして、自分たちのとった処置がまちがっていたことを確認されていきます。そして、せっせと図書館通いがはじまります。登校拒否に関する書物のほとんどを読まれたというのですが、これらの本の中で、子どもの症状を「受容しなさい」という言葉が母親の心をとらえたようです。しかし、A 病院への入院以来、晃の家族への攻撃は前にも増してはげしくなっていました。

両親は「受容しなさい」という言葉を実行しようとし、ところが、両親としては、「A病院のような悪い病院に入院させるという過ちを犯してしまった」という強い罪責感があります。そこで、晃を受容する、というよりか、ただただ「晃を怒らせないように、おどおどしてしまおう」という逃げの姿勢になってしまうのです。その流れの中で、晃は歯止めなく症状を深めていくことになったのです。

理解しがたい言動、一方的な感情興奮、入浴もせず歯も磨かないなどの意欲の低下などなど。私が診察させていただいた時点で、私自身も一時「もしかしたら、これは分裂病かもしれない」と迷ったくらいです。誇大妄想のような言動、軽い空笑なども見られたからです。しかし、症状の進行した神経症には、これらの症状はよく見られるのです。そのために、日本中の精神病院の中に、かなりの数の登校拒否の子どもたちが分裂病という誤診をされて入院させられています。これらの子どもたちは精神科薬物を大量に飲まされていますから、意欲の低下、表情の乏しさなどをきたしてしまい、ますます分裂病臭くなってきますので、ほんとうの分裂病と判別しにくくなってしまふことがるのです。

晃の両親は、なにがあっても、もう精神科の病院には頼らない、と決心しておられます。そこで、書店や図書館通いを続けられたのですが、そのなかで、私の本と出会っていただくことになります。幸い、私の本が市の図書館の新規購入本として、めだつ棚に並べられていたというわけです。

### ●——初対面の五分間が勝負

はじめての私の往診にあたっての晃の抵抗は、すさまじいものでした。両親も、晃がどんな手に出るか、心配しておられたようです。「まさかとは思いますが、彼はよく包丁を持って構えることがあるから」と言われるのです。私もそのことがまったくこわくないわけではありません。しかし、私たちの往診にあたっては、そういう場面はざらにあるのです。ドアを閉めてとじこもっている子どもの部屋を何回かの往診のあとで強引に開けてはいつてみると、金属バットや包丁が準備してあるというようなことはしばしばです。全然ものを言ってくれない子どもを何回か往診したあとで、ふとんの下に薪割りがおいてあった、というようなことに気づいて背筋を冷たくするとか、そんなことはよく経験していることなのです。

しかし私たちは、それらの凶器は「自分を攻撃してくるものから防衛するために準備しているにすぎない」ということを知っています。こちらから攻撃をしかけていかないかぎり、彼らは向かってはこないのです。だけど、まかりまちがうと、実害があることもありうるわけです。相手のほうが誤解して「攻撃されるまえにやっちゃえ」と考える、ということとはまったくないわけではないのです。そこで、私自身はまず、相手と目が会うまではなんらかの防衛手段を頭の中で描いています。「いざというときにはこの窓から飛び出そう」とか「この椅子で防衛しよう」とか、そういったぐあいには被害を防ぐ方法は頭の中に準備しておくのです。もちろん、こちらのもっている不安は相手方の不安をひきおこすことになるわけですから、頭の隅では準備していても、治療者の表情に出してはいけません。

「僕たちは君が僕たちに危害を加えるような人ではないと信じているよ」という姿勢を崩しては治療は進行しないのです。たとえば、はじめから屈強な男性を大勢連れて行ったり、棒切れを持ったりといった方法で向かっていくのであれば、少年の心には大きな抵抗ができて、それは時間が経っても溶けていってはいくれないでしょう。

しかし、なんらかの誤解をされてしまう場合などもあるわけですから、治療者の側にもいくらかの心の準備は必要なのです。ですから、私としては「少年の目と私の目が会うまでの五分くらい」が非常に緊張する時間です。じつをいうと、この五分間こそが非常にたいせつな時間なのです。この五分間をどう迎えるかということで「子どもと治療者の関係のほとんどが決定される」といってもおおげさではないでしょう。この困難を避ける方法、たとえば、「警察を呼んで、力づくで治療の場まで連れてきていただく」という方法などでは、そんな治療チャンスはできっこないわけです。それだけで「治療の可能性のほとんどは打ち壊される」といってよいでしょう。

晃との初対面のときにも、私はこの五分間の勝負で緊張しました。そう、それは武蔵と小次郎の一騎討ちに例えることができるでしょう。そして「ひとまずの安心」と射止めることができたのですが、晃の抵抗はその後そう簡単には和らいでいってはいくれませんでした。彼が私の来訪を「心から待っていました」という表情で相對してくれるようになったのは、四、五回の面接を経たあとではなかったかと思えます。

一回目のときには「もう来なくてもいい」と言いましたし、三、四回目ぐらいまで、「僕を治療できる人は僕よりも能力の高い人でな

いといけない」などと言って私を威嚇していたのでした。「もう来なくてもいい」という言葉に対しては、「僕はね、ご両親の要請があれば来ることになると思うよ。君は来なくてもいいと言っても、このままではこの家は動かなくなっているし、なにより君の時間は次々なくなっているでしょう。ご両親がそのことをほっといてよいと思っているはずはないもの」と返しておいたのです。それに対して晃は無言のままで反論をしないのです。そこで私は、反論しないということは私の「これからも来るよ」という言葉を受け入れたことになる、と解釈するわけです。こうして私はしつこくしつこく往診をくりかえしていくことになりました。

実際のところ、はじめのうちは、一〇回以上にもわたる往診をくりかえしていくことになろうなどと予測していたわけではありません。というよりか、先に述べたように「早いうちに入院へもっていかなくてはなるまい」と考えていたのです。一〇回の往診を簡単に整理してみますと、次のようになります。

一～三回目は治療への導入の時期で、①晃と私との信頼関係を深めること、②家族の治療への心構えを確認しあうこと、の二つが主な作業になりました。この時期までは「入院治療は避けたいけれど、やむをえないか」という気持ちが家族にも私にもありました。三回目の往診のあとで、晃の母親への暴力がはげしくなります。母親に対する「警察に電話しろ」という要求がしつこくなって、それに従わない母親にまわりつき、最後にはなぐる、けるの暴力に及ぶのです。それが連日つづきますので、母親のがまんの限界をこえ、家を出ることになります。父親はそのまえから家に入れてもらえなかったのですから、母親と父親が家を出て、家には弟の学と晃の二人だけが住む、という非常事態になったのです。こういう非常事態になっても「入院させずにがんばってみたい」という強い家族の医師が確認できましたので、私も「往診を今後もくりかえしていこう」と腰を据えることになりました。

四～六回目の面接は、まず私と両親が会う、そして私と本人が会って、ふたたび私が両親と会う、という方法をとりました。本人にも、「これからお母さんたちにまた会ってくるから言いたいことはないの？」というふうに、私は両親と晃との連絡係のような役割をとりました。

七回目の面接で、電話で晃と母親に会話をさせる、という方法をとって、八回目にいとこの男性を交えて家族全員で食事をする、と

いう方法をとったのでした。これらの方法はそれぞれ奏効して、その後の面接は快方に向かって急展開したのでした。

次に、面接状況の詳細を述べてみましょう。

### ●——家に入れない父親

はじめての診察のときから、私たちは駅前のレストランをよく利用しました。ここで待ち合わせをして、ほぼ一ヵ月間の経過を聞いて、考えを述べあい、それから往診に出かけていました。面接のあと、また三人で会って、面接の状況、それに対する私の考察、両親の感想などを述べあったのです。私は時間的に制約がありましたので、本人との面接後の両親面接は次の目的地へ向かっての車の中とか電車の中を利用するということもしばしばでした。

二度目の往診のまえに、父親、母親、私の三人で話しているところを再現してみましょう。

私 お父さんを家の中に入れてくれないんですね？

父 そうです。まあ、はじめのころはね、陽気もよかったですし、車の中で寝たり、サウナに泊まってきて、朝早く帰ってきて部屋に潜り込んだりしていました。まあ、いちおう「家に帰ってきてやっただよ」と「だけど、おまえが入れてくれないから、ここで寝てんだよ」というかたちをとったらどうかなど。

私 じゃあ、本人はお父さんが帰ってきたことは知ってるんですね。

父 知ってるんですよ。当然知ってるんです。

私 家に上がらず、車の中に寝てるってことも？

父 ええ。

母 本人が、居間でずーっと見張ってるんです。

私 居間で見張ってる？

母 ええ、そうなんです。それで明け方の三時か四時になったら自分は寝るんです。そうしますと、主人がはいってくるわけです、すぐに。それは知ってるはずなんですけども、それについてはなんにも言わないんです。ところが、このまえ、たまたま土曜日、主人が朝、とりあえずはいってきまして、土曜日で会社が休みだったものですから、昼すぎまでずーっといたんです。それで、お昼になったから、本人が洗面所に下りてきたわけです。そのときちょうど、お

昼ごはんの用意してたもんですから、お昼ごはんを二人で食べたんです。それがいたく気に入らないらしくて……。

私 ああ、お二人で食べられたことがですね。

母 ええ。

私 仲良くしてるように見えますからね。

母 ええ、それが全部気に入らなかったらしくて。

父 まあ、結果的にはね。その、ふつうのときには、朝だいたい三時くらいには寝られます。以前は五時くらいまで起きてたことがあったんです。なにかもう会社に行く直前に顔洗ってなんとか出かけるっていう程度でしたんですけど、ここんところは二時半前後には息子も寝ますんで、まあ、だいたい私も、うとうとしてますから、電気が、あっ消えたかなってということで、トントンと叩いて、はいっちゃうわけですけどね。そうすると、べつにそれに関してはですね、あの、まあ、変な攻撃などはなにもしませんけどね。

私 そうですか。

母 それで食事を済ませて、二人でスーパーに買い物に行ったんです。もうそのとき、かなり機嫌が悪かったから、主人は玄関からじゃなくって四畳半の部屋から出たんです。私が玄関から出ようとしていますと、文句言ってきたんです。私のところへつかつかとやってきて、服をつかんで出さないようにして。そして、文句言ったんです、私に。

私 どんな言い方でしたか、文句を言うというのは？

母 「おまえがその気なら、こっちにも考えがある」って、要するに私が主人の味方をするのなら、ということですね。

私 なるほど。そうするのであればってことですね。

母 ええ、「それなら、自分も考えがある。お前もだから敵だぞ」と、こういう見方じゃないかなあと思うんです。

私 ああ、そういう意味でしょうね。ちょうど前回、「作戦があるんだ」って言いましたよね。

父 ええ。

私 作戦があるって、僕にね。

母 はい、はい。その作戦はあれなんです。あの、主人を毎晩入れてないですね。それで私が、「お父さんは、もう年とっていらっしゃるから、毎晩眠れないと、からだが弱ってしまうから」って言うのと「それが望みなんだ」って。

私 ああ、そういうことなんでしょうね。

母 そう言うんです。

私 だから、つまりお父さんを追い出そうとするような作戦。

母 ええ、「自分が直接手を下して犯罪者になるなんて愚かなことはしないぞ」と言うんです。

私 ああ、自然に弱ってくるのを待ってるというわけ。お父さんは敵なんですね。お父さんが敵だったらお母さんは味方にしたいんだってことなんですね。

母 そうなんです。ええ、私には家に帰ってきてほしいんです。どっちかっていうと、以前は私が外に出ると、追いかけてきてまで私を放さなかったくらいでしたから。ですから玄関は鍵をかけないんです。私まで入れないようにしちゃうとまずいんで。

### ●——入院治療を勧めたが

私は治療の方法として、「家族から距離をつくるための手段として入院が一番早道ではないか」と話しています。

私 たとえば一、二週間、お母さんが晃君と一緒に宮崎にいて、あとはお母さんだけ先に帰ってもらってほっとくとかね、いろいろな方法がとれると思うんですよ。

父 それはね、できたらそういうことでね、まあ極端に言えば息子がその気になればどんなことでもするつもりではおるんですけどね。ただ、本人が納得するのはね……非常にまえの入院の体験からみてむずかしいかなあ。

母 まえに A 病院に入院させてから、そうとう心がかたくなになっています。それ以前はあんなことなかったです。

私 そうですか。

母 ええ、ですから、また強制っていうのはちょっと……。

私 だから、そのときの強制のさせ方がですね、警察がやってきて、有無を言わずに連れていったわけでしょう。心の準備などないわけでしょう。

父 そうです。

母 はあ。

私 充分準備してすればね、そんなに心配はいらないと思いますよ。たぶん、まえの入院の場合にはね、いきなり連れて行って、鍵のかかったところに閉じ込められちゃって薬を渡されるだけだったわけでしょう。ですから、すべてのことに悪い印象しかないわけな

んです。

父 それがね、結局その入院させる流れとしては、女房を夜でも追っかけてきて、暴力をつかうということがあったものですから。警察にお願いして、警察は「じゃあ保護しますわ」というふうになって、警察にそのまま連れて行っていただいたんです。

私 それは病院の指示だったんですね？病院から「困ったときは警察に頼みなさい」と言われて。

父 そうです。

母 ええ、そうなんです。ですから私たちがもちこたえられないから警察に電話したんじゃないくて、「家で暴れたらすぐ警察に言うんですよ」と、その力でね。あの一おどすというか、そういう指示だったんです。それで、もう警察が介入してくるようになったんですけど。

私 だから、その指示がまちがってるんですよね。

父 結果的にそうだと思うんです。

私 ですから、治療じゃなくしておどしでやってきたというのがね。僕はね、強制入院させるときから治療者がすべきだと思うんですよ。僕の場合は警察を頼むんじゃないくてね、かならずこちらが出かけて行ってね、何回か説得して、最後に強制して連れてくるという方法をとるんですよ。とくに思春期の子どもの場合にはね、警察が来たというのは、すごく大きな衝撃なんですよね。

母 ええ、それ以来あの包丁を持ってるって言うんです。「また警察を呼んだら、警察をやっつけてやる」って言って持ってるんですよ。

私 なるほど、そうでしょうね。

母 包丁持ってるのは、お父さんをやっつけてやるっていうわけじゃないんですよ。

私 そうだと思いますね。

母 ええ。

父 だからそのあとにですね「なんがあっても今後いっさい警察は呼ばないぞ」と約束したんです。しかしそのあとに、とうとう暴言を吐きながら、監禁したんですね、女房を。あのときには、こいつはだいぶ強く耐えたんですね。

母 包丁持ちながら監禁したの。包丁で私をおどしてるんじゃないくて、私を監禁したら、また警察がやってくる。

私 ああ、家族のだれかが呼ぶだろうと？



母 ええそうです。そのときのために準備して包丁を持っているだけで、包丁で私を……というのでは……。

私 お母さんを刺したいわけではないんですね。

母 ええ、おどしてるわけではないんです。

私 そうですね。しかしまあ、どっちみち彼が家に閉じこもってるという状況を、早く改善しないといけないと思いますね。その「やり方」として、今のところ「入院という方法をとるかどうか」は先送りにすることにして、何回か往診をくりかえしてみましよう。そのあとで、お母さんと一緒に宮崎に来てみてということにしましょう。今の状況では症状の改善は望み薄ですね。なんらかの方法で家族と距離を置くことが必要ですね。たぶんにお母さんと密着してますからね、お母さんから早く卒業させることが必要でしょう。

母 はい。私もそう思います。あの、要するに長いあいだ、もう家族と家の中でベチャーっていうことでしたから。とくに私とベチャーとですからね。もう、何年も登校拒否してますから、ますます。

数日まえ、私は四畳半の部屋で寝てたんですね。一二時ごろかな、主人の車の音がしました。するとすぐ晃が部屋にはいってきて、鍵の点検をして、私に鍵を開けたらいけないって、立ちはだかっているんです。私が「そんなね、人とつきあうときって感情丸出しにしてつきあうもんじゃないのよ」なんて言ったんです。明は「プーッ」って言ってるんで、私は「山登りするときだってね、ロープウェイとかヘリコプターで、はい、頂上に着きましたよっていったって楽しいことないでしょう。一步一步登るのが楽しいのよ」って言ったんです。そしたら本人が「僕は荷物がたくさんあるから、もう、今動けないんだ」って言ったんです。

私 ああ、なるほどね。

母 それで、「あなた、荷物は自分が持ってるんだから、水野先生とお話して、心を整理して少しいらぬ荷物を捨てたら軽くなって登れるんじゃないの」って言ったんです。そしたら「いや、形のほうより結果のほうがいじなんだ」って言ったんです。そんな話ができている、今朝のことなんですけど、起きてきまして、私は台所にいたんですよ。ほんとうは一〇時ごろだったんですけどね。「おはよう」って言ったらいきなり、ポカッと足でけって来たんですね。あんなことなかったんですけどね。で……、そのあと、洗面所へ行って、洗面所でもなにかを荒くたたいたのか、けったのか音がして

いました。それで、もうこれは、今日は一日中機嫌が悪いなあと思いました。洗濯をすませて、四畳半の部屋から出てきましたら、少し通せんぼしそうになったんですけども、「お母さんちょっと用事があるんだから」と言ったら、すーっと通したんです。台所と居間の境の戸をバチャーンと閉めて出ていったんですけどね。今日は監禁するのかしらと思ったんです。今までは朝起きてきたら、ああいうことはなかったんですけどね、荒くバーンとけったりとかはね。だから、数日まえに言ったのが少しこたえてるかしらと思ったんです。言わないほうがよかったかしらね、ほっといたほうが、と……。少しはこたえたほうがよかったような気がしたんですけども……。

### ●——逃げの姿勢をやめる

私 今まで、ずっとお父さんもお母さんもね、何かその逃げの姿勢が多かったのかな。本人を刺激するな、刺激するなといってね。本人が今朝みたいに怒ったりしてもね、やっぱり必要なことは言うべきなんですよ。彼は待ってるんですよ、真っすぐに答えてくれることを。ところがお父さんも夜遅く帰ってきて、入ってこないし、お母さんだっていつも言葉を抑えながら、抑えながら言ってるしね。それでは、彼はたぶん欲求不満がつのっていくと思いますね。

もうちょっと、あんまり心配せずに、結果を恐れずに、ゆさぶっていいと思いますけどね。たぶん今日、僕が行ったら「またおまえ来たのか」って言うだろうと思うんですよ。「もう来んでもいいと言ったやないか」って言うと思うんですね。しかし、「僕はお父さん、お母さんに頼まれたからには来るんだ」って言うと思います。そうするとお父さん、お母さんがまた、「どうしてあんなやつ呼んだんだい」と攻撃されることになると思うんですよ。そのときにね、「あなたをほっとくわけにはいかないし、お父さんだってほっとくわけにはいかないから、これからずっと頼っていく」ということを言いつづけてほしいと思うんですね。まあ、そこをうやむやにしまったんじゃあ、彼の中にもっと今がなくなっていくんですね。ですから「あんたをこのままほっとけない」ということをはっきり、今言わないといけないんですね。ですから昨日、今日と少し荒れてるわけですよ。

母 昨日というより今朝ですよ。

私 今朝ねえ。ええ、ですから今日は僕が行ったら、もっと荒れ

るかもしれませんよね。

母 とにかくそれがあるんです。このまえ先生のお見えになったあと、私は家におずおず帰ってみて、これは少し荒れるかな、と思ってたらなにもなくて。

私 でしたね、あとで電話で、そういうことを聞いたのでしたね。

母 ええ、その後も庭へ出てなにをしてるのかなあって思ってたらね、弟が「兄ちゃん庭へ出て門でも針金で縛って、お父さんがはまらないようにしてるのかな」って言ったんですけどね。昨日外に出てみましたら、庭にドッグフードが落ちているんです。犬に餌をやりに行ったんだと思うんです。その二日ぐらいまえも昼間ですけども、私がちょっと居間から出てみたら犬の相手をしてたんですよ。

私 ああそうですか。少し、そういう変化がおきてるわけですね。

母 ええ、少しじゃなくて、私たちからするとたいへんな変化です。だから庭に出るようになったみたいですしね。先生がお帰りになったあと。で、調子いいなあとと思ってましたところが、あの、主人と土曜日に一緒に食事しましたら……荒れたんですよ。

私 それがあったわけですね。

母 荒れたんですよ。

私 うん、しかし、それはそれでよかったと僕は思いますね。要するに、そんな家族の中でおこる必要なことは、遠慮せず自然なままジャンジャンやってほしいんですね。彼のことを考えて、したいことをがまんする、というよりか……。本人はむしろ喜んだんじゃないかと思いますよ。表面は荒れたにしても。言葉だけじゃなくて、行動から伝えあうことができたわけですよ。「お父さんと食事をしている姿を見せた」ということは「あなたはお父さんを排除しようとしてるけど、私は一緒にごはんを食べるのよ」ってことを示したことになるんですよ。で、それに対して、本人は荒れるということをしたわけですよ。そこでご両親はふたたび、そのかたちで応えればいいんだけど、実際には晃君が荒れるのをこわがっていらっしゃるから、彼の答えにふたたび答えを返すということができていないんですね。それで本人はなにか、今朝みたいな行動に出たんだ、と思うんですよ。だから僕が今日これからおうかがいすることで、また変化がおこると思うんですよ。このまえ、晃君は僕に第三者って言葉を使いましたよね。「自分とお父さんとお母さんという家庭があるのになぜ第三者がはいってくるのか」っていう言葉を使いまし

たね。「第三者がはいってくる」という言葉は「ようやく安定している僕の空間であるこの家庭を荒しにくる第三者」という意味なんですよ。言葉を変えていうと、家族の中だけで自分は王様になっている、王様になることでやっと安定しているんだ、その家族を荒らす第三者がはいってくる、というわけでしょう。登校拒否の子どもたちとか、非行の子どもたちとかは、いわば現実の集団に適応できずに「今のバランスをようやく保っている」わけで、彼らは「変化していくこと」に非常に弱いんです。ですから、今の段階では、僕が訪れることは彼にとっては大きな苦しみののだと思います。しかし、逆に「この苦しみの中から救い出してくれるかもしれない人」として待ってくれてもいると思うんですよ。その感触があるから僕はやっていけると思っているんですが、面接を重ねていったら、その気持ちのほうがかうんと強くなってくると思います。で、今のところ、僕が来たことで荒れる時期があるかもしれません。しかし、それは「変化していくためのチャンス」だと思わないといけないんですよ。だから、とにかく目先のことを静めようという考えは捨てていかないとだめですね。

父 なるほど。

私 もっと全体を考えていくことです。今が静かならそれでよい、なんて考えはやめないと治りません。

父 ただ、まあ、あの一、そのへんがよくわかんないんで。またですね、興奮状態にだんだんいっちゃってですね、包丁を二本構えて、てなとこまで行っちゃうのかなというような不安感がわれわれにありますのでね。やっぱりそっとしておいたほうが、あいつが自分で考えながらね、あれするのかなあ、という感じもまあちょっともってますね。

母 そうですね。土曜日に主人と一緒に食事して荒れてからは、少しもう主人は「別に家にはいらなくてもいいよ、少しほっとこうかね」となことになってます。あの、だから主人もはいろいろとあんまり努力しないし、子どもがいると、私もべつに主人を入れようとしなくて、かってに二階に上がって本を読んだり、適当な時間がきたら下りて出たりしたんです。

私 そうしておくと、一時的に彼を荒れさせないようにできるわけですね。しかし、そのままでは、結局、またいずれ、べつのかたちで荒れる時期が来るわけですよ。

母 そうですか。

私 だから今のままだったら、毎日、毎日がね、無事なようにつて発想になっているわけで、新しい努力はされていないように思えます。

母 なるほど。それで今日、先生に来ていただいて、主人が家から外に出てるんですけども、その主人を「家の中に入れる」というとどうなるか。結局、晃の中では主人のことが、かなり大きなものを占めていますので、主人の味方というか、先生が「お父さんを入れないとだめじゃないの！」というようなことを言われますと、「ほら、水野先生も敵だ」とかになっちゃうと困るんじゃないかなあと思ったりするんですけど？

私 ええ、そんなふうに味方、敵ってなっちゃうといけないんですよね。治療者というのは中立にならないといけないんです。早くいえば、「僕は君の味方だよ」っていうような手ではだめなんですね。

母 あら、そうなんですか？

父 そう？

私 ええ。そうです。

父 それで今度、もっと拒絶が強くなるというようなことはありませんかね？

私 そのことをこわがっちゃいけないってことです。

父 こわがるとか、なんとかっていうよりも、要するに、うちの場合、ことのほか他の人が出入りしないんですよね。とくに親戚の家とか自分からも行ってないし、小さいころにはあったんですがね。そういう状態が、ずーっと長くつづいてますんです。それで、先生なり、まあ、来ていただいてですね、第三の風通しというか、ちがう風がはいってきてね、そういう新しい風はやっぱりあいつのなにかちがった考え方になるんじゃないかなあと……。あんまり「お父さんを家に入れろ」とかなっちゃうと、そっちのほうはどうかなあというふうな感じがしたもんですからね。

母 ですから、おっしゃっていただくにしても、そうきつく言わないで、軽く、最初はしといていただかないと。

## ●——急激な変化をこわがる家族

家族のほうも急激な変化をこわがっているのです。私自身は「お父さんを家に入れなさい」ということを言おうとしているのではなくて、「家族面接の中に入れたい」と言っているのです。しかし、こ

の夫婦の中では「面接の中に入れる」ということは「家の中に入れるということ」と一緒なのでしょう。

私 ええ、本人を変えていくのが目的ですからね。いまの状態をね「よしよし」とするためにするんじゃないですからね。

母 はい。(？か！か不明瞭な口調)

私 それじゃあ、治りません。本人がね、「今のやり方を変えないといけないんだ」という気持ちをもてるようになるためにするのですからね。「今のままでいいよ」ってかたちにしたって、それは意味がありません。

母 自分の中へ甲羅になってこもってますからね。なにしろもう長いあいだ、登校拒否がはじまってもう四、五年たつけれども、家族との接触がとれてないんですから。

私 まずね、まえにも言いましたようにね、四、五年の問題じゃないですよ。四、五年の問題じゃなくて、むしろ子どものときからずーとね、たとえば、お母さんはお父さんを遠ざけてましたよね。

母 はい。私が遠ざけていたというよりか、主人が私を遠ざけていたんです。

私 そうか、どっちみち、二人がうまく手をつなげなかったというか。お母さんがご主人の方向を見るための時間のほとんどを晃君のほうに向けられていたというのかな。

母 それはたしかにありました。

私 しかも、学君は手がかからないというんで、晃君のほうにばっかし目を向けてましたよね。そのころから今の状態がつくられてると思ってくださいよ。ここ四、五年からじゃないですよ。ですから、もう幼いときからずーと彼の中に積み重ねてつくってきたものがあるんですね。お母さんは「あの子が自分にまわりつく」と思ってらっしゃいますけど、それとは逆に「お母さんが、あの子を自分のものにしてしまってたんだ」という面もあるということに気づいてほしいですよ。「自分から離れられないように」してしまっていた……。

母 ああー。

私 ですから、お母さんが「あの子の中にはいりこみすぎているのを変えていく」ということが今だいじなことなんですよ。その視点をはっきりもっておかないといけません。ただ「あの子を今のま

ま無事なようにやっていこう」とね、「あまり刺激せずに、今のまま彼を興奮させないで」なんて発想を決めこんでたんじゃあ、だめなんです。

母 まあ、私が主人を認めないから子どもも主人を認めない、という現状がおきているのかもわからないですね。

私 そうですね。この四～五年のことではなくて、幼いころから。

母 ああ、結婚したころから主人は帰りが遅くて、夕食なんかほとんど一緒に食べたことがなかったし、まして子どもの教育なんて全然主人は知らないですし。まあ、それこそ、サラリーマン。月給だけがおうちに来るとい生活でしたから、長いあいだ。

私 なるほどね。しかし、今考えることは晃君をどうするか、ということですね。今、行き詰まっている晃君をどうやって助けていくか、ということですよ。お父さんとお母さんは「これからどうすべきか」ということを話し合わないといけないんです。いわば話し合わせるために子どもがいるんだ、と考えてもらうといいと思うんです。学君がね、「お父さんやお母さんが死んだら晃どうなるんだろう」とご両親で話されていたときに、「お兄ちゃんはお母さんたちが死んだらすぐに治ると思うよ」って言ったということをお聞きしましたよね。僕は、学君はよく見ているな、と思うんですよ。

### ●——親子の間に適当な距離をつくる

母親は「おっしゃっていただくにしても、そうきつく言わないで、軽く、最初はしといていただかないと」と注文をつけておられるし、父親も「ただ、家族以外の人声を入れてもらう程度でいいんですが」と急激な変化を恐れておられます。このことは、私という治療者に対してまだ半信半疑たということ。それもたぶん、後悔している失敗をもう二度とくりかえしてはいけない、という気持ちから出ている疑いなのでしょう。そこで、私は「この両親に信用してもらえるようになるのには時間がかかるぞ」と手綱を締め直すことになります。

一回目の面接のときも、父親はほんの短時間だけ、おずおずと晃の前に顔を出したのです。しかし、このはじめての面接では「晃の治療への導入」ということを主な目的としていましたので、父親との関係までいじれていなかったのです。それで、私はぜひとも今回までは父親に参加してほしいと要求したのです。もし、父親の参

加を中止するにしても、「父親が参加することが困難である」という事実を「晃を含めた家族全員で確認してから進めていくという儀式」をすませておくほうが、治療の進行のために有効である、と考えたからです。

「私が来るという診察の日」のことは、晃は前もって知っていました。はじめは母親から聞いていたのですが、母親がいなくなった四回目以後は、弟の学から聞いて知っているのです。「今度の土曜日の一時頃に水野先生がみえるんだって」というぐあいには学から聞いていたらしいのです。いつも彼はかならず、ダイニングルームで私を待っていてくれました。しかも、彼が座る椅子の位置まできっかり決まっています。そのために私の座る位置もまた決まってしまうのです。私は彼の表情が見やすいように少し距離がほしいので、彼と対角線の位置をとることになります。はじめのうちは散らかし放題で足の踏み場もないくらいでしたから、そこまでたどり着くのになんか決意がいました。しかしこの位置はストーブとか扇風機とかの器具が一番近いのです。それに、電話も手を伸ばせばすぐにとることができる位置にあるのです。このことは、晃の動きの乏しかったはじめのうちはおおいに助かることでした。たとえば、外からかかってくる電話を、晃はけっしてとってくれません。学がいれば彼が二階でとってくれるのですが、学がいないと電話は鳴りつづけることになりますので、私がとることになります。寒くて底冷えがするような日でもストーブのスイッチを入れてくれませんので、「ストーブつけていいかな。ちょっと僕は風邪をひいていて寒気がするんだよ」といったぐあいに晃の了解をとって私自身でスイッチをひねることができます。そういったぐあいで、私の指定席はけっして悪い位置ではなかったのです。しかも彼は南の窓を見て座ってくれますから、光が良く当たって表情が見やすいのです。

かならず同じ位置に座るというのは、晃の思考の堅さを象徴しています。だんだん変わっていったのは、部屋が掃除されていくこと、入浴をするようになって臭くなくなっていくこと、貧乏ゆすりがなくなると表情が豊かになっていくこと、等々でした。表現もだんだん自然になっていくのですが、私を待つ位置と姿勢は最後までずっと変わらなかったのです。

二回目の面接のときの家族全員の緊張は最高潮だったのかもしれませんが。まるで、磁場の中に放り込まれた金属のような緊張状態です。すべての神経が磁場に向かってふるえているかのようです。母



親が先頭にだつて、私はそのすぐあとに従って玄関をはいるのですが、母親は「先生がみえたわよ。晃いるの？」と勇気を絞った声をかけながら、ダイニングルームのドアを開けられます。しかし、晃からは返事はなくて、母親のおびえがぐんぐん高まっていくのが背中に感じられます。私のすぐあとを小さくなりながら父親がはいつてきたのですが、晃の緊張は父親の姿を見て頂点に達したかのようです。いきなり、口を一の字に結んで目をつぶってしまいました。家族全員の緊張のボルテージは今にも臨界点に達しそうです。そこで、私は爆発がおこるまえにと、なるべく威勢よく晃に話しかけることからはじめてみました。「やあ、また来たよ。この二週間どうしてた？今度は時間をたっぷりとって来たからね。これから、どうしてやっていったらいいのか、みんなでゆっくり話してみようよ」と。すると、晃は目をつぶったままで演説をはじめます。「あの入院は単に不覚であったただけだ。偶然のできごとであって、入院させられたのではない」と、まるで予言者の宣告のような口調です。「同じことは二度とおきない。やられたらやり返す。そのための準備は何段階にもわたってでき上がっている！」「(父親を) 家に入れないことで弱らしていくという作戦は自分のやりとげようとしていることの一つ。あと一つは警察を呼ぶこと。」

そこまでいっきにしゃべると、ぐあつと目を見開いて「その男がいるとむかむかする！」と怒鳴ります。その声の大きさと荒々しさに私も反射的に少しだけ飛び上がって「僕のこと？」と顔を指差しながら聞くと、「ちがう、その後ろの男だ！」とさらに大きな声でどなるのです。父親は震え上がっています。

ここで私は、父親に部屋を出してもらうことにしました。先に述べたように、この次の面接（三回目の面接）のあと、母親も家を出ますので、四回目以後は私と晃と二人だけの面接になるのです。いわば自然な流れで「親子のあいだに適切な距離をつくる」ということができあがって、治療の進展のためには好都合なことでした。父親だけを抜いて母親だけが面接に参加するという方法よりも同時に二人を抜くというほうが、彼の中の「両親へのゆがんだ関係を改善していく」のには効果的であったといえるでしょう。治療者が介在して両親と晃という三人の「家族修正のための会話」が進められていくなかで「父親だけが追い出される」ということがおこったあとでは、「母親は家を出なくては、晃との関係において危険である」という事態が明らかになって「同時に二人が晃の周りから遠ざかる」と

いうことになった、と考えてよいでしょう。こうして、両親と晃との適切な距離がつけられていくことになったのです。

●——大事になるまで「ほっとけ、うるさい！」

父親と母親の関係を、もう少し会話の中から明らかにしてみましよう。

私と母親の二人で話しています。場所は駅のそばのレストランで、父親が来るまで話していたのか、あるいはこの日は都合が悪くて父親は来なかったのか、はっきりしませんが、「主人がいない」ということから、母親は父親のことが話しやすくなっているのです。

母 晃が悪いんじゃないって最初から思っていましたけど、主人にそうやって相談したって主人はいつも怒ってねえ。もう、ここまできてだいじになるまでは、「ほっとけ、うるさい！」ってぐあい。少し自分の耳の痛いことを言いますと「離婚だ！」って大声でどなるんです。

私 ああ、そうですか。

母 とてもじゃない、感情的なわがままな人なんですよ。

私 そこで、お母さんは一人ががんばることになるんですね？

母 そうです。私がかんばんなきゃっていう気持ちになるんですね。主人は乗ってこないんです。自分の耳の痛いことを少しでも言うともう「離婚だ、うるさい！」が子どもの前でもはじまりますからね。

私 ああ、子どもの前でもね。

母 ええ、子どもの前だけでも大声を出してくれなきゃいいんですけど、もう、子どもがいたってなんだってぐわっとくるんです。がまんできないんです。

私 すると、子どもさんのほうはですよ、「僕がお父さんを追い出すほうがお母さんは喜ぶはずだ」ぐらいに思ってるかもしれませんね。

母 そうです。なんであんなお父さんに、お母さんはくつつくんだらうと思ってるみたいで。弟の学だって、もうあれです。A 病院にかかっているときに「ご夫婦で少しは旅行にでも行ってみたら」なんて言われまして、そしたらいいことになるかしらと思って出かけるときにね、学に「じゃあ旅行に行ってくるからね」っていうと

「うんいいよ、だけどお父さんと旅行するなんて気が知れないよ」って、こう言うんです。学も絶対主人とはでかけようとはしないんです。

私 ああ、そうですか。

母 ええ、「お父さんと一緒に行ったら、ろくなことないよ」って。自分にちょっと気にいらぬことがあると「わあーっ！」とこれ（感情的な爆発）ですからね。

### ●——性へのこだわり

父親嫌悪には、性的な感情からきている要素が大きかったのです。三回目の面接のときの、父親、母親、私の三人の会話をあげておきましょう。

私 晃君は「すべてが、お母さんが、かつてに楽しんだ結果だ」と言っていましたね。二回目の面接のときでしたか。

母 はい。

私 あれは、もうセックスのことだと思ふんですよ。彼が言う「楽しんだ」という言葉はね。

母 はい。

私 お母さんが、かつてにセックスしてね。自分ができたんだと。なぜ、お母さんはだらしぬことをするんだ、って感じの言葉だと思ふんですよね。「思春期の子どもたちにある独特の潔癖感」でもあると思ふんですけど。そうそう、お母さんに「自分の欲望のために」という言葉を使ったでしょう。

母 ええ、そうなんです。昨夜もそういうふうなことを言いました。

私 お父さんとお母さんの性関係に対してすごく嫌悪感をもっているわけですね。

父 それが、エディプスコンプレックスですか？

私 そうですね。

父 それに、その……ある時期まではね、ポルノ雑誌ちゅうのがすごくあったみたいなんです。

母 あったんです。

父 私は見てないんですけどね。

母 子供の引き出しの中に。

私 ああそうですか。

母 ええ。

父 それがですね。今までに自分で女の子にうまく声をかけられなかった、ということがあると思うんですね。それが反動として「あれだけ汚いことをやりやがって」となったんだと思うんです。けど本能ですから、彼の中にもあるわけなんですよね。

私 そうですよ。押さえられているけど、はげしくあると思います。

父 それをですね。ぐっと耐えるためにも、ものすごく苦しんでいるのではないかと私は感じるんですがね。

私 そうですね。

母 すごく、あの、なんていうか、そういう本を引き出しの中に、いっぱい入れてたんです。高校にはいった当時は、ところが、学校に行かなくなっからしばらく経って、私がなにげなく引き出しの中を見たら、あれだけあった本がきれいになくなってたんです。それで、その前後以来、もう、そういうものをいっさいけがらわしがるようになりました。

私 なるほどね。

父 けがらわしがるわけです。

私 その反動なんでしょうね。自分の中にあるものを消すためにそうになってしまうんでしょうね。ちょうど、学校の先生とか、お巡りさんとか、牧師さんとかで、極端に性感覚が歪んでいく人たちと同じ過程だといえますね。

父 そうですね。なるほど、だから自分がまず、コントロールできなかつた。

母 あの子の高校で、きっと、きれいなお嬢さんがいて、好きな人でもいたんじゃないかと思ってるんです。あの高校は自由な雰囲気、男女交際も結構さかんなんですよね。ところが、晃の場合にはうまく自分がとり入ることができない。そこで、ああいう男女関係なんてつまらないものなんだといって、自分をごまかす……。

父 否定するんです。わざと自分の心に言い聞かせるために否定するんだと思うんですね。

私 そうですね。そのとおりだと思います。そういう心理機制でしょうね。

母 だから、ひょっとして好きな人でもできたのかしらと思ったりしたんです。

父 まあ、一目ぼれもあるから、人間はとくに、高校生ともなるとね……。小学校の高学年だってあるんだから。

母 だから、そのため背の低いのも、大きなコンプレックスになっちゃった。

父 そう思うんです。そっちのほうに目が行ってですね。これが、特別に、まあ、映画俳優になるとか、現代のヒーローみたいにですね、パーッと目を引くような人間だったらと思うようなもんが、クローズアップしてきたのかなあっていう感じがするんですよ。

母 自分のほうから働きかけないで、座っていても相手のほうからきてくれないと、生きていけないような人だから。

父 だから、そのためにはすべてが整っていて、要するに「ちょっとなにかあったら全部だめなんだ」というようになってしまった……。

母 そうそう、ゼロか百かっていうね。

父 もう、完全にですね……。なんていうのかなあ、私もですね、こんなこと恥なんですけど、ある時期「これがだめだったらなにをやったってしょうがないじゃないか」というような、そういう考えをもった時期があったですね。

私 だれでも若いときにはそれがありますね。

父 そうですね。それが晃の場合は極端なわけでね、その……絶望的に「僕はもうだめなんだ」ということがね、非常に強く出てるみたいですね。

私 なるほどね。

父 だから案外、なんというか、女の子と気軽に話したりなんかできるようになると、案外、けろっと治っちゃうのかなあっていうようなね、そんな感じも僕にはあるんですけどね。意外にそんなところじゃないのかなって感じがね。

母 そうねえ、急にピタッとあの、あれ（性的な興味をそそる雑誌）がなくなったものね。

私 なるほどね。よく「性に対する罪悪感」みたいなのが育っちゃいますよね、青春期にね。そして、それを代償するために誇大的な構えが出てくるんですね。

父 ええ。

## ●——父親と瓜二つ

自分自身で「恥なんです」と述べているように、この父親にも高校時代に、家で荒れていたという経歴があるのです。しかも、晃の荒れていくようすが父親のたどった過程にそっくり同じようなのです。ですから父親としては、自分自身の内部体験に照らしあわせて晃の症状を考えていくことができたのではないかと思われれます。

ところで、父親の場合には、他の兄弟たちの力添えがあって立ち直られて、高校を卒業し、一流の大学を卒業されて社会人になっておられます。この差はどこからくるのでしょうか。私の推測は、父親の育った家族（このことを父親の「原家族」と表現します）の夫婦構造のほうが、この晃の家族の夫婦構造よりも「少し健康であった」ということだったのではないかと、ということです。夫婦の構造というのは相対関係ではあるのですが、父親に限って比較すると、「父の父」のほうが「晃の父」よりも健康であったのであろう、と推測することができます。すると、祖父・父・晃とつづく三世代にわたる関係の中で「社会適応していくための柔軟性」は徐々に欠如してきたということになります。もちろん「その男がどういう妻をめとったか」とか、「どういう兄弟姉妹関係があったのか」とか、「その子の育った学校をはじめとした社会環境の差はどうだったのか」などいろいろの要因もあるわけで、そう単純化はできないのですが。

母親は晃のことを女性関係のことをめぐって、「自分のほうから働きかけることができない。座っていても相手のほうから来てくれるような人がいないと、生きていけないような人」と言っているのですが、この父親には、まったく同じようなエピソードがあります。それは、母親が結婚してはじめて父親の兄弟たちと魚釣りに行ったときのことなのですが、母親の言葉のままに述べてみましょう。「びっくりしたのはですね。主人はなにもしないんですよ。みんな、兄たちが手伝ってくれるんですね。餌をつけるのも、釣れたときに魚を釣針からはずすのも、兄たちが代わり番こにしてやるんですよ。主人はただ釣竿を持って釣り上げるだけなんです。私はびっくりして、というか、あきれ果ててしまいましたね。だって主人が釣れたよ、と言うと、だれかが自分のはほっぼらかしてはずしに来てくれるんですもの。」これは、晃が「座っていて、相手のほうから来てくれるのを待っている」と、そっくり瓜二つでしょう。

私と面接を重ねるたびに晃がよくなっていくようすを聞かれて、父親の喜びようはなかったのです。かなりあとからですが、その父親の口から、「僕は晃がああなっちはじめて、自分のいろいろのこ

とに気づかされましたよ。ほんとうにいろいろと苦勞してきましたが、よかったと思っています」という言葉が聞かれたのでした。

四回目のときの会話の記録を拾ってみましょう。

私 いやあ、前回のときに比べたら、すごく表情に余裕があって、笑顔が見られましたよ。

父 あっ、そうですかね。

母 ああ、そうですか！

私 二回目の面接までは、僕に対して「すぐにでも帰れ」って言い方だったでしょう。

母 ええ。

私 今日は全然「帰れ」って出なかったし、けわしい表情もなかったですよ。

母 だって二回目のときだって、先生が帰られたあと、夕刊を自分で取りに出たんですよ。そんなこといまだかつてなかったですよ。

父 ああ、なかった、なかった。

母 家に帰ってみて、夕刊とろうと思ったらなかったから「あら、今日忘れたのかしら」って思って部屋に上がってみたら、テレビのところにきちっと置いてあるの。あれ、これは晁の置き方だって、すぐわかるんです。外へ出る気になったんですね。今まで出たことがない子が。その後、二回ほど犬のところに出てるのを私見たんです。いつもは家の中からあやしていたんです。

私 ああ、そうですか。

母 ええ。

父 それが玄関へ回って出ていくというのはそうとうの変化です。

母 それで、二回目のとき「餌をやってたんだ」って自分から言ったんです。外部の人からの接触があると気分が少し浮くんですよ。

父 イヤー、僕はそれは単に「外部の人からの接触があったから」というだけではないんじゃないかと思うな。すごくあの、内部から変化してると思いますよ。

母 よくなったんじゃない？長いあいだ、家の人としか、家の人も私ぐらいしか話す人がいなかったんだから。

父 うーん、それでね、今までのパターンでね、そんなにすぐにですね、先生から聞いて、それで、「あっ、そうですか」とかいうの

はないと思うんだ。

母 そう、そう、そう、素直に自分の型を変えられないってところがある。

私 そんなことをするのは、沽券にかかわるわけですね？

母 そう、そういうこと。そう、そういえばドッグフード持ってね、玄関にはいってきて、私とバタッと玄関で顔を合わせたの。そしたらなにか下を向いて、バツの悪そうな顔をしてるの。どうしたのかなあって思ったの。翌日見たら、犬のおわんの中にドッグフードがどさっとはいっていたから、見られてバツが悪かったんですね、あれ。

私 ああ、そうか。

母 ええ。

父 ほんとうによくなってきているんですが、一般的に言えば、もうそうとうびびっちゃいますよね。はじめのときのようないんな態度に出られたんでは。

私 そうですね。

父 ふつうだったら、そういうことを経験してない人が見ればね、みんな逃げ出しますよ。

私 ええ、あの言葉を聞けばですねえ。

母 ええ、真にうけますからね。

私 今にも刃物が飛んできそうに見えますものねえ。お父さんも、お母さんも「殺されることなどこわがってないぞ」という姿勢を見せられたときに「おどしじゃないんだ」って言ってましたよね。「口だけじゃないんだ」って……。

父 ええ、そうでしたね。

### ●——なぜ警察への電話を母親に強要するのか

母親が家を出て四ヵ月目の三月中旬の往診のころには、晃の生活はずいぶんと改善されていました。風呂にもはいるし、ひげもさっぱりと剃って、顔色も健康色になっていました。しかし、このときにもまだ晃は「母親に電話をさせること」にこだわっていました。「僕は母を電話のところに引っ張って行って、受話器を耳にあてがったのに動かなかったんです。そんなことがあって、三、四日したら、ふいをつかれて忽然といなくなりました。はらわたが煮えくり返るような気持ちです」というぐあいに。



二ヵ月目のころ、「僕が同席して晃君と話してみませんか」と母親に提案してみたのですが、「まだ晃とは会いたくない。今会ったのでは、すぐに元に戻ってしまいそうだから」と言われます。そこで、私は手紙を書いてみることを勧めておいたのです。母親は弟の学から晃についての情報はいろいろ聞いておられます。「まだ風呂にははいていない」とか、「洗濯もしなくてシャツは汚れている」などなど。そして、「手紙はちゃんと読んでいるらしい」ということが学から伝えられています。手紙には「生まれたときのこと」「小学校に入学したときのこと」「A 病院に入院させることになった経緯」「すべてのことが晃のことを考えてしたことだということだけはわかってほしい」などということが書かれていたらしいのですが、学によると「お兄ちゃんはお母さんの手紙を読んで考え込んでいるように見えたよ」というのです。

それで私は、三月中旬の往診のときに「母親と電話で話させる」という方法をとって見たのです。まず私が母親に電話をして、「晃君と代わります」という方法で話させたのですが、このときにもまだ警察への電話のことで一方的な攻撃をするばかりで、親子の会話として成り立つものではありませんでした。

ところで、晃が母親に「警察へ電話しろ！」と強要することの意味はなんなのでしょう。二ヵ月目のころの往診の記録から拾ってみましょう。「警察のことが解決しないと前に進めない」と晃が言うので、私は「なぜかな？」と聞いているところです。

晃 まったく前進できないわけではないんです。しかし大きな障害なんです。目の前に具体的なものがあればそういうものじゃないのかと思うんです。

私 うん、お母さんを介せずにはそのことは解決できないの？

晃 それはたぶんどけない。どうにかしてかということ、自然な私たちをとらないといけないから。やるのは僕なんだけど、つまり主役は僕なんだけど、やるためにはほかの人間が必要なんです。「電話する」とかほんのちょっとしたことをしてくれればいい。それは自分ではできない。だから母に強要したんです。そしたら、やらずに出ていったから、僕は困った。非常にひきょうな感じです。

私 うん、お母さんにしてみれば、君がしようとしていることを理解できなかったわけだ。

晃 うん、しかしそれは本人に聞いてみないとわからない。その

ことを解決して出ていったのなら、まだ汚いとまではいかないんだけど。あの体験（警察に強制的に精神病院に連れていかれたこと）を一〇〇%体験できたのは僕だけですからね。他の人には六〇%もわからないと思う。他の人から見たらくだらないことでも、僕にとってはたいせつなことなんです。なによりダメージを受けたのは僕、他の人にはなんのこともない。父や弟には痛くもかゆくもないことで、必死になっているのは僕だけなんですから。僕一人がやっきになっている……。僕にとってみれば、電話をすることくらいしたことはないのに、どうして知らないうちにひきょうに逃げたか、というイメージですね。それをせずに逃亡したというのはものすごく腹が立つ。逃げるとするのは本人にとっては最高のこと、しかし相手にとっては最大に腹の立つことですよ。

私 わかりました。それらの君の思いをお母さんに伝えておきます。ほかにはないですか、伝えたいこと？

晃 電話もせずに出ていった。それをしてから出ていったというのであれば……。それをしなくちゃいけない。させなくちゃいけない。僕のためを思って電話をしなかったと言っていたけど、そういうことは信じられない。ただの飾り。なにか浮いたような。

私 そうか。ちょっと質問するけどさ。お母さんに電話させて警察を呼ぶというわけだよね。

晃 そうです。

私 その場合にさ、君を病院まで連れていった警察関連中でなくてもいいの？

晃 できれば同じ警察官がいい。しかし、もし変わっていても、あいつらが全力をあげたとしても捕まらない、ということを証明したいわけです。同じ人間であることにこしたことはないけれど、同じ警察の人間ならいい。しかし、僕一人じゃできないんです。だれかがいて、そして警察が僕を捕まえようとして、そして「僕は捕まらない」ということを証明したいんです。この屈辱のまま生きていくことは人間をしての恥だから。

私はこの言葉を聞いて、やはりこの発想は周囲には「性的な感情が強くだよっている」という印象を強くしました。つまり、晃は「だれかがいて、そのことを証明してもらわないといけない」と表現していますが、そのだれかとは母親でしかありえないのです。つまり、「お母さんの目の前で自分が警察官に捕まえられた」というこ

とは「男としての弱さ」を母親に見せつけてしまったことになるのです。それはなにがあっても、「自分はそんな弱い男ではないんだ、ということを証明しなおさなければならないこと」なのです。晃にとっての母親は「自分のすべてを支えるもの」であったのです。

わたしは先に述べたように、三月中旬の面接のときに、晃と母親を電話で話させてみたのですが、会話は不成立に終わったのでした。電話はいつまでも一方的な晃の攻撃のままでしたので、私のほうが少しだけ強引に電話を切ってしまいました。そして、「家族全員で公園で話してみようか」と提案してみました。公園でというのは、母親のほうが家で会うことに対してはまだ抵抗が大きかったからです。それと、私のほうにも「他人がいる場所のほうが晃の興奮も少なからう」という判断があったのです。これに対して晃は、「公園で会うということは、あの人にとっては意味があることかもしれない。しかし僕の目標はなににも達成されない。僕にとってはマイナスとはいわないまでもプラスになることはない」と答えます。しかし、これは彼の独特の言い回しであって、ほんとうは会いたいのです。私が「では会ってくれないんですか？」と質問すると「いえ、会いますよ。会ってくれと言えば」と答えたのでした。

### ●——親しかつたいとこと一緒に食事

ところが、この公園で会うという私の提案は、母親の不安から実現されません。母親は「晃が会っても意味がないというのであれば、私も会わない」と言われるのですが、実際には暴力に至り、今までの辛抱がだいなしになってしまうのではないかと心配しておられたようなのです。しかし、「晃が会っても意味がないというのであれば、私も会わない」という母親の言葉は妙です。そのことは父親も気づかれて、「何か、対等みたいな気持ちをもっていることになるじゃないか！」と指摘しておられます。この父親の言葉も、三人のエティクス関係を表現しているようです。

「公園で会う」ということは実現しなかったものの、母親にとっては晃の顔を四ヶ月も見えていないということは気のとがめることでした。そこで「お母さんが安心して晃君と会うために、親戚のだれかが同席するなどの方法はとれないだろうか」と私から提案することになりました。すると父親のほうから、「それなら僕の兄の子どもで、二五歳になる晃のいとこがいます。小さなころはよく遊んでいたん

です」という返事が返ります。それに対して母親は、「うん、それならいい。公園で会うというのはどうしても抵抗があったの」と答えることになりました。

こうして約一月後に私を交えて、父親、母親、いとこ、本人の五人で交流をもつという計画が実現されることになりました。いつものように、まずはじめに駅前のレストランで、四人で話し合っ、その後、いとこと私の二人で晁の座っているダイニングルームを訪れました。晁は久しぶりに合ういところにはじめのうちびっくりしていたようですが、やがて和やかな会話に発展していきます。頃合いをみて、私のほうから「じつはご両親も近くに来ておられるんだけど、一緒に食事に行かない？もう一時が近いでしょう。僕もね、このお兄さんも昼ごはん食べていないんだよ。君だってたまにはうまいものを外に食べに行ったらいいじゃない？」とやってみました。すると晁はほんとうに和やかな笑顔で「いいですよ」と答えてくれたのです。

私たちは郊外のファミリーレストランへと向かうことになったのですが、なんと晁は抵抗もなく父親の運転する車に乗ったのです。私たちは五人で「釜飯定食」を食べました。私は臍臓が少し悪いので、脂物が食べられません。それで、小さな皿に盛って出たてんぷらを晁に譲りました。すると「僕はこれ大好きなんです」と言って食べてくれたのでした。これ以後の晁の変化は長足でした。

## ●——最後の面接

最後の面接で、私は「警察官につかまえられたことの失敗」のことを高校受験の失敗と結びつけて聞いてみました。すると、晁は次のように答えてくれました。「似ているかもわからないけど。しかし、警察のほうは直接的なもの、精神的なものではなくて肉体的なものだから……。高校受験のほうは鮮明じゃないけど、意外にのっとりとしていて、しつこくしているかなあ、と思う。高校受験のほうは今でも夢に出る」と、すごく素直に述べてくれます。そして中学時代や高校時代のことを自分から次々に述べてくれました。

「僕は、小学六年のときに田舎から出てきて遅れていたんです。第一にあったのが、同年代の人間と自分が差があるなあ、ということでした。追いつかないといけない、これも遅れている、これも劣っ

ていると、閉鎖的な勉強をして視野が狭くなって、へんなところを  
どうどう巡りしていたように思います。自分より優秀なやつへの恐  
怖感があって、それでどんどん視野が狭くなって、悪循環的なこと  
をしてきたんです。高校になって、勉強をしても本気になれなくな  
った。中学のころまではむずかしい数学の問題などを解いて得意に  
なれる、ということがあったけど。なにか、絵を眺めているような、  
絵の中を行き来しているような、そんな感覚でした。」

「なんのために努力するのかわからない。こんなことに努力してみ  
ても意味がないんじゃないか、とか考えてしまう。会社にいる人な  
ら部長になるとか出世するとか、受験生なら大学を受けるとか、そ  
んな目標を立ててやる。自分の行動を外から見ると、ノラネコとか  
ノライヌとか、そういうものと重なって見えてきて……。変に客観  
的に見えてきて、これからの一〇年間をどうやって生きていくのか  
なあ、と思うことが多いんです。そうすると、まだ昔のほうがよか  
った、と思うんです。変な劣等感があったけど、それでも一所懸命  
やっていたから。今はどうしても、あれほど一所懸命になれないん  
です。」

私はこの話のあとに、性のことに少しだけ触れておきました。こ  
の話に関しては前回の面接のときに彼のほうから一部出されていた  
のでした。それは「外出がしにくい理由の一つ」として、「ちょうど  
家を出て行くときに、性を特別に扱った本を並べている店の前を通  
らなくてはならないからです」という表現で話したのでした。そこ  
で、今回は少しだけ深めてみようと思ったのです。もっとも微妙な  
ことですので、「性のことも少しかたくなになって考えていたように  
思えるね。自分でももう気づいてるみたいだけど、もう少し解放さ  
れていいのかもしれない。そのことも今度は考えてみたら」として  
おいたのです。最後に、彼に「信州のお祖母ちゃんのうちをぜひ訪  
ねてみるように」と提案してみました。それは母方の祖母のうちな  
のですが、幼いころにはよく甘えた祖母なのです。晃はこの旅行で、  
はじめてダイニングルームから離れることができるようになるので  
す。

## 第二章 親子でピース

次に、髪の毛をライオンの鬣のように染め上げてめちやくちやに荒れていた中学二年の少女の話をしてみましょう。二回目の往診で強制的な入院をさせ、約一ヵ月で退院することができたケースです。この子の名前は、山下昭子ということにしましょう。

### ●——少女に支配される家族

山下家の家族は四人です。父親は四三歳、母親は四〇歳。二人兄弟で上に高校一年生の兄がいます。兄は成績がよくて、まじめです。父親のほうの祖母は時々遊びに来るのですが、この祖母から、よく、「どうして兄妹なのにこんなにちがうもんか」と言われるのです。この祖母はかなり自己中心的に行動し、ずけずけとものを言う人なのです。しかし、さすがに昭子の前で直接にはそんなことを言わないけれど、祖母がみんなに向かってそう言っていることは、昭子にはちゃんと勘でわかります。

この家に遊びに来る人は、ほかの父親の弟にあたる叔父がいます。昭子はこの叔父が好きです。いまは単に「好き」ですが、小学校のころまでは「大好き」でした。父親は国立の大学を出ていて、大企業に勤めているのですが、この叔父は勉強が好きではなかったのも、高校卒業のまま父親の跡取りをしているのです。それは祖父が創業した製麺工場です。けっして景気は上々というわけではありませんが、まあ生活に困らないだけの仕事はつづけていけて、のんきな叔父です。この叔父が遊びに来てくれると、家の中はまるで夜が明けたように明るくなっていたものでした。この叔父は肩車やお相撲をしてくれるし、キャッチボールもしてくれるのです。父親は昭子たちに対してあれやこれやうるさいことは言うものの、肩車をすることやお相撲をすることなど、生まれてこのかた一度もないのです。しかし、昭子の父親も、この叔父が来てくれるのを内心喜んでいたようなのです。

「おとなのくせにそんなことはなかり」と思うかもしれませんが、父親は「子どもとからだをくっつけて遊ぶ」というようなことがどうしてもできないのです。それで、自分の弟である叔父が昭子や悟（昭子の兄）などをからかったりして、ふざけているのを見て、そっとうらやましそうにしていたというのです。

ところで、父親はスポーツがまったくできないのかというと、け

っしてそうではありません。三〇歳近くになってからはじめたのですが、スキーだって、登山だって得意なのです。赤いスポーツカーも乗り回していて、一見とてもダンディですらあります。ところが、注目すべきことは、これらの「かっこいいこと」はすべて家族と一緒ににはしてくれないのです。友だちとするのでもなく、すべて一人で出かけて行って楽しんでくるのです。

ただ一回だけ、家族と一緒に出かけたことがあります。それは母親が「私たちも一緒にスキーに連れて行って」と強く頼んでようやく実現したことでした。「このときの子どもたちの喜びようはなくて、あのときのうれしさは忘れられない」と母親は述べていますが、それではどうしてそういう「楽しいこと」が一回きりになってしまったのでしょうか。ここに「この家族の中の大きな問題がある」と推測することができます。「あのときは楽しかった。もう一度連れて行って」と言えない母親、母親から要求されなくても「よし、今年も出かけよう」と言えない父親、という二人のこの関係は全然改善されないままに、むしろ固定してしまっていて、年々強化され歪められていった、といえそうです。

### ●——ババアもジジイも今日は帰らねえよ！

私が昭子の家をはじめて訪問したのは、夏の暑い盛りでした。父親から電話で相談を受けて、「まずご家庭を訪問してみましよう」ということになったのです。この日は、大阪でもう一人の患者さんを診察して、たしか夕方五時ごろ、この子の住んでいる街にたどり着いたのです。はじめての往診ですので、この家の最寄りの駅に着いたら私のほうから電話をして、駅まで父親に迎えに来てもらうというはずになっていたのです。ところが、その電話をするのにも一つの困難があったのです。というのが、電話はこの昭子が占領していて、めったなことがなければ家族の者がとることはできなかったのです。そのために親族間のいろいろの連絡もとることができずに、昭子の異常さは祖母にも叔父にも知れわたることになっていました。

昭子に「電話は私が一番はじめにとるからね。絶対に他の人がとってはいけない！」と命令されていて、その命令に家族全員が従わされているのです。家族としては「あとで暴れられてはかなわない」というわけで、そんなめっちゃくちゃな命令にしぶしぶと従っていた

というわけです。そんな命令に「父親も母親も兄もみんな従わされる」というあたりが異常にみえるでしょうが、じつはこんな家族はしばしば経験します。そうです。第一章の川上家がまさにそうだったのです。

祖母は「家族みんな、なんていうことだ！とくに親父がなんてだらしがないんだ。娘一人にふり回されて」と言うことになります。しかし、じつは昭子の傍若無人ぶりは、この祖母のそれに似ていなくもありません。

もしかしたらみなさんも「まるで女王さまのように命令して家族みんなをこき使っている」昭子の気持ちのことが想像できるでしょう。そしてまた、家族がそれに抵抗もなく従っているのを見て、昭子が「さらにいらだち、怒り、もっと家族に対して命令してしまいたくなる気持ち」のことも想像できるでしょう。しかし、ちょっと、横道にそれました。まあ、それはあとで述べることにして、話を元に戻しましょう。

電話の話でした。昭子に独占されているために、私は山下家に電話を直接することができなかったわけです。そこで、連絡するときには隣の家に電話して、そこから両親を呼んでもらう、ということになっていたのです。ところが、この日の私は少し疲れていたとみえて、昭子の家の電話番号とお隣の電話番号とをとりちがえて、直接、昭子の家にかけてしまったのです。そして、その電話に昭子本人が出ることになったのです。このことはしかし、むしろ幸運といえれば幸運でもあったのですが、やりとりは次のようでした。

「山下です」という返事にびっくりしながらも、「ああ、山下さんのお宅ですね。ことらは、宮崎の水野というものですが、お母さんかお父さんはおられませんか？」と、平静をよそおいながらはじめると、「宮崎？水野？そんなもの知らないね。だれもいないよ！」と心臓に水をぶちかけられるようなドスのきいた声です。ちょっとどぎまぎしながら、「じゃあ、また、お電話しますので、よろしく」とあわてて切ろうとすると、「ババアもジジイも今日は帰らねえよ！」とどなられたのです。このようにして私は、けがの功名で、簡単ながら昭子と直接メッセージを交わすことができたのです。このことは、昭子が私たちの働きかけを受け入れていくにあたって、いくらかの準備をするきっかけとなっているのだと思います。「宮崎？水野？そんなもの知らないね」という言葉を吐いた相手として、私は彼女の記憶の中に残されているわけですから。



## ●——母親だけが離れて座る

昭子の家は、ごくふつうの新興団地の中にありました。五〇～七〇坪前後に区切られた敷地の中に三〇坪ばかりの二階建ての家がぎっしりと建っています。玄関からはいると、すぐ横に床の間のある応接間がありました。昼のこの部屋がフォーマルなお客さんを招く部屋なのでしょうが、家族は私をそこに通さなければならないのかどうか迷っておられたようです。額の汗を拭きながらそのようすを感じとって、私は、「すみませんが、ちょっと足が痛いので、できれば椅子があってくつろいだ部屋のほうがいいのですが」と、食卓と応接椅子のおいてあるLDKの部屋に通していただきました。これは、少しずつうしくみえるかもしれませんが、むしろ「堅苦しく考えないで、気楽にいきましょう」という私の気持ちを伝えるのに役立ったようです。

この部屋で面接した状況から説明しましょう。LDKのこの部屋は東側の窓から西側の窓までぶち抜きの大きな部屋になっています。東の窓側に流しがあって、六人掛けの食卓がすぐその前にあります。そして、四点セットの応接椅子がその隣に一～二メートルの空間をおいて配置されていて西側の窓に面しているのです。この窓の外には小さな花壇をつくるほどの空き地があって、あさがおやカンナやコスモスやといった草花が見えてよさそうなのですが、今のこの家にはそんな心の余裕はないのでしょう。

応接セットの北側の壁は本棚になっています。この本棚は天井まで届く高いもので、この裏側の部屋が夫婦の寝室になっているようです。父親は化学薬品メーカーにお勤めなのですが、専門書が半分、専門以外では文学、経済それに心理学関係の本が並んでいます。文学や経済関係の本はあまり統一のある本ではなくて、かなりの乱読者のようです。私の本もその中に並んでいます。

本棚のすぐ前に三人掛けの長椅子があって、テーブルを挟んで一人掛けの椅子が二つ並んでいるのです。この応接セットへの四人の人間の座り方に大きな特徴がありました。つまり、長椅子に父親と祖母が座り、テーブルを挟んで私が一人掛けの椅子に座って対面します。私の横にもう一つの一人掛けの椅子が空くのですが、母親はそこに座らず、私たち三人から少し距離を置いて板敷きのここに座ってくださいませんか」とやってみました。すると、「いいえ、ここ

でいいです。」と、まるで遠慮するかのように言って動こうとしません。そこで私は「すみませんが、僕はここに座っていただいたほうが話しやすいのですが……」とやってみました。そこでようやく母親は「では指示に従いましょう」と言わんばかりに、腰を上げかけました。ところが、決然と座り直して、まるで「私はてこでも動きませんよ」とでも言わんばかりに、「すみません。私はこのほうが楽なので」と言い放ったのです。

こういう時には、もちろん私はこれ以上の要求をつづけることはしません。それどころか、ここでおきた「少なからずの気まずさ」をまぎらすために話題を転換したりして、雰囲気づくりの努力をしなければなりません。しかし、「このようなことがおこった」という事実、そして、そのことで父親からも祖母からも一言も発言がなかったという事実は、言葉にしなくても理解できる家族関係の中でのじつにいろいろなことを想像させてくれます。

この情景を想像すると、なにか感じるものがあるでしょう。「母親は家族から少し離れた位置に座るほうが落ち着く」というわけです。みなさんの家ではそういうことはありませんか？父親か母親が、他の家族と少し距離を置いて座るといようなことは。この場面では母親ですが、逆に父親のほうがそういう位置をとることも多いのです。あるいは、祖母がそうすることだってあります。私はいろいろの可能性を想像しながら、「家族の人びとが昭子についてどういうふうに考えているか」を家族からの訴えのままに聞くことからはじめてみました。ここで、話しはじめた最初の人には祖母だったということが、また「この家の中の一つの特徴」を明らかに示しています。

## ●——金を出せと暴れて

このときの会話は、次のようでした。

**祖母** この子は小学六年のころから、少しずつわがままになってきていますな。近所中を大騒ぎさせてしまったことがありましたですよ、小学六年のときだったですか……。あのときのこと、おまえ、話してみな。

**父** 先生の洋服にスープをぶっかけるとか、ありましたね。家に逃げ帰ってきて、後を追ってみえた先生たちに近所中に響くような声でどなり散らしたり。なんとかそのうちによくなるだろう、中学

にはいつて環境が変わればそのうちに……などと、そう考えていたのですが。一年のときまでは成績もまあまあで、どうにかよかったです。

**母** 中学一年の二学期に転校してきた「性格もよくて成績優秀な生徒」がいました。この人は岡田芳子とおっしゃるんですが、この子と仲よくなるんです。その子のお兄さんも、うちの兄と同じ年で、そんなことも手伝って仲よくなるんです。ところがもう一人の転校生で、ご主人のそこから母親と子どもだけで逃げて来ている子がいました。下に男の子が三人いて、全員の子どもが喘息らしいんですが……。その子、夏美ちゃんというんです。転校時から茶色の髪をしていて。その子とさえつきあっていなかったとしたら……と今でも思うんですが……。

あの子には転校生と仲よくしてやろうという優しさがあるんです。その子は家にも来ていました。そういうときは、「二階には絶対上げてはだめよ」と私は言っていたんです。ところが、言うことを聞いてくれなくて……。その子の影響を受けて、うちの子も一年の三学期に、はじめて髪を染めたのでした。そのときの担任が女の先生で、電話がありまして、「帰しましたので、染め直して帰してください」とのことだったのでした。そのときは染め直して登校したのです。ところが、そのうちに「お金、お金」と言うようになったんです。はじめのうちは、飲み食い、ポテトチップス、サイダーといったぐあいだったので……。そのうちに、隠れて友達の家でまた髪を染めてくる。学校の決まりでは、靴下は白でないといけない、それを赤や青など派手な色のを履いていく、というように、だんだん悪いほうになりました。

すると、祖母はその話は無視するようにして、はじめられます。

**祖母** 小さいときは、すぐに泣く子だったんですよ。すぐに口答えをしていました。よくしゃべる子で、大きくなったらアナウンサーになったらと言っていたくらいですよ。父親は、子どもに対して荒いんです。それに、いちいちくどく言う。この父親の下に四歳下の弟がいるんです。この息子は精麴業をしているんですが、時々この家にも来てくれるんです。昭子は学校から帰ってきてこの叔父さんの顔を見ると、喜んで飛んできていたですよ。ところが、これが帰ってきても見向きもしないですよ。（「これ」というのは、父親の

こと)

父 たしかに、子どもに対して、愛情が欠けていたなあ、と自分自身思います。思い返すと、「この馬鹿！」とか汚い罵声をよく浴びせていたと思います。

母 私は、「そんなふうには言わなくてもいいのにな……」と思いつつも、言い返せなかったんです。

祖母 昭子の気持ちを考えてやってくれよ。「ババアが嫌いだ」と言うので、自分のことかと思えば母親のことで……。

母 それはお母さん、近ごろの子どもは、みんなああ言うんですよ。けっして、うちばかりじゃないんですよ。

ここで母親への抗議の姿勢が強くなります。娘をかばう言葉になっていますが、祖母の言葉を「私を批判している」ととって出ていることがはっきりわかります。そして、これ以上祖母のかつてにはしゃべらせまいぞとばかりに、あわてるような、そして怒りを込めた口調で祖母の言葉をさえぎるのです。このあと、そのことをまるで気づかなかったような口調で父親がつづけます。これは祖母をかばうことも奥さんをかばうことにもなっています。

父 「お金を一万出せ、二万出せ」と言って親からもぎ取るんです。通信販売でも、二万とか、三万とか、今まで二回払っています。合計すると一〇万にはなりません。今回は三万五〇〇〇円のハンカチセット。少しまえには、テレビ、ビデオなど、それぞれ一〇万くらいのものでした。これらは交渉して返品させていただきましたけど。そう、そのまえに、犬が一〇万円ありました。

私 どうしてそんなに娘さんの言いなりになられるんですか？

父 お金を出さないと、暴れる、物を投げる……といったぐあいだ……。ラーメンの残りを、自分の部屋の窓から流すんです。バナナの皮、ちり紙、カセットテープの延したもの……なんでもかんでも、屋根一面に流すんです。

母 ごはんは、持って上がって食べていました。私のつくった料理は食べてくれません。自分で買って来たカップラーメンなどを自分の部屋に持って上がって食べるのです。そのラーメンの残りのつゆなどを屋根にザーと流して、とても汚かったです。ゴミ箱のゴミをその屋根にばらまいていたり、使ったナプキンまでも投げ捨ててあるのです。ほんとうに周囲の人たちに対して赤面したくなるほど

でしたが、私は昭子がないまにせつせとかたづけたものでした。もくもくとかたづけても二～三日するとまた、ゴミだらけ。そんなことのくりかえしでした。悪いときには、叱っていました。「お母さんたちは、ほんとはこんなこと言いたくないんだけど、あなたによくなってほしいから」と。すると、そのあとで「ごめんね」などとはじめのうちは言っていました。そのうちに、新しい洋服が増え、子どもを疑うことになります。どこからかかっばらってきたのではないかという疑いが。ところがそれが、親に対する不信感につながったのでは……と思います。わが子を疑うということがですね。

### ●——ひそひそ声の会話

この初回の往診のときは、昭子の面接はできませんでした。二回ほどそのチャンスをうかがったのですが、昭子の抵抗がかなり大きそうでした。こういう場合にはめんどくさいのですが、次の面接のために無理をしないことにしているのです。無理をして会ってみても、子どもの心に悪感情を残してしまっ、その後の面接のためによくないので、「今日、こうしてやって来たけど、今度のときは会ってくださいね。僕は今日は会いたくないという君の気持ちをだいにしますよ」ということにしておくのです。

一回は、母親に誘っていただきました。母親はおずおずと私が来ていることを伝えられたのですが、「会わねえよ」のひとことであきらめて下りてこられたのです。二回目は、彼女自身が自転車を押して窓の横をどうどうと通ってくれました。このときに声をかけることもできたのです。窓越しに見る彼女の髪の毛は雄ライオンのたてがみのように真っ赤に逆立っていて「なんと声をかけられようが、私は知らぬ、応じないぞ」という表情をしていました。そこで、無理に誘うことをあきらめたのです。

家族全員が今までひそひそ声で話しておられたのに、娘が家を出ていくと、声だけは急に夕立が通り過ぎたあとのように晴れ晴れとしてきます。しかし、本人とは面接もしてもらえずに終わることになりそうだ、という不安が見え隠れしています。そこで、「僕がこの家にやって来たということを知ってくれただけで、昭子さんにとって大きな意味があると思います。今回は次に会うときのための準備だと考えていただきましょう。宮崎に帰ってから、僕のほうから手紙をよこしましょう。この次には会えるようにしてみたいと思いま

すから」といって不安を和らげてみたのでした。

母親は、昭子から母親に宛てられたメモをいくつか見せてくれました。そのうちの一つは、「お母さんへ／最近、私うるさく口答えしてごめんなさいね。／なんかイライラして。／お母さんにあたるつもりはないけど／言われるとつい……・ごめんなさいね」というものです。かわいらしい便箋に丸文字の少女体で書かれているのですが、隅っこに、「六三・六・二四 昭子 中学一年生」と鉛筆で記入してあります。これは母親が記入されたものだそうです。このあとの経過の記載もこのように克明に残されているのですが、このころまでは、こういうふうに紙に書いて、母親に心の内を訴えていたわけです。母親は「しかし今では完全に心を閉じてしまっているようで、最近の手紙もくれなくなりました」と深刻な表情で言われます。

### ●——宮崎においでよ

この第一回の面接のあとで、私は次のような手紙を昭子あてに書きました。

僕は九州・宮崎の医者です。先週の日曜日に、ご両親に依頼されて、あなたの家をたずねたのでした。電話で話すことができたし、ほんの一～二分だったけど、窓越しにあなたの顔を見ることができました。あなたの髪の毛にはびっくりしましたが、あなたの心の中に言いたいことがいっぱいあって、そのことをよく聞いてくれない親や学校の先生たちに対する不満を、どうして解消してよいのかわからなくて、イラツイているのがよくわかりました。あなたが出ていったあとで、お祖母さん、お母さん、お父さんの三人からいろいろなことを聞きました。それぞれの人の考えには勘ちがいもあるかもしれませんが、このままではたいへんなことになるからと考えて、手紙を書いているところです。

僕は一〇年以上まえから、思春期の子どもたちの登校拒否や非行の問題を研究してきました。そのことをまとめて、『葛藤する思春期』という本を最近書いたのですが、その本を読まれてご両親は僕に電話されたのです。あの日に、あなたと話せると一番うれしかったのですが、たいていの子どもたちが「家のなかに侵入してきた他人」と会うのを嫌がるということを知っていますので、無理に会おうとはしなかったのです。家族のみなさんたちのお話を聞いて、あ

なた自身が「今のままの自分でよいはずはない」と考えて、「どうにかしよう」と苦心している」ということが僕にはよくわかりました。つまり、あなたは今苦しい最中なのでしょうが、それはあなただけではなくて、あなたの家の人たちはそれぞれ同じように苦しんでいるように思えます。

それは「あなたが悪いから」ではないようです。あなたがむしゃくしゃして勉強なんかしたくなくなっていくときに感じたものと同じものを、あなたの家の人それぞれが感じておられるように僕には思えます。たぶん、あなたのことを通して「この家はこれからどうなっていくのだろう」ということをみんなで考えさせられているのだ、と僕は感じました。

大人の世界はあなたにとっては、ずいぶんといいかげんで身勝手なものに思われるでしょう。まさにおとなは「その前のおとなたちにいじめられ、こき使われ、自分の感情を犠牲にさせられてきつづけたためにできあがった『できそこない』である」と考えてよいでしょう。自分たちの生き生きとした感情を失っているために、若者の気持ちをよく理解することができずに、子どもに対して「決めつけたもの言い」をしてしまうのです。それに対して反抗されると、子どもに対して余裕をもって理解を示すことができず、おとなの権威をふりかざすことになっています。お巡りさんや、学校の「センコウ」にはいやなやつが多いでしょう。お母さんたちから聞くとところによると、あなたのことをよく考えてくださるよい先生も何人もおられたということですが……。一般的に言って、おとなというのはかってで横暴なものです。しかし、この人たちは、「あなたの心の中をゆっくり見て、一緒に考えてみよう」という余裕を失っておられるのです。もう少しあなたがおとなになったら、このおとなたちをむしろ「かわいそうな人なんだなあ」と見るようになるでしょう。ところが今までのあなたはまだ子どもだったので、「そんなしょうのないおとなたち」に対してまともに怒ってしまっていたのだと思います。そして、「傷つくのは自分自身であった」なんて、なんとばかばかしいことだったことでしょう。近いうちにまた行きますので、ぜひ、今度は会って話をしてみてください。

仕事をしたいというのであれば、それをつづけてみるのもいいでしょう。学校を出直したいというのであれば、それに挑戦するのもいいでしょう。しかし、あなたはまだ一四歳なのですから、まだまだのんびりと考えていてもいい年なのです。なにも、あくせくと働

かなければならない年ではないのです。もっともっと親に甘えなさい。

この僕たちの診療所では、一二歳から二〇歳くらいの子どもたちが一七，八人ばかりいて、おのおの好きなように生きています。院内に模擬教室があって受験勉強をしている子もいれば、オートバイの免許をとる勉強をしている子もいます。高校に行かずに大学に行くのだとって「大学入学資格検定」の勉強をしている子もいます。診療所のすぐ下にある海で泳いだり、釣りをしたり、山道を走ったりしている子もいます。ここからバイトに行っている子も、学校に通っている子もいるのです。

ここでは、どんな過ごし方をしてもいいのですが、あなたもここで「今の時間」を過ごしてみるのもいいかもしれませんよ。よく考えてみてください。では、お会いできる日を待っています。

### ●——てめえ！水野に洗脳されたな！

昭子は私に対してなんの返事もくれませんでした。そのことは予想していて、ただ手紙に目を通してくれさえすればいい、それだけで後日役立つ日が来るだろうと考えてしたことです。ところが、私に対する昭子の感情は、両親の目に映るところでは逆にだんだん悪いものになっていったようです。というのが、昭子への今後の対応に関して、私は両親に次のようなことを提案しておきました。

一つは「子どもの中になにか両親に言いたいことがあるようです。その答えをどうにかしてさがしてみてください。昭子の口から直接出てくるのはむずかしいかもしれませんが、それが見つかれば話し合えるようになるまでじっとがまんして待つことがたいせつです。」

あと一つは「しかし、理屈の通らない要求を押しつけてきても、けっして今までのように受け入れることはしないこと。『たいていのことは許すけど、これだけは譲れない』という親としてのけじめを見せること。それに対してはげしい暴力が出るようであれば、父親が前面に出て、はげしい怒りを示し制止すること。」

以上の二つでした。この二つの提案を両親は、ほぼそのとおりに実行しようとしたらしく、そのために今までは母親が攻撃の対象であったのに、父親に矛先が向くようになります。そして、昭子にとって「水野」はえたいの知れない不気味な存在になっていったよ



うです。昭子は父親に向かって、「水野を家に来さすんじゃないぞ！」と言っています。それに対して父親は、「お前が悪いことをしなければな」と答える。すると、昭子は「悪いことをしなければいいんだろ」と返答しているのです。

家族以外のものが家族の中にはいつてきて、家族の自分に対する対応が変化していくということは、昭子にとって警戒しなければならないことだったのでしょう。父親は次のように述べています。「水野先生の指示で強く出るようにということでしたので、以前と態度を変えて昭子に接するようになりました。そしたら、昭子は私の態度の変化に気づき、『てめえ！水野に洗脳されたな！』と以前より強く私に当たるようになってきたのです。心よりいっそう私に対して閉じてきたように思えます。」

そういうわけで、私の二つの提案の実行は、なしくずしに崩れてしまったようです。そして「これだけは譲れないという親としてのけじめを実行していく」ことはできずに、ますます親は自信を失い、娘の症状は次々に悪化していくことになるのです。

私の手紙が着くか着かぬかの八月一日に、昭子と母親は取っ組み合いの大げんかをしています。母親が、預金通帳から七月に五万円引き出されているのを発見して、感情的に抗議するうち、取っ組み合いとなったのです。母は昭子に鋏を押しつけられ、腕に切り傷を負うことになりました。

## ●——二年生になってから急速に

昭子は一年生の三学期に髪の毛を赤く染めるのですが、二年生になった「この春」から悪くなるスピードは急速に速くなっています。母親が話すままにその経過を整理してみましょう。

このころから言葉づかいはますます荒々しくなり、「くそばばあ」「金くれ金。親は金を持っているもんだ！」「ないならてめえ働け！」「ウロウロするな、邪魔だからてめえ出ていけ！」などという言葉をつくようになっていました。学校を休んだり早退したり遅刻したりが多くなっていくのですが、五月のある日、家の玄関わきの窓の大きなガラスがメチャメチャに壊されたことがあります。外出から帰った母親はドロボウがはいったと思ったらしいのですが、昭子が早退して帰ってきたところ、鍵がかかっていたので家にはいるために「窓ガラスを割った」というのが事実であったのです。これは、

次のような流れの結果おこった事件です。

①「学校での遅刻、早退などの行状」をめぐって、両親は学校から呼び出しを受けた。②それを知って昭子は、「てめえら、学校に行くな！」「学校が呼び出してもシカトすりゃいいんだよ！」「てめえが学校に行ったら家出してやるからな！」などと言っていきまく。③それに対して父親は「わかった、行かないよ」とその場しのぎを言ってしまう。④そして、当然の結末ですが、こっそり学校へ行ったことが学校の先生を通してバレてしまう。⑤そこで、昭子は怒りを爆発させ、窓ガラスを割る……。そして、帰ってきた母親に向かって、茶碗や皿を投げるなど、自分のやりたいほうだいのことをやることになるわけです。

この事件のあと、彼女はますます反抗的になります。母親が頼んでもかたづけなど手伝うことはまったくなく、テレビの音もわざとガンガン高くして「俺様に命令するとはなにごとかよ」という態度になってしまうのです。母親のつくった食事を食べようとせずに、声をかけるのにも腫れ物に触るような気の使いようになっています。このころのことを母親は次のように述べています。「昭子が食事しようとしまいと、いつも夫、自分、息子、昭子の分と準備だけはしておきました。話しかけられる状態ではなかったので、『ごはんだよ』『ケーキあるけど食べない？』などと、できるだけサラッと言うよう心がけていました。ところが、お金の催促がだんだんふえて、『洋服代二万円』とか『調理実習代五〇〇〇円』などというようになっていきます。父親に聞くと、『やれよ』と言いますし、出し渋ると、味噌汁のはいった鍋を投げ付けたり、ポットを投げたり、テーブルの上のものすべてを落としたりするので、いけないと思いつつながら、やってしまうことになっていたのです。」

夏休みになると、赤かった髪をさらに脱色して真っ黄色くしてしまいい、はでな服を着て、眉毛は剃り落としオーデオロンを臭わせるようになります。そして夕方から街に出かけていくようになってしまします。ところが、これらの行動に対して「注意してもおさまらないので」両親は黙認のかたちになります。そこで、夜の外出はますます頻繁になっていくのです。

しかしここで注目しておかなければならないことは、毎晩いくら遅くなっても彼女は「家に帰って来てはいた」ということなのです。このところが非常に重要なことであって、「私はまだ子どもなんだよ」と親に向かって言いつづけていることになるのです。母親は父

親に向かって「尾行してみよう」と毎晩言っていたらしいのです。ところが、父親は「ダメだ。見つかったらどうするんだ。そのときの昭子が、想像できないのか！」などと言ってためらっていたというのです。

しばらくすると毎朝九時半ごろに家を出て、昼も帰ってこず、夜の七時か八時ごろようやく帰ってくるというようになります。親としては「なんだか電車に乗ってどこかへ行ってるようだけど……」ということくらいしかわからないのです。どこでなにをしているのか親にはさっぱりわからない、というような夏休みがつづくのです。そんななかで両親は私の書いた本を読まれて、電話されることになったのです。ところが、私が往診したあとも、親子関係はますますのっぴきならない方向へ進んでいきます。

### ●——強制入院を決心するまで

そこで、私はふたたび往診して、今回は強制的な入院をさせることになるのですが、このときの父親の電話での話は次のようでした。

九月二日のことですが、夜の七時ごろ外出し、午前二時三〇分ごろ帰宅しました。私は非常に不安になり、売春でもしているのではないかと心配でなりません。それで、次に外出するときは追跡してみようと考えたのです。

九月八日でしたか、やはり七時ごろ外出したので、つけてみたところ駅前まで自転車で行き、電車に乗ろうとしていました。そこをつかまえて家まで連れ戻しました。抵抗することもなく、私の後を「てめえ！ぶっ殺してやるからな」と何回も言いながらついてきました。ところが、突然、ゴミ捨て場に捨てられていた四本束ねてある蛍光灯を拾ってきて、それで私の頬のあたりを力いっぱいなぐりつけてきました。私は不意をつかれて防衛する間もなかったのですが、四本の蛍光灯は真っふたつに割れ、ガラスは粉々に散りました。私は昭子の手から残りの蛍光灯を取り上げるのに、ガラスで手を少し切ったほかはけがはありませんでしたが、翌日になって頬骨が腫れ上がっているのに気づきました。

昭子は家までついてくると、ふたたび出かけると言いました。かなり興奮していたので、私はあきらめて家にはいました。一五分くらいして昭子が戻ってきました。どうしたのかと思っていると、

ゴミ捨て場で私と争った時、八〇〇〇円入りの「札入れを落としたのでそれをよこせ」と言うのです。私はそんな金はお出せないとすると、包丁二本を持ち「早く出せ！」とテーブルに並べてあった夕食の皿をことごとく包丁で割り、包丁をナタのようにしてイスに切りつけ傷をつけました。それで、しかたなく八〇〇〇円を渡しましたが、そのまま二階に上がり、その日は外出しませんでした。翌日はやはり六時すぎに外出し、午前二時三〇分ごろ帰宅しております。それから昨夜九月一七日ですが、妻が昭子から強制的に預金通帳の口座番号を使われたと言うので、私は昭子を呼んで「なにに使うんだ」と聞いてみました。ところが、「うるせえ！てめえに言う必要はねえ」とカミソリをつかんで身構えました。私はカミソリを取り上げようとしたときに指を傷つけ出血しました。「口座を解約するぞ」と言うと、昭子は「そんなことしたら、てめえぶっ殺すぞ」と言って自分でドアのガラスを割ってしまったんです。昭子の腕の傷はこのときのものですが、傷の手当てもしないでそのまま眠り、翌日、登校したとき、学校の先生に付き添われて病院で手当てをしたのです。(後略)

この九月一七日のことを、母親は次のように述べています。

「預金通帳は渡せない」と言ったら、「家中をめちゃめちゃにしてもいいんだナ」と言い、私を踏んだり、けったりして興奮しました。私はその場をおさめるためにしかたなく、通帳を貸しました。昭子は口座番号をなにかに書き写し、わりと早く帰してくれました。その後、主人が怒って二階に上がっていきましたら、すぐにドタンバタンとすごい音が下まで響いてきます。悟（長男）と二人で、じっと待っておりました。そしたら、主人が下りてきました。主人の指から血が出ています。昭子が跡を追いかけるようにして降りてきて私たちのところに来ました。私は包丁を隠したりして見守っていました。

「昭子、口座番号いったいなにに使うんだい。教えなさい」と主人はまだ言っていました。「うるせーなんだっていいだろ！」と昭子。そのうち昭子は、自分で右手をガラス戸にぶち込んだようでした。威嚇の意味でガラスを割ったのでしょうが、昭子の腕から血が出ていました。主人は「昭子、血が出てる。手当てしなきゃ……」と言いましたが、昭子はそのまま二階へ上がり、あとは下りてきません

でした。

主人の指は昭子にカミソリで切られたというのです。救急病院で一針縫ってもらったのですが、昭子のほうは次の日、学校へ行き、養護の先生にみてもらったらしいのです。学校では手に負えないということで、病院で一五針ほど縫っていただいたということを知られました。

母親の言葉は次のようにつづきます。

数日後に銀行口座の件のことで、昭子がバイクを買おうとしていたことがわかりました。主人と二人で話し合っ、もう、これはがまんの限界だと思いました。それで、水野先生に急遽電話することになったのです。外から帰ってきた昭子に「今日、お父さんのところにバイクを買うのかという問い合わせがあった。昭子、これはいったいどういうことなんだ。一四歳ではバイクには乗れないんだよ……」と主人は言いました。すると昭子は「乗りてえんだから、いいんだよー」と言います。「お金はだれが払うんだ」「私が払うよ」「一四歳では乗れない」と、押し問答です。すると、「てめえの返事一つでバイクが受け取れるんだ、早く返事の電話をかけろ！」などと言うのです。悟もそばにいて、言ってくれたことは「昭子、おまえ一人の問題じゃないんだぞ。考えろ！一四歳では乗れないし、すぐ捕まるし、事故をおこして相手にけがをさせたり……どうなると思ってる！」主人も同じことを言っていました。そのときの昭子の態度は「そのときはそのときだ。つかまりや警察でも家裁でもどこへでも行くよ！」と、まるで話になりません。

なんとか、主人は、信販会社に小声で電話をかけたようでした。昭子は少し落ち着き、二階へ上がってしまいました。

### ●——座布団を頭に部屋へ駆け込む

以上が、家族が入院治療を決心するに至る経過ですが、母親と父親のあいだには十分な話し合いがないままに、父親だけの独断で私は呼ばれていたようです。母親がこのときの経過、そして入院させるときの私たちがとった行動を次のように記載しておられます。

私は夜になって、主人から「やむをえない。明日、水野先生に来てもらって、昭子を連れていってもらうことにした」と聞かされま

した。びっくりして、私はもっとくわしい話をしたいと思ったのですが、昭子に聞かれてしまうからといって、主人は話してくれないのです。「それなら外に出ましょうよ。もっとくわしく話して。それになにをしていいか」と頼むのですが、ダメだと言われて、それは実現しませんでした。私は自分の心の中で祈りました。急に悲しくなりました。洗面所で声を殺して泣いていました。主人も別のところで泣き悲しんでいました。

朝一〇時一〇分ごろ、水野先生と心理療法士の先生が来てくださいました。昭子は二階の自分の部屋でまだ寝ていたようすです。悟は高校でなにかの試験があるというので、八時ごろ出かけていなかったのです。そう、悟にも知らせていないのでした。水野先生が「担任の先生にも来てもらえませんか」と言われるので、私は学校に電話していました。このとき、昭子が下りてきて、途中で電話を切ってしまいます。「てめえ、とこにかけてんだよー」「担任の先生に……」「ふざけんじゃねー」と。そこで、「昭子、水野先生がいらしてるから」と言っていると水野先生が出てみえて、「電話してくれって言ったのは僕なんだよ、僕がお母さんに頼んだんだよ」と言ってくださいました。すると、「てめえ、なんなんだ他人のくせに」と、ものすごい言葉です。私たちには言ったことがあっても水野先生に対してもこのありさまと驚きました。「僕は話があるんだ君に……」「話なんかねー！」と。

そのうち二階に上がってしまって、階段から下にいる私たちに向かって、本や本箱、貯金箱やこたつ板、テーブルまで、いろいろなものを投げつけてきます。もうちょっとで水野先生には味噌樽が当たるところでした。

どうなることかと考えていたら、水野先生が「座布団を貸してください」と言われて、二階に上がろうとされます。私たちは「危険です」といって止めにかかったのですが、「危険を避けていてはなにもできません」と言って先頭に立たれます。二階の昭子のようすをうかがうと、だれかと電話でしゃべっているようすなので、水野先生、心理の先生、主人と三人で、それぞれ座布団を一つずつ防具代わりに持って、昭子の部屋へ忍びより駆け込みます。大きな怒鳴り声が聞こえていましたが、やがて、水野先生が鎮静剤を注射されたようで静まったのでした。

二度目の往診は、まさにこの記載のとおりだったのです。私が味噌樽を避けることができたのは、ほんの瞬間の幸運だったのです。母親の記載をつづけてみましょう。

昭子は「宮崎へ行きたくないよー」と泣いていました。そのまえに、水野先生とのやりとりで、水野先生に背を向けた状態で「私に行きたくないと言っているのに、てめえは連れていく気かよー」と言っていました。「うん、今日はなにがあっても、絶対連れていく」と水野先生。そのあとで昭子が私に向かって「宮崎に行きたくないよう」と言ったのです。

私は「お母さんたちに力がなくて、水野先生にお願いしたんだ」ということを言いました。このときはじめて昭子が「お母さーん」と弱気な声になりました。「お母さん」と言ったのも何ヵ月ぶりでしょう。私の手をつかんで泣くのです。私はこらえ切れなくて泣いてしまいました。心を鬼にしてなんとか言わなきゃいけないと思う反面、昭子と抱き合っただけ泣き崩れてしまいたい心が押し上げてくるのです。いざ、出発ということになって、「お母さん早くしたくをしてください」と水野先生から言われ、荷物を用意しました。二階まで昭子と一緒に行きました。心理の先生もついて来られて、「CD やラジカセなどとか持っていいですよ」と言われ、昭子も宮崎に行く気になったようでした。

私は昭子が行ってしまうことで身を引きちぎられる思いで、必死に悲しみをこらえていました。しかし、あふれる涙をどうすることもできませんでした。

昭子の入院直後に母親から届いた手紙は、次のようです。前の文章と少しダブりますが、よく母親の気持ちが伝わってきますので、このまま載せておきます。

前略 水野先生、この度は、お忙しいところ遠方からはるばる私たちのために貴重な時間を割いて来てくださりましてありがとうございます。あの日、私は、ただオロオロするばかりでなにも手につかず、先生にもお見苦しいところを見せてしまい、申しわけありませんでした。昭子の中学校の担任の先生、生徒指導の先生にも急遽来てもらうことができ、水野先生のことよく理解してもらえたのでよかったですと思います。その後大阪空港までも ずいぶん時間がか

かって、先生もお疲れのところよけいにたいへんだったと思います。ほんとうに私たちのために精力的に尽くしてくださり、ありがたいことだと思っております。私たち夫婦では昭子を助ける力が弱いので、どうか、これからよろしく願いいたします。

それにしても、昭子をああまでして連れていかななくてはいけないと思ったときはつらかったです。注射をされておとなしくなった昭子としゃべったとき、ちょうど台所の食卓で私と向かい合うかたちでした。そのとき昭子は「おねがい、宮崎に行きたくないよー。お母さーん！」と泣いていました。私も、つらくて、つらくて泣いてしまいましたが、昭子もおすしを手づかみで、ぐちゃぐちゃにしていたときなので、濡れタオルでふいてやると、私の手をつかんですがってくるのです。こんなにつらいことはありません。私も、もっともって昭子を胸に抱いて泣き崩れてしまいたかったです。ずっと私のがまんしていたのです。水野先生や中学校の先生がいらっしゃる手前、そうなったのでしょうか……。それに昭子が「いい子になるから、言うことを聞くようにするから宮崎に連れていかないで」と言ったとき、それに対する私の言葉は、「お父さんや、お母さんに今までどんなことをしたの？」でした。それに対して、「だったら私にもそれと同じことをすればよかったじゃない」と、昭子。「もっと痛みのわかる人間になってね」と、私。一年ぶりぐらいに会話した言葉がこんなだなんて、今考えると、なんて私は冷たい母親なのだろうと思っています（中略）

私は先生とゆっくりお話できなくて、今思うと残念でした。ただ、おろおろしているばかりでしたから。よく腰をすえてお話をうかがえばよかったと後悔しています。主人は昭子を連れていくのは「フェリーで行く」と前日言っていたのです。飛行機で行くことになったときも、主人は大阪空港からは帰ってくると思っていたのです。宮崎まで一緒に行くというのはわかりませんでした。

「あんなことだったら私も一緒に行くのだった……」と思いました。たった一夜にしてことが決まってしまう、それに昭子に聞かれるから、と言ってよく話ができないまま、あの当日となり、主人は私には話したつもりになり、私はよく理解しないまま、当日となってしまったのでした。いまは少し冷静になりましたが、私自身もうんと悪いとこだらけなので、先生、教えてください。一度に治せなくても少しずつ努力しようと思います。昭子への手紙が入れてありますが、こちらからはそんなことしないほうがいいのでしょうか。先生



のご判断で処理してください。中は開けてあります。昨日は昭子がコレクトコールをかけてきて、ウォークマンとかノートやかわいい便箋などを送ってほしいと言ってきました。すぐ送ってやるつもりです。どうかこれからよろしく願いいたします。こちらから昭子へどのようにしたらよいか、電話などかかってにかけないほうがいいでしょうか。指示に従いますからよろしく願いします。

父親の気持ちも理解していただくために、昭子を宮崎まで連れてこられて帰られた直後の父親の手紙も読んでいただきましょう。

前略、先日はたいせつな連休を割いて駆けつけていただきまして、ほんとうにありがとうございました。禁断のバイクを食べさせずすみません。なんとお礼を言っていいのかわかりません。先生の著書を読み、先生の人柄に触れ、昭子を託せるのは先生しかいないと納得しながらも、距離の遠さや、さまざまの思いがブレーキになり、ここまでできてしまいました。そして、今回のバイクの件が引き金になり、先生の手数をわずらわしてしまいました。どうか先生「葛藤する昭子」を救ってください。灼熱の炎の中から助けてください。先生の指示には極力従いますので、どうぞよろしく願いいたします。

思い起こしますと一六年前の新婚旅行のときに宮崎の地を訪れ、青島を妻と散歩したことがありました。その当時とあまり変わらない青島を今、娘と同じコースを歩んでいます。娘は青島の神社でおみくじを引き、吉を当てました。一心に文面を読んでいましたが、どんな気持ちで読んでいるのかと思うと哀れになりました。なにかしら今の青島ではなく、一六年まえの青島がそのままタイムスリップして来たような不思議な気持ちでした。このように昭子が先生にお世話していただくのもなにかの縁なのかなと、娘と青島をめぐるながらしみじみと思いました。(後略)

### ●——野島診療所での入院生活

こうして昭子の入院生活が始まることになりました。宮崎市郊外のある野島診療所での入院生活のようすを、簡単に説明しておきましょう。

部屋は三人部屋が三つ、二人部屋が二つありますが、あとはすべ

て六畳の個室で、八室あります。食事は大食堂でとるのですが、食事時間は朝、昼、夜とも三〇分ほどの余裕をもたせて決められています。その時間帯に食べないと食事は取り下げられてしまうことになるのです。

就寝、起床の時間も決められていますし、朝は七時半からラジオ体操をすることになっています。しかし、これらの決まりに従うか否かは自分で決めればいいことで、いろいろの収容施設のようにスパルタ式の強制はしません。ただ時間が過ぎれば食事を食べられなくなってしまう。というあたりだけが、間接的な強制になっている、といえはいえるでしょう。

八時半からミーティングがあります。これは教室に集まって、その日一日のスケジュール、その他、職員から子どもたちへの要望などを伝える場です。また、子どもたちから職員への要求を聞く場でもあります。それからの日課について述べると、掃除、集団作業、教室での集団授業、運動場や体育館に出かけてのスポーツ、野山へのレクリエーションなどのプログラムが組まれるのですが、これも強制参加ではありません。これらに参加できない状態のときには、この時間帯に個人カウンセリングが組まれることになります。個人授業を受ける人もいます。すべてを拒否して一人で過ごすという時期もあります。

私たちはこれらの日常生活全体の指導が一つの大きな治療であると考えていますが、もう少し個人的な治療関係について述べますと、一人の子どもに担当の医者と心理療法士が一人ずつ付くことになっています。いわば、この二人が子どもの担当であり、父親とか兄貴、あるいは姉貴代わりの責任者である、ということになっているのです。この診療所には五人の心理療法士、三人の医師が顔を出しますが、この全員がなんらかのかたちで全体にかかわります。つまり自分の担当以外の子どもたちとも関わり、行動の観察および生活の指導をしているのです。そこで、全体を把握するためにスタッフは頻りに検討会をくりかえしています。この場で、グループ的な治療場面での観察は全員の治療者に報告され、治療に生かされるしくみになっているのです。

治療方法からいうと、薬はほとんど使わず、心理療法が主体となっています。不安や不眠などが強い時期にごく短期間薬物を使うことはありますが、分裂病やうつ病などでないかぎり、まず絶対に使いません。

心理療法は家族療法が中心となります。それと個人的なカウンセリングは、くじけそうな心を支えたり、励ましたりすることを中心とするという意味で、「支持的な心理療法」と呼んでいいでしょう。少し知能の劣るような子どもたちの場合には、ごほうびをやるとか懲罰を与えるなどの行動療法をとることがありますが、そのほかにロールプレイとか心理劇などの手法を使う人もいます。しかしいずれの手法を使うにしろ、家族療法がその基本になっていると書いていただいでよいでしょう。

県内の家族であれば、週に一回くらいの頻度で直接病院に来ていただいで面接するのですが、昭子の家族は関西でしたので、そう頻繁に来ていただくわけにもいきませんでした。そう、昭子の場合の家族面接は、入院した日と退院した日の二回だけだったのです。そこで勢い、電話や手紙のやりとりが多くなったのですが、昭子の母親は飾り気のないいねいな手紙をよくよこしてくれました。幼いころにさかのぼって昭子の心を深く思い返している手紙もあります。叔父の子どもたちとのことなど重要なことがありますし、祖母のこの家族とのかかわり方、父親がそのあいだでどう動いていたかなどがよく推測できます。しかし、この本ではこれらは省略することにしておきましょう。ただそうして家族と交流し、昭子の変化を伝えあいながら、治療は進められていった、ということを理解しておいてください。

## ●——教師の暴力と昭子の興奮

今まで家族のことを主に述べてきましたが、学校でのできごとを拾ってみましょう。

中学二年のときの担任の先生は優しくてよく家庭訪問してくださる先生だったようです。父兄のあいだからも「テレビから抜け出して来たみたいなカッコイイ先生だわね」という声上がるような優しい先生だったようです。ところが、補導の先生はかなりはげしい暴力を使って生徒を威圧的に管理されておられたようです。

前に述べたように、このころにはすでに昭子のことばづかいは荒々しくなり「くそばばあ」とか「金くれ金。親は金を持っているもんだ！」などと言うようになっていました。そして学校は休んだり、早退したり、遅刻が多くなったりしていたのです。そして、学校から呼び出しを受け、親が行くことになるのですが、両親は、家

庭内での昭子の悲惨な状態を話し、親としてもまったく努力していないわけではないということを切々と訴えられています。ところが、具体的な改善策は学校側から提案されてはいません。家で彼女が荒れるのは、学校での威圧的な管理に対する反応でもあったのですが、そのことは学校側には全然自覚されていません。それどころか、この呼び出しを契機に、完全に親子の信頼関係は破壊されてしまうことになったようです。つまり、このことは「学校と親と子どもという三者の関係が、子どもを教師していくうえで良いほうに活動しなかった」ということを示しています。そして前述したように、昭子は母親のつくった料理は食べない、夜八時ごろになると決まって家を出ていき、一〇時すぎまで夜遊びする、学校は頻繁に休む、ということになっていったのですが、こういう経過のなかで、五月の半ば、昭子は生徒補導の先生に顎のあたりをなぐられています。ところが、このことを昭子は家族に対して「人の腕に当たっていたい」とごまかしているのです。もちろん、この子の意地っ張りということでもあって「センコウごときになぐられた恥など家族に話せるか」という気持ちだったのでしょうが、彼女の心が「教師や親に対して素直な信頼を寄せられなくなっている」ということを示しているのでしょう。昭子の顎は、翌日になると腫れ上がり、学校を休み、整形外科に行っています。同じ非行仲間の夏美と一緒にいるのですが、暴力を使った補導の先生は自宅まで来られて、「じつは昭子さんが万引きをしたのです。夏美さんも一緒だったようです」と報告しておられます。どうもこれは傷害を与えてしまったことをおわびにこられたのではなくて、「自分がなぐったことの正当性」の説明にこられた高飛車な家庭訪問であったようです。

昭子はこのあと、さらにもう一回万引きをして、警察に保護され、父親が引き取りに行くことになります。このことにも学校側は「なんてこの家庭の親は指導力のないことか」という態度で臨まれたようです。これでは、親のほうは無力感を強めていくだけです。学校と親と子どもで力を出し合って考えていこうという「組み合わせ」ができていなくて「学校が家族を無力にさせてしまうだけ」になっているといえます。

そのあと、昭子は、さらに学校へは行かなくなっていました。しかしまったく行かないというのも不安だったのでしょう。週一回くらいは行っていたようです。この事実はまさに大きなことで、学校という場所は「おとなたちが登校することが義務だというから行

く場所」ではなくて、「同年齢の子どもたちがいるから行ってみたい場所」「行ってみなければ不安になってしまう場所」であるということをお話しています。「週一回くらい来ても卒業証書はやれんぞ」などというオカドちがいの発想をする先生もおられるのですが、子どもたちが学校へ行きたいのは、そんな損や得やの次元からではないのです。担任の先生は、家庭訪問をしたり、毎朝のように電話をかけて、学校に来るようにと仰ってくださっていたようです。公衆電話からする母親の電話にもよく応じてくださっていました。ところが、暴力という有無を言わせぬ「おとなの力」の前では「優しい先生たちの声」も無力であったようです。というか、「優しい先生たち」と「暴力を使って子どもたちを威圧的に従わせようとする先生たち」とのあいだで十分な討議ができていないということは、子どもたちの側から見たら、結局、暴力を使う先生を認めているわけではないか、自分で自分の手を汚さないだけではないか、と見なされてしまうことになっていたのでしょうか。

昭子は夏休みにはいる前日になって、丈の長いスカートをはいて学校に行ったことで、ふたたび補導の先生になぐられることになります。このとき、昭子は飛んで家に帰るのですが、そこに母親が荷物を持って立っています。彼女が家に帰りつくまえに、担任の先生から「校則違反のスカートをはいてきていますので、代わりのものを持って来てください」という電話があって、母親は支度をして学校に行こうとしていたところだったのです。そこで、「てめえ、どこに行くんだよー」という昭子の叫び声が始まることになります。そして、彼女は猛り狂ったように「チクショー、チクショー」と叫びながら、植木鉢や本棚の本を、手提げ袋を下げている母親に向けて目茶苦茶に投げつけて荒れるのです。興奮して顔は真っ赤、やがて、白いブラウスには点々と血が付いて、母親は腰を抜かしてしまいます。

その後、母親が昭子の興奮しているようすを学校に電話すると、学年主任の先生は「じつは補導の先生が昭子さんをなぐったのですよ。申しわけありませんでした」と言われます。それに対して母親は「先生にはそれだけの理由があられたのですから、それはありがとうございました」と答えておられるのです。学校側の「生徒指導と教師暴力の問題」は、こうして問題にされずに見過ごされてしまうのです。そのことは、昭子にとっては非常な怒りに満ちた不満であったはずですが。

そこで、昭子のこういう興奮はこれからますますひどくなっ  
ていきます。ひどい興奮はたいてい「父親のいないとき」におこるの  
ですが、これには大きな意味があるようです。教師と父親とは「暴力  
をふるえる力を持っている」という意味において、同一の位置で昭  
子にはとらえられているようです。そしてまた、そうであるからこ  
そ、「すぐ暴力を使う学校に対してなにか言えるのはおまえじゃない  
のかよ。どうしておまえはこんな時に家を空けて遊びまわっておれ  
るんだい」という怒りがぶっつけられているように思えるのです。

悟は二歳年上の兄なのですが、この年の二月ごろ一回だけ、母親  
が昭子から暴力を受けるのを見て助けにはいってくれたことがあります。  
これは父親がスキーに行っていて親子三人だけになっていた土曜日の夜  
のことでした。この事件の状況をおおざっぱに述べると、「新しい洋服を  
買ってくれ」という昭子の要求を母親が拒否して言い争いになる。興  
奮した昭子が額縁のガラスをたたき割る。ここではじめてのことですが、  
母親が昭子の頬をはげしくぶつ。そして、母子は取っ組み合いの騒ぎに  
なる」といった順序でひきおこされたのです。体力的には昭子のほう  
が勝りますので、母親はソファに押し倒され、踏んだりけったりされ  
るのです。このとき、兄の悟が助けにはいって、昭子の服が破れるくら  
い本気になりポカポカなぐって怒りをぶっつけています。「昭子、静か  
にしろ。おまえはもっとがまんしろ！だれだって欲しいものはいっぱい  
ある。だけどみんな、がまんしてるんだぞ！」と叫びながら。

このときのことを母親は、「悟が充分に父親代わりをしてくれたと、  
ほんとうに力強く思いました」と述べています。このとき、母親は「  
お母さんも悪かったね、カーッとなっごめんね」と謝っていますが、  
昭子もはげしく泣いて、母親に心からわびているのです。その後、高  
校にはいった兄はむしろかわりあうことを避けるようになっていくの  
ですが、この夜の体験はこの家族の中で貴重な記憶になっていると思  
われます。

このエピソードは、「指導のための暴力」に関して意味のあることを  
伝えてくれています。つまり、兄の暴力は昭子にとって効果的に働い  
ています。ところが補導の教師の暴力はむしろ逆効果になっているの  
です。この差はどこからくるのでしょうか。それは昭子との「心の通  
いあいの差」と表現してよいでしょう。兄に対しては泣き顔の部分を見  
せて信頼を示していますが、教師に対しては「涙の一滴でも見せてな  
るものか」という反発をたぎらせることになってい

ます。

学校の教師は本来であれば、家庭の中で解決できない問題を発見し、それに対して有効な手助けをするべきなのです。ところが、昭子は手助けどころか、まるで命令に従わない犬ころかなにかのようになぐられるだけであったのです。この年代の子どもたちにとっては学校は「同年齢の子どもたちと交わるための社交場」としての要素が大きいのです。だから、「先生たちがいる学校」は嫌いでも「友だちが集まる学校」には行きたいのです。ところが「そんな犬ころは来るな」とやられて追い返されてしまう……。これはなんとむごいことでしょうか。どうしてこんな先生が生まれることになってしまうのか、このことはぜひ「第五章」を読んで考えてみてください。

昭子が小学校四年のとき拾ってきて、ずうっとかわいがってきた猫が、この年の六月に交通事故で死んでしまいました。両親は寄生虫がわくからという理由で飼うことに反対していたのですが、がんこな昭子は両親の反対を押しきって飼ってきたのです。この猫が死んだことは、昭子にとって大きな悲しみであったようです。タオルを敷いた箱に死んでしまった猫を入れて二晩一緒に過ごしていたといいます。で、この死んだ猫を彼女がどうしたかという、「夕方薄暗くなってから、中学校の近くに埋めに行った」というのです。彼女は親に向かってめちゃくちゃな不平不満をぶつけた夜でも、かならず猫と一緒にふとんに潜り込んでいたのです。猫にだけは優しくしていたのです。その猫を中学の近くに埋めるのです。

私ははじめての往診をしたときの帰りに、父親の車で駅まで送っていただいたのですが、このときに「ついでにちょっと案内してください」と言って、学校まで案内してもらっています。日曜日ですから、生徒も先生もいないわけですが、少しでも学校の雰囲気をつかんでおきたかったのです。そこで、学校がどんなところにあるかよく知っているのですが、猫を埋めるための場所は、学校のような遠くまで行かなくてもいくらでもあるのです。すると、学校の近くに埋めたということには、昭子の学校に対する複雑な思いがこめられていると想像できます。つまり昭子の中には、なぐる先生へ強い反感をもちながらも「学校に対する期待」がおおいに残っているのです。

夏美の担任の先生は、生徒たちと同じ目の高さで話してくれる優しい女性でした。この先生が家にみえると、昭子は喜んで自分の部屋に上げていました。母親は「なにやら楽しそう……。同じ女性同

士だからだろうか。親と対話するのちがってあんなに楽しそう」とうらやむくらいだったと言っています。入院することになる直前の外傷にしても、親とは病院へ行ってませんが、この先生に勧められて治療を受けることになるのです。しかし、先に述べましたように、こういう先生は少数派であるわけで、暴力で生徒を威圧する先生が子どもたちを学校から追い出すことになっているのです。

しかし、大きな力とはならないまでも心を割って話せる先生が少人数でもおられたということは、昭子にとっておおいにありがたいことでした。それに地平も見抜けぬ暗闇の中に光射す小さな明かり窓のようなものだったのでしょうか。夏休みになって彼女がはじめたアルバイトが暴力団がらみだったということがわかるのですが、これが明らかになるのもこの夏美の担任を通してでした。この学校に信頼をもって話せる先生が一人もいなかったとしたら、昭子は今ごろ、暴力団の手に落ちて悲惨な日々を送っていたことでしょう。

### ●——新婚旅行のコースをたどって

野島診療所に入院したあとのことを述べましょう。彼女は一カ月で退院していくのですが、はじめのうち、彼女は強引に病院に連れてこられたことに対して強い抵抗を示していました。まず、連れてきた張本人の私に対して自然な応対をしてくれませんでした。「必要最小限にしかものを言わないぞ」という姿勢を強固に守りつづけようとするのです。

たぶんそのことの一つの意思表示でもあったのですが、先に述べたようなレクレーションやスポーツなどの集団的プログラムへの参加も、ほとんど受け入れませんでした。だいたい昭子は小学生のころから特定の子どもの親密な交流ははかれるものの、集団的な行動への抵抗は大きかったようです。とくにそれを強制されることへの抵抗はすごいということは知っていましたので、まずはいろいろの治療的な行事を押しつけずに、彼女の好みを優先させることにしました。そして、私自身がかかわりを深めることも避けて、直接的には女性の心理療法士を中心に進めていくことにしました。はじめのうちはこの女性の心理療法士に対しても抵抗を示していましたが、一緒に海岸を散歩するなどの行動をとおして、やがて彼女に心の中を開いてくれるようになりました。表情も和やかになり、他の患者さんとの会話もはじまりだしたのですが、やはり、一線は引



いていたようで、自己防衛の堅さを強く感じました。私を見る目も和らいだように見えましたが、こっちから接近するのはもう少し延ばそう、と意識的に構えていたのです。彼女の防衛の堅さを変えることは自然に任せたほうがよかろうと判断して、長期の治療計画を考えていたのです。

昭子の場合にも、入院のときの家族とのとり決めで、「月に一回は家族療法を受けるために訪れること」となっていました。家族全員が来ていただくことが理想なのですが、やむをえない場合は両親だけでもいいのです。東京や大阪などの遠方の場合にはどうしても旅費がかかるとか日数を使いすぎるということでご両親だけになりがちです。私がよく往診をするのは「そのことの穴埋めをしよう」という考えもはいつているのです。

入院して約一月後、昭子の両親が来院することになりました。父親の勤務のつごうで、土曜、日曜を使うために、金曜日から来院していただき、二泊三日、診療所に滞在していただくことになったのです。近所のホテルを利用される家族もありますが、私たちはなるべくなら診療所内に宿泊していただくようお願いしています。そのほうが経費も少なくてすみませし、なによりここでの生活のようすを体験していただくことは治療的にも意味のあることなのです。もちろん治療的にみて、診療所を離れて子どもと一緒に過ごさせることが有意義であると判断する場合には、ホテルを勧めることもあります。昭子の場合には、暴力行為なども考えられましたし、はじめての家族来院でしたので、診療所に宿泊することをお勧めしたのです。

遠方から来られた家族の宿泊滞在の場合には、心理療法士と私の二人で組んだ家族面接を来られた初日にして、また帰られる日にもう一度する、その他の時間は家族だけで過ごして「家の中にいるのと似た環境で」交流をはかってもらおう、というのが私たちの一般的なやり方です。こういうことを何回かくりかえして「ずいぶんよくなった」「これなら家に帰ってもやっていけそうだ」ということを家族が確認したあとで、「では一回外泊ということにして、家で一週間ばかり過ごしてみましよう」ということになります。そのうえで退院となる、というのが通常のコースです。

ところが、昭子の場合には、二回だけの家族面接で退院となったのです。土曜日に、一時間ばかりの家族面接をしたのですが、このときにも昭子は無口でした。けっしていいかげんな妥協などしな

いぞ、という意気込みすら彼女の口調には感じられたのでした。この家族面接を和やかなものにするために私はいろいろと腐心してみたのですが、最後まで「うまくいかないなあ」という不全感をもっていたのです。そこで、面接の最後に「明日、病院のジープを使って家族三人で日南海岸をドライブしてみられたらいかがでしょう」と提案しておいたのですが、このドライブにしても、うまく展開するとはあまり予想できていなかったのです。そんなわけで、「まあ、三～四回は家族に来ていただかなければなるまい」と、そう踏んでいたのです。

ところが、翌日の家族三人のドライブは意外な展開を示します。全体の雰囲気ははじめのうち固かったものの、父親の「思い切ったカメラ撮影」のあとで急転直下、明るく和やかなものになったというのです。どういうことかというと、三人は夫婦の新婚旅行のコースを、記憶をたよりにたどってみられたというのです。サボテン公園、鵜戸神宮、都井岬というぐあいに、この日はからりと晴れた秋日和で、海も空も深いコバルトブルーで父親はカメラのシャッターを押しまくっていたというのですが、はじめのうち「どうしても昭子にカメラを向けられなかった」と言われます。今までの昭子なら、カメラを向けようものなら物が飛んでくるか、カメラを取り上げられて地面にぶつけられるのがオチだったというわけなのですから。ところが、父親は鵜戸神宮まで来ると決心します。思い切って「おい、写真撮ってやろうか」と声をかけてみたというのです。昭子が、うっそうとした杉並木のあいだから沖合を航行していく外国航路に見とれている、その表情を見て、「勇気が出た」というのです。

昭子は父の誘いになっこり笑ってポーズをとってくれたのです。けとばすどころか、「ピース」といってポーズをとってくれたというのです。これを契機に親子の会話がさかんになっていきます。そして、病院に帰ってこられるころには「もう、家でやっていけそうです」と夫婦で口をそろえられるのです。そこで、私たちは「少し早すぎるけど、いったん帰してみてもいいか、再入院ということで回り道をするようになるかもしれないけど、回り道にみえて案外と必要な道かもしれない」そして、「この家族の自信を試させてみよう」ということになりました。

こうして、この家族はこの喜びを胸にして「家」に帰ることになったのです。

## ●——荒れるエネルギーの供給源

帰られて半月ほど経ってから、両親から手紙が届きました。同じ日付で書かれているのですが、別々の封筒にはいつているのです。入院した直後に届いた手紙も別々の封筒で同じような文面だったのですが、このことが、この夫婦の今の関係が「まだ、さほど変化していない」ということを象徴的に語っているように思われます。

父親の手紙では、「一〇月二二日に宮崎を発って帰宅したのが、午後の八時三〇分ごろでした。九時をすぎたころより昭子の『出所祝』とばかりに女友だちが五、六人、昭子の部屋に集まり、一一時すぎまでいたようです。私も昭子にこんな友だちがいたのかと、なんとなくうれしく思いました」と書いてあります。今までは来てほしくなかった非行の子どもたちが、うれしい友だちに変わっているのです。ほかに数カ所ひろってみましょう。

「翌日の月曜日は六時三〇分ごろには起床して、登校しました。学校を休んだのは、この十一月一〇日に風邪で休んだ二日間だけです。宮崎から帰って三週間になりますが、毎朝六時三〇分前後に起床し、朝食をとり、八時ごろに登校しております。私は登校しろとかは言っていませんが、本人は登校に関しては前向きようです。夜間は友だちが来たり、出たりして出入りがあります。友だちもいわゆる『悪い友だち』とも思えませんので、安心しています。わがままで自分勝手に経済観念が希薄な点ではありますが、家族の一員である自覚は芽生えてきつつあると思います。話の中でも『お母さん』と呼んだり、私を一度だけ『お父さん』と呼んだりしています。」

「以前に比べるとかなり心を開放していると思います。宮崎に行くまえと比べると、とても信じられないような気がします。水野先生の熱意があればこそ心から感謝申し上げます。私たちもおおいに努力していきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。」

母親からの手紙も、少しずつ観点はちがっているのですが、昭子の状態が非常によくなったと認識している点では共通しています。

「二泊三日の家族面接はほんとうに有意義に過ごせました。先生の貴重な時間を割いていただき、ジープも手配してくださり、ありが

とうございました。あのときは、親子三人で思った以上に仲良く行動できて、このうえなくうれしいものでした。」

「昭子も私たちが来るまで不安だったと思いますが、長いあいだあったなにかが取れて、笑い、しゃべり、興奮して、しかし、それを自制できるようになったことをはっきり知ることができました。」

「あのとき、まさか、昭子を連れて帰れるとは思っていませんでした。はじめは心配でしたが、話し合っていくうち、これ以上長く置かなくてもいい、もう大丈夫という確信ももてるようになりました。そのことは、夫のほうがより強く感じたのかもしれませんが。」

「昭子も、帰った次の日からずっと中学校へ通っています。ついこのあいだ、風邪をひいて二日間休んだほかは朝、早起きしてシャンプーをし、身づくろいをして八時まえに出かけていきます。文化祭のときも、学級の歌の歌詞を昭子と、もう一人の子が共同で手がけたらしく、二人の名前が載っていました。昭子のことを心配してくれている友だちのお母さんが、そのことを教えてくれました。」

「まるで、以前なにごともしなかったかのように、生活できるようになりました。昭子も今のところ、楽しそうに学校へ行ったり友だちとも遊んだり、しゃべったりしているようすです。安定して、落ち着いてきていることを感じとることができますので、夫と二人で喜んでいきます。」

「これからは、夫ともっと仲よくいろいろなことを話し合ったり語り合ったりしたいと思っています。黙ってがまんしているのではなく、意見として『私はこう思っているけど、あなたはどうか?』と言うようにしたいと思っています。」

「私は、小さいころから難聴で、結婚するころに補聴器を使うようになりました。それに私が小学一年のときに母が死んでいます。二度目の母が来て、私と二つちがいの弟は、父を取られたような気がしていろいろ複雑な家庭の中で育ってきていますから、私は、多少、情緒不安定気味のところがあるかもしれませんが。優等生で育ってきている夫とはまるでちがうのです。私は『同情心』は人一倍強いと思うのですが、『思いやり』という点ではずいぶん劣っているのだと思います。水野先生には、私のことがずいぶん不安定で頼りなく思えたことでしょう。でも私は、これからも自分を改善するため努力します。夫とよりよく生きるために……。」

娘が非常によくなくなっていくことを二人ともたいへん喜んでおられ

ます。しかし、母親の「黙ってがまんしているのではなく、『私はこう思っているけど、あなたはどうか？』と言うようにしたいと思います」という努力目標をどこまで深めていけるだろうか、というあたりが私には不安でした。母親が父親の前で「いくらかの劣等感をもって小さくなっておられること」が、たぶんこの昭子には大いなる不満だったのです。そして、そのことが「いつまでも改善されずに継続されていること」が昭子の荒れるエネルギーを供給しつづけてきたのだと思われます。そうであってみれば、その夫婦の関係が母親が努力していこうという方向に改善されていかないかぎり、また昭子の中には不満のエネルギーは蓄積していかざるをえないことになるのです。母親の決意は文面にはっきり見られましたが、母親の差し出す手を支えてやろうとする父親の手が私の目にはもう一つ確実なものに見えなかったのです。母親の手紙は次のように結んでありました。「今回のことで、夫にもいろんなことがわかってもらえましたし、自分でも自分を問い直すきっかけがつかめましたし、水野先生にはたいへん感謝しております。まだまだ私に残された課題は大きいのですが、少しずつこなしていくよう努力します。こんな私ですので、さらによきアドバイスがありましたらぜひお願いします。(後略)」

この家族には、私は上阪するごとに電話していたのですが、家族のある大きな事情があって、私との関係をもつことができないままに過ごしておられました。そして、昭子はふたたびいろいろの問題をおこすことになりましたが、家族の力で立ち直る努力をつづけておられます。

### 第三章 初めて親子が本音で話す

登校拒否でも非行でも、家族は子どもに向かって話しかけることもできなくて、ただおどおどしている場合が多いのです。どうにかしなければいけないとは思いつつ、腫れものに触れるかのように、ただはらはらしているばかりで、家族全員が憂うつな気分の日々を送っている、といった家はじつに多いのです。そう、日本全国どこでも、一つの団地の中に一軒か二軒は、かならずそんな家がある

でしょう。そうすることで、家族全体は「かりそめの安定」を保っているのです。しかし、どの家族にも遅かれ早かれ、このままではやっていけない日がやってきます。つまり、このままつづいていくことで家族の中にはなんらかの変化がおこってくるのです。それは、まったくこの子どもの問題にかかわりのないことでおこるアクシデントである場合もあります。たとえば家族のだれかがガンになるとか交通事故に会うとか、そういう家族にとっての危機的な事件のことですが、それらは、子どもと家族の関係を劇的に変化させることができるでしょう。

そういうアクシデントがまったくないとした場合に、その子の問題というのは家族の上に重い心理的な負担としてのしかかり、母親がノイローゼになるとか、父親が失業するとか、他の兄弟が家出をしてしまうとか、なんらかの事件を家族構成員のだれかの上にひきおこすでしょう。そのことが家族の重い腰を上げさせる力になっていくことも多いのです。

数年まえに私がかかわった子どもで、小学校五年生のときから登校拒否をおこして家に閉じこもっていた少年がいます。中学一年生になって私たちの病院に相談があり、二度の往診をしたうえで強制的な入院ということになったのですが、両親にそう決心させた直接のできごとは「彼が小学一年生の妹と四年生の弟に暴力を使いはじめた」ということだったのでした。両親にとっては「自分の子どもが精神科の病院のお世話になる」ということは「可能であれば避けたいこと」であったのです。しかし、妹も弟も兄が手を振り上げただけで奇声を発するくらいに情緒不安定となり、小さなことにおびえはじめたのです。兄は学校に行っていないから、弟たちの帰りが待ちどおしいのです。帰りが遅いと兄から制裁を受けます。その制裁のしかたがつかねるとか引っかくとかだんだん陰惨なものになってくるのです。そうして、妹はピアノをひかなくなるし、弟も塾に行かなくなる、そして母親まで食事がとれなくなるという段階に至って、私たちが動くことになったのでした。

もっとも、そういった本人以外の家族の変化である場合より、当の本人の症状が悪くなって家族の手に負えなくなる、という変化のほうが圧倒的に多いでしょう。多くの家族はそれでも「医者や心理療法士などを呼ぼうものなら家の中がひっくり返ってしまうような大騒ぎがおこってしまうだろう』と心配して治療にとりくめなくて、ただただ悩んでおられるのです。

しかし、やがて家族が「もうなにがどうなってもいいから、この子の問題から逃げてはおれない」と決心しなければならない日が訪れて来るのです。

これからあげるケースも、そうして、四年ものあいだ治療されないうままにこられた家族ですが、二回だけの家族面接で終了することができた例です。問題をおこしている当の本人と家族とがうまく話が交わせるような場面をつくることができれば、それだけで多くの家族関係は変化する方向にもっていけるのです。「話が交わせる」というのが「言葉で」ではなくてもよいのです。「同じテーブルのついて」というぐあいに同席しなくてもよいのです。直接的であれ、間接的であれ、なんらかのかたちで「伝達しあえれば」、それで効果があがるといってよいでしょう。

もっとも、その後にもいろいろの事態はおこりますが、一つ「いい変化をつくることができた」という体験をもてた家族は、今までとちがって「変化していくことへの勇気」をふるうことができるようです。そのときに少しだけ治療者の援助を必要とすることがあるかもしれませんが、やがてだれの力を借りなくても自分たちで自分たちの問題に挑戦できるようになるようです。

### ●——四年もシンナーを吸いつづけ

父親から電話をいただいたのは、数年まえの三月下旬でした。思いつめた声で、「一七歳の息子が、シンナーをもう四年もつづけているんです。自分の部屋に二歳年上の女の子と一緒にいて、二人でシンナーしているんですよ。そして女の子は、朝になるとなにくわぬ顔で帰っていくんです」と言われるのです。みなさんは、「ええ？ そんな家族あるの？ 本当に？」と言いたくなるでしょう。しかし、ほんとうにそういう家族が増えているのです。東京都足立区でおこったコンクリート詰め殺人事件の少年たちの家族などはそうだったと、新聞は報道しています。

この息子は高校中退です。上に大学一年生の姉が一人、少し離れて小学五年生の妹が一人います。この二人については「順調に成長している、まあいろいろの問題はありますが……」と父親は言っておられましたが、姉とこの少年とは犬猿の仲らしいのです。母親四二歳、父親四九歳の五人の家族で、父親の仕事は印紙とか切手とか煙草とかを売っている自営業です。収入源はそれだけではなくて、

先代から残された財産が多く、家賃収入などもいくらかあり、かなり裕福なようです。ここまで聞いただけで、私は次のようなことを頭の中で整理してみます。

- (1) 息子はシンナーに逃げ込まなければ処理できないような大きな「不満を心の中に溜め込んでいる。」
- (2) 親は子どもを恐れていて、家の中でシンナーをしている子供に怒りをぶつけることができない。
- (3) それは夫婦のあいだに大きな葛藤関係があるからなのであろう。
- (4) その中で生活している姉と妹はどうかかわっているのか？
- (5) 中学、および高校等の学校教育は彼あるいはこの家族にどうかかわったのか？

私は、以上のことを念頭において電話で質問をつづけていきます。「家の中でシンナーをすれば、すぐにわかりますよね。家中に臭いが立ち込めてくるから、みんな臭くて困るでしょう。お姉さんたちとか妹さんに悪い影響を与えますよね。それをどうして止められないんですか？」

「全然言うことを聞いてくれません。すぐ暴力を使います。からだはうんと大きくて、体力的にとうていかないけません。」

「どこにも相談されずに、そのままの状態を今日まで四年間もつづけてこられたんですか？」

「まあ、そういうことです。相談所とか病院とか考えはしましたが、本人を連れていくことができません。」

「なるほどわかりました。で、僕のことを知られたのはどういうことで？」

「どうしようもないと諦めていたんです。人に『年をとればなおる』なんて言われて、その日がいつかいつかと待っていたんですが、だんだん悪くなるばかりです。しかし、自分たちの力ではどうしようもなくて、死ぬような思いで、諦めていたのです。そしたら、人づてに先生は家まで往診に来て入院させてくださる、と聞いたものですから。〇〇の△△さん。もう退院されてすごく調子がいいと聞きました……。」

人のことを固有名詞を出してしゃべることは、医師法違反です。〇〇の△△さんというのは、前年の三月ごろに強制入院させた少年です。登校拒否の少年で、高校を一年生で中途退学していたのでし



た。家への閉じこもりがはじまり、父親に対しては一言もしゃべらなくなって、やがてひどい家庭内暴力に発展し、私が呼ばれたのでした。二回の往診面接をくりかえしたうえで強制入院させたのですが、入院にあたって強い抵抗があって、体格のよい三人の男性の力でようやく車に乗せたのでした。一〇ヵ月ばかりの入院治療をへて退院できたのですが、その後は「まだ東京に帰るのは早い」と言って、宮崎でアパートを借りて仕事をしているのです。入院中には、家族に電話をさせると「早く東京に帰せ」とどなりつけていたのに、「今の自分では家族の中に帰っていけない」と認識できるようになっているのです。仕事ぶりはまじめで、現在では正社員にしてもらって給料を十二万円ばかり稼いでいます。「宮崎にいるうちに一八歳になるので車の免許をとるのだ」と言って、貯金もするようになっていきますので、両親は大喜びです。父親と母親が交代で一〜二ヵ月ごとに宮崎にみえて、私を交えた面接をつづけています。

清彦の父親は、その人のことをどこかで聞きつけられたのでしょう。自分の息子も同じように「強制入院させて治療してくれ」と言うておられる、ということがわかってきました。私は、「〇〇の△△さんのことはかかわりをもったことは事実ですが、医師法違反になりますのでくわしくは言えません」と前置きして、「僕たちは初めて訪問して、突然子どもさんを連れて行ったりはしない」ということを説明しました。そして、「まず本人に会って話をしてみたい。そのうえで入院させて治療したほうがよいのかどうか考えさせていただきたい。かりに強制的な入院をさせることになるとしても、本人にも『入院して治療するということの意味』をまず説明して考える余裕をもたせた上で実行したい」と伝えました。すると、「いや、うちの息子はそんな生易しいんじゃないんです。たぶん先生を読んでそのまま帰られたんでは、私たちは半殺しの目にあいます。来られたらすぐに入院させてほしいんです」と言われます。そこで私は、「わかりました。まず面接させていただいて、そのまま家に置くのが危険と判断したら、その日のうちに連れて行くことにいたしましょう。しかし、その判断は僕に任せてください」と、そう答えたのです。すると、父親は不安になられたのでしょう。ずいぶんと考えておられているようすで、しばらくあって、「それでいいですから、ぜひお願いいたします」という返事が返ってきたのでした。その語調は実に不安げでした。まるで、「今、結審しないことには最後のチャンスが消えてしまう」とでも言わんばかりの「しかたなしの決断だ」と

というような悲愴感が、その返事の雰囲気の中に感じられました。

### ●——ナイフで足を切る

往診の日取りは、四月の中旬ということになりました。どの家族もやっとの思い電話されるのですから、なるべく早く往診しなければならないのですが、往診料を安く設定するために、四～五人の依頼がまとまってから出かけることにしているのです。そこで、確実な日付は一週間まえくらいにならないと確定できないのです。たとえば一人だけの往診だと、宮崎からの往復の航空運賃と滞在費用をみていただかないといけませんから、東京だと九万円、大阪だと七万円ほどかかってしまうのです。そこで、四～五人見られれば、一人で二～三万円でもよいこととなります。中には「費用は全部持ちます」という家族もあるのですが、一回だけの往診ですむわけではありませんし、相談者も多いので、私自身も同時になるべく多くみておかないと時間のやりくりができなくなってしまうのです。そういうわけで、往診の日取りは、四月の中旬という不確定な日付で決まったのです。ところが、このことは家族にとって、いろいろと複雑な気持ちをもたせたようです。

つまり、「往診の日」は待望の日でもあるのですが、恐怖の日でもあるのです。「この家に治療者が乗り込んで来る」、そしたら確実に「何かがおきおこされることになる」、そういった事態は、まるで天変地異と両親には思えたのでしょう。その「おびえといってもいいほどの不安」はむしろ、日付の不確定さでいくらかもみ消されたかもしれない。しかし、また逆に逃げ出したくなるような不安をかき立てたのかもしれない。

じつは、そんな家族の不安定な心理状態が、この息子の絶望的な心を極限にまで引き上げてしまったのかもしれない。電話があつてから二週間目くらいの水曜日の昼下がり、私は緊急電話を受けることとなります。彼はナイフで自分の足首の筋肉を切って出血多量で救急病院に運ばれることになったというのです。

そこで私は急遽、往診することになりました。「シンナーによる幻覚があつて足首を切ったのだと思います。切るまえに友達に電話したらしいです。それで友だちがかけつけて来てくれたのですが、そのときにはもう血の海で、子どもの意識はなかったということです。私たちは家族みんなでお出かけていたものですから」という父親から

の電話があったのは、水曜日の五時過ぎでした。そこで、私は「では、今度の土曜日に緊急に往診しましょう」と答えたのです。すると、「いや、どうにか今日来ていただけませんか。今日このまま連れていってもらわないと心配なのです。今なら寝ています。元気になってからではどこに行くか、いつ帰るかわかりませんし」と言われます。

そこで、「わかりました。幻覚があれば、ふたたび自殺するとか傷害するとか、いろいろ想定できる状態ですから、強制入院が必要なようです。その予定でいくことにしましょう。抵抗するときのために体の大きな男一人を連れていきます。それと、こちらに来るのに飛行機は使えないでしょうから、車の準備をしておいてください」と、急遽出発することとなったのでした。

### ●——古い街並みの一角に

飛行機と新幹線を乗りついでこの家に到着したのは、一〇時を過ぎていました。私鉄の駅まで父親に迎えに来ていただいて、少し肌寒い夜の古い街並みを五分ほど歩いてやってきたのです。ジャンパーをはおった父親は「一方通行が多いものですから、車だとだいぶ遠回りになるもんで……」と腰がかなり低いのです。しかし体格はよくて、外見的には子どもに注意ができない父親にはまず見えません。父親としての弱さは、何か精神的なひ弱さから来ているように思われます。

由緒あるこの古い街の中で、このあたりは昔からの住居地域だったのでしょう。道は大きな屋敷を壊さずにくねったり鉤形の路地になったりしてつづいています。私はこんなくねった道が好きです。新しくつくられていく日本中の街は、強制的な土地収用法などを使って、ほとんど直線の道です。昔から居住している住民の心をたいせつにして、道路を曲げてつくられていく街に「行政の優しさ」を私は心から感じるのです。そして、そんな街の中にたたずむと、ほっと安らぎを感じます。

小さな雑貨店、酒屋、クリーニング屋などの看板の立ち並ぶ路地を過ぎたあたりに、落ち着いたたたずまいの一角があって、その中心がこの家族の住居でした。家そのものは最近になって作り替えられたもので、近頃はやりのモダンな様式でした。新建材が多用され少し重厚さに欠けるのですが、屋敷全体は広くて、代々の素封家

であったらしいことが容易に想像できます。母屋のすぐ隣には、しっかりした作りのアパートがあるのですが、これがこの家の大きな収入源と推測できます。母屋とのあいだにこのアパート居住者のためのものらしい駐車場があって、その柵の向こうには日本庭園の植え込みが見えるのです。

この庭も、ちょっとした寺院の庭のような重みがあります。大きな石とうろうの上には桜の大木が枝を広げていて、その枝には隅々まで、今にも開かんばかりの蕾がびっしりとたくわえられていました。水銀燈の明りで、それらははっきり見えるのです。地面に近いほうは影になってよく見えないのですが、柵の下手は雪柳の真っ白な花で埋められているようです。よく目をこらすと、れんぎょう、すおう、もくれん、濃いピンクの花桃、八重椿と、ありとあらゆる春の花が咲き誇っているのが見えてきました。私は花々が好きですので、「この家の中にシンナー中毒の非行少年！」という重い話も少し遠のかせて、疲れも吹き飛ばすくらいにいい気分になってしまいました。

石畳の階段を上がって、白木を張りめぐらした玄関で靴を脱ぎ、洋式の応接間にはいると、ここにも春の花が生けてあります。テーブルの上にはガラス細工が飾ってあるのです。よく見ると、このガラス細工は菜の花、麦の穂、えんどうの青い鞘などのミニチュアなのです。それらがあざやかな着色でじつにメルヘンチックにできているのです。大きな古いお屋敷の中のメルヘンのような住まい……。

## ●——無口な父親と夢見る母親

そうです。こんな構図は、今まで何人かの思春期の子どもたちの家庭で見てきたのでした。それは、家庭内暴力の子どもたちの家で、登校拒否の子どもたちの家で、拒食症の女子大学生の家で、いろいろの家の中でさまざまなかたちで見てきた構図なのです。

思いおこすと私の目の中に、「自分が育ってきた家族の古い歴史の中に埋もれているような父親」と、「精一杯夢を見ている母親」の二人の姿が浮かび上がってきます。その人が育ってきた家族のことをその人の「原家族」と呼ぶと前に述べましたが、父親の原家族の中では、たぶん「強力な親子関係」をつくるなにかの問題があったのでしょうか。そこで、父親は「今の家族」をつくってきた歴史の中でも原家族の「古い歴史」を振り払えずに「今の家族」の中に引きず

り込んでしまっていると考えられます。そこで、母親が「こんな家族をつくっていきたい」と思い描いている「今の家族」の中での努力はどうしても現実とかみ合わなくて、メルヘンチックにならざるをえないのだろう、と想像できます。

私は数年まえに訪れた、玄関から応接間、そしてダイニングルームにいたるまで、家中が観葉植物やあざやかな原色の陶板画で飾られていた家族のことを思い出します。それは前著『葛藤する思春期』の「三つの家族」の章でとりあげたケースで、高校一年生の息子が問題児だったのでした。この少年はいちおう学校には行くし、シンナーなどはしないのですが、母親へのしつような暴力があったのです。そして、煙草を隠れて吸ったり、ゲームセンターに行ったり、頭に少し油をつけて、てかてか光らしたりしているのです。成績は落ちていきますし、やがて短期間ずつですが登校もしなくなります。枠にはめすぎるきらいのある進学高校でしたので、学校への反発は強かったのでしょう。そんななかで、母親への暴力はだんだんはげしくなっていくたようです。

彼は母親を部屋の中に監禁して、しつようになぐるのです。二人の妹がいるので、この妹たちにそんな姿を見せてはいけないという配慮はあるようで、妹たちが学校に出かけて母親と二人きりになると、決まって暴力がはじまるのです。ドアを締め回してはじまる暴力行為は、はじめのうちは座布団でなぐる程度でしたが、やがて髪の毛を切ったり、アイロンを手足に押しつけたりというあたりまでエスカレートして行きます。この時点で母親は部屋を飛び出して、私たちの病院までかけつけてこられたのです。小柄なかわいい奥さんの足下を見ると、その服装には似つかないサンダルばきそのままなのです。まさに着の身着のままかけこんでこられたというのが一目瞭然なのです。そこで私は心理療法士を連れて、緊急往診をすることになったのでした。

この少年の場合、三回の入退院をくりかえして治療していったのですが、夫婦の問題がいつも大きくクローズアップされていたのでした。夫婦関係を象徴的に伝えてくれる一つのエピソードがあります。それは母親から語られるのですが、「家族一緒の夕暮れ時、西の空を鳥が飛んでいたんです。それで私は感動しちゃって、主人に向かって『すてきね。あの鳥、なんという名前かしら』と聞いたのです。すると主人は即座に『田舎のお祖母ちゃんなら、すぐ百科事典を持ってきて調べる』と言うんです」というものです。母親は「な

んていう鳥なんだろうね」と答えてもらうだけで充分だったのに、父親は「もっと賢い奥さんになっていただく方法を教授する」ことになるのです。それがしかも、「俺の田舎のお袋のような（賢い奥さん）」とくるから、母親としてはがまんなりません。母親は、「この人は会社の秘書と同じにしか自分のことを考えてくれないんだわ」という気持ちになって、うつうつとした一夜を過ごさなければならなくなってしまうのです。

この夫婦はそれぞれ、けっして悪い人間ではありません。むしろ精一杯、相手のことを考えて努力しておられる優秀な人たちなのです。二人とも個人としては「社会的に優秀な人」なのです。母親の近所中の評判はすこぶるいいし、父親は一流企業の宮崎支店長をなさっていて、企業人として非常に優秀なわけです。しかし、夫婦関係となると、どうしてもうまく表現することができなくて、ほんとうの心を相手に伝えることができないのです。そこで、「ぎくしゃくと噛み合わない軋み音」がこの少年の家には絶えない、ということになっています。この少年が母親に絡むさまは、父親が母親に絡むさまにそっくりなのです。

そう、拒食症の女子大生も、三代前からのお屋敷に住んでいたのです。この家で私が面接させていただく部屋は、苔むした日本庭園から涼しい風が吹き込んでくる茶室風の応接間でした。ここでも母親からは立て板に水を流したように次から次に言葉が飛び出してくるのです。それを父親はじっと聞いておられます。私は父親の言葉が聞きたくて、父親の顔を見て質問すると、必要最小限には答えてくださいます。すると、さっそく母親はその言葉に捕捉されます。そこで私は、「ちょっと、このことはお父さんから直接お聞きしたいと思いますので、お母さんは僕がお願いしてからつけてください」と釘を差しておくことになるのですが、それでも効果は、はじめのうちだけなのです。

「父親は母親から無口にされてしまっている」という印象なのですが、後で話の緊張を緩めるためにした雑談の中で、母親は次のように言われます。「私はね。娘のころは無口だったんですよ。この家に来てからです。こんなになったんは。だって、主人はこんなでしょう、私がしゃべらんことには一日中この家のなかに言葉は出ませんよ。」

ごはんを食べなくなっていて、「はい」「いいえ」程度にしか返事をせずに無表情で構えている娘は、この父親にそっくりなのです。

そうです。この豪華な日本庭園の家の中にも、今まで見てきたこのタイプの多くの家と同じような特殊な空気が流れているのです。私たちは応接間に通されて、ほっとしています。父親に促されて、長旅で疲れたからだをクッションのいい椅子に深く静めて、あいさつを交わしています。父親は気品溢れる顔立ちなのですが、表情のどこかに少し活動を弱めてしまった部分を感じられます。そうです。これこそ今まで見てきたメルヘンチックな家庭の中の父親の表情の「典型的ななにか」なのです。

まもなく母親がお茶を持って私たちの前に現れます。私の予想のとおり、母親は明朗な言葉づかいで話され、身のこなしもしゃきしゃきとした、原色の花のように明るく美しい人でした。この夫婦二人の歯車がうまく噛み合わなくて飛び出してくる軋み音がだいたい想像できます。

### ●——こわがらずに本当のことではじめないと

母親は、お茶を配り終わって、あいさつがすむと、子どもに聞かれないように小さな潜ませた声で、「幸いなんて言うのもなんですが、この子がけがしてくれたことで、先生たちに早めに来ていただくことができました……。おかげさまなんて言うてはいけないんですが。そうでなければ、とうていこうしてお医者様にみていただくことはできなかつたんです。『足の治療をするのに宮崎にいい先生がおられる。神経が麻痺してしまつて、足がかなわなくなつたら大変なことでしょう。特別なりハビリテーションをするいい先生で、今日、来ていただくことになつたの』と子どもには言い含めてあります」と言われます。そこで、「なるほど。『シンナーのことで』ということは言つてないんですね？」と私。

「そんなことは、どうしても言えません。」と、母親。父親は横で、黙って聞いていて、言葉はありません。母親がしゃべつておれば俺の出番はいらないんだ、とでも思っているような表情です。そこで、私と母親だけの会話がつづくことになります。

「それではごまかしになりますね。こわがらずにほんとうのことではじめないと、治療の方向では進みませんね。」

「わかります。先生にお任せします。」

「そうですね。どんなめんどうなことでも、はじめにじっくり時間をかけて準備しておかないよ、あとでする努力は実りの薄いものに

なってしまいます。ほんとうに治療がはじめられるようになるまでの時間が数十倍もかかってしまうのです。今日は、こわがらずにおたがいに言いたいことを話せるようにしてみたいと思います」などと進めていると、当の息子が階段を下りてきました。松葉杖をついて、いかにも痛々しい格好なのですが、本人の表情はさほど深刻ではないので、傷はたいしたことではなかったのだな、と推測することができます。

玄関に下りる階段は応接間からガラス戸越しに見えるようになっていたのですが、彼はいかにも「これから外に出かける」というような格好で、玄関に向かってずかずかと下りて来るのです。これは、あとから母親が解説した言葉によるのですが、「どんな連中が来たのか」と偵察に来たものだったようです。それを外に出るふりを装ってそうしたということだったようなのです。そのままでは彼は出ていかないとはいけませんので、すかさず私は家族に「声をかけるように」促してみました。すると即座に、母親が呼び止めます。母親が声をかけ、彼が顔をこちらに向けるや否や、私のほうも、「やあ、君が清彦君！　ずいぶんと痛々しいじゃない。はいっておいでよ」と声をかけてみました。すると、ほとんど抵抗もなく、ドアがいったいになるような大きなからだを応接間の中にずりこませてきました。松葉杖をガチャガチャとドアにぶっつけながら。

私たちの前の椅子に腰かけて対面してみると、体格もよいし、なかなかのハンサムです。しかし、まだまだ子どもっぽい顔貌で少し安心しました。私は非行が進行していて、心が荒れすぎて、てこずるような「ワル」かもしれないと想像していたからです。

「たいした傷じゃなかったんだな。ご両親はびっくりされて私を呼ばれたんだけど。足先はしびれたりしないんだろう？　痛みを感じないとか、自分の指じゃないような感じとかないんだろう？」

「はい。」

「じゃ、神経も切れていないんだ。」

そこまでしゃべって両親を見てみると、じつに不安げです。そこで、母親が私のことを清彦君に説明されたらしい言葉に従って、少しでも両親を安心させるサービスをすることにしてみました。

「しかしね、今は神経を傷つけていなくても、傷口からバイ菌がはいつて炎症がひどくなると神経を痛めてしまうことがあるんだよ。だから、この四～五日は安静にしないとイケない。今、気をつけておかないと一生、後悔することになってしまうよ。場合によっては



入院しないといけない。」清彦はコックリしています。それを見て、両親もほっとした表情です。それからはじめました。

「しかしねえ、どうしてこんなことをしてしまったの？」

「わからない、そこにナイフがあったからしてしまった。」

「そうかな。ぼうっとしていて記憶がはっきりしないんじゃないか？」

「いや。」

「そのナイフ、どんなナイフなの？」

「うん？ ふつうの。」

「ふつうのって……。そこにあったとあったけど、鉛筆削りみたいななの？」

「いいや。刃形がこう、大きくて……」と手で形をつくります。

「おいおい、ちょっと待てよ。どんな登山ナイフみたいな大きなナイフ、いつでも目の前においてあるんかよ。」

「そんなことはない。」

「じゃ、どっかから持ってきたんだろう。どっかを切るつもりで。」

「うん、そうかもしれない。」

「ええ？ すると『ナイフがあったから切った』というんとずいぶんちがうよ。自分ではっきりと考えて切ってしまったんじゃないの？」

「うん、そうかもしれない。」

## ●——シンナーだけはやめよう

ここで、さっきから黙っている父親に声をかけてみました。電話を私にかけてきたのは父親なのですから、対外的にはやはり「この家の中の一番の責任者」として動いておられるわけです。しかし、今までのやりとりを見ていると、私への電話も実際には母親がさせたのだらう、と推測ができるのですが……。

「すると、やはり幻覚があったんでしょね、お父さん。」

「そうでなければ、あんなだいそれたことはできないでしょう」と、元気がない声で、平板な返答です。私は、清彦に向かって、

「そうか。どのくらいシンナーをつづけているんだったっけ？」と質問してみます。

「四年くらい。しばらくやめたことはあるけど。」

「そうですね。二～三ヵ月吸わなかったこともあります」と母親が

話の中に入ります。ここで、私は話を目的の軌道に運んでくることに成功します。

「そうですか。しばらくのあいだ吸わなかったことがあるとしても、四年間も吸っていたの。それなら幻覚がおこりえますね。自分で『これが幻覚だ』とわからないというのが、幻覚の特徴です。幻覚が『自分でわかる』という人もいますが、それは漠然とした幻覚気分だけであって、知らずになにかの行動をとってしまうというあたりでは、もう明瞭に『幻覚と現実とを区別する』ということはできなくなっているのです。今からでもなおせるから、ちゃんとシンナーだけはやめていこう。たいへんなことになってしまっているんだよ。」

ここまで素直に聞いていた清彦は、上の空で「うん」と答えながら突然、気色ばんで語調荒く、「だれが先生呼んだんか」と叫んで両親をにらみます。両親は震え上がっています。

私はなにくわぬ顔で、「うん、それ、どういうことかな。お父さんのほうか、お母さんのほうか、ということかな？」と質問してみます。

「うん。」

「僕が電話を受けたのは、お父さんのほうだよ。しかし、お父さんとお母さんが二人で話し合われてなさったことでしょうか？」と両親に投げかけます。すると二人そろって、

「そうです。」

「そうですね！」と私は間を置いてから、「ご両親としてはずっとまえから心配しておられたんだって。しかし君に言い出せなかったんだって」とつぶやいてみます。すると、彼は、怒りをあらわには出せなくて、

「ああ」と、ふてくされています。

ここで私は、少し話題の転換をはかってみます。

「君はこんなに体格がいいし、こわかったんだな、お父さんたちは。君、なにか柔道か、うん、空手でもしていたの？」

「レスリングしていた。」

「ああそうか。こちらの中学ではレスリングがあるの！」

ここで、家族全体の緊張を和らげるために話題を遠回りさせてみます。どういう方法をとったかという、私と同行してくれた体格のよい堀内という職員を利用したのです。

「堀内君。宮崎ではどう？ 中学でレスリングしているところある？」

「いや、ないですね。高校ではありますけど。僕の知るかぎりでは

中学ではないですね。」

「ああそう。あのね、この人も体格がいいでしょう。この人は砲丸投げの記録保持者なんだよ。宮崎県の記録だけどね。国体にも出ているんだよ。君は体重はいくらある？」

「七五キロあったけど七〇キロ割っちゃった。」

「シンナーがひどくなったからだな？」

「うん、そうかな。」

このあたりのやりとりで、彼がほんとうはシンナーなどしたくないのだ、と言っていることがよくわかります。

「筋肉も細くなるし、なにより内臓が弱ってくるんだ。身長は？」

「八二。」

「ああそう。堀内君は？」

「一メートル八五で九二キロです。」

「へえ、そんなにあるの？ 腕相撲してみてよ、どっちが勝つか。そうだな、君のほうが若いから勝つかも说不定い。」

私のそんな気軽のおしゃべりを、両親は無言のまま聞いておられるのですが、だんだん両親と清彦とのあいだで飛び交っていた火花が和らいでくるのがわかります。そこで私は、次のようにはじめてみました。

「君はシンナーを家の中でするときね。シンナーの臭いは家中に立ち込めるわけだから、また、しているってことは、だれにでもすぐわかるわけだよな。」

「うん、そうだと思う。」

「なににご両親はどちらともなにも言わなかったの？ やめろとか、出ていけとか。」

「うん、言わなかった。一回も」と、「一回も」という言葉を強調するのです。

「そう！ それでどうだった。」

「うん？」

「ほんとうのところ、なにか言ってほしかったんじゃない？」

「うーん」と、どっちともつかない返事。

「なにも言ってもらえないんで、なおのことむしゃくしゃするとか、なかったかな？」

「それはあった。」

「ガンガン言ってもらおうほうがよかったんだらう？」

「うん、そりゃそうです。」

## ●——初めて聞いた両親の話

ここまでくると私は安心です。そこで、どちらへともなく、両親のほうに次のように聞いてみます。

「なるほど。どうですか、ご両親、今の清彦君の言葉を聞かれていますか？」

二人ともはじめは口が重いのですが、突然のように父親から発言がはじまります。

「じつは小さいころ、僕の両親と一緒にここに住んでいました。年をとった両親はこの子の上にいる娘を非常に溺愛しまして、この子はつらく当たられていました。はじめてできた孫で女の子でしたから、非常にかわいがっていて、この子に向かっては、『お前はあっちに行っとけ』というようなくあいだったんです。それに、小学校の一年のときでしたか、この子が火遊びをしまして、家を全焼してたいへんなことになりました。祖父の代からの家があったんですが全焼しまして、ようやく四年ほどまえにこの家は建てたんです。そんなことがあって、ますますこの子は小さくさせられてしまったんです。」

「はあ、そんなことがあったんですか」と私が口を挟みます。あまり深刻な話題にしないためにはいって見たのです。そして、「君、その火事のこと覚えている？」と清彦の返事を求めてみました。

「うん」と中立的な返事が返ります。そのあと、母親がつづけます。

「おじいちゃんに叱られて火は消したんですけど、十分に消えていなかったんですね。そのあと、また燃え立ってしまっただけ。」

「なるほど。」

「そのうえに私には反省があるんです。嫁と姑のこと、どこの家でもよくあるでしょう。もう四年まえから別に住んでくれていますけど、一緒に住んでいるころ、いろんなことがあったんです。そして、むしゃくしゃした気持ちを子の清彦にぶっつけていたんです。あれは非常にすまないことをしたと深く反省しています。」

この深刻な話の雰囲気をもたらし、また転調させるために、

「清彦君。こんな話、今まで聞いたことがある？」とやってみます。

すると比較的素直な口調で、「はじめて聞いた」と答えます。憚然としたようにも見えますが、また「この人がそんなことを言うのか」というびっくりした驚きの表情もあるように思われます。

「ああそうか。はじめてなの！……なるほど。すると、君が足を切

ったんで、はじめてこういうことが実現したわけだ。お母さんもたいへんな苦勞をしてこられたんですね。今度のこと、たいへんなことだったけど、みんなにとっていい結果が出るかもしれませんね。雨降って地固まる、のたとえのように。そうだ、もっと、家族のことをいろいろ教えてほしいな。この家は君と、お姉さんと妹さんの三人兄弟の五人家族だったっけ？」

「ハイ」と清彦。

「お姉さんは大学生だったのですかね？」と両親のほうに問いかけの方向を変えて、彼を楽にさせます。母親が、

「今年受かったんです。この子と年子なんですよ」

「はあ、そう。本来なら君が高校三年生ということで年子というわけか。僕も四つ上の姉がいて、よくけんかしていたものですが、二人の仲はどうなんですか？」

「それがたいへんなんです。ふつうのけんかなんてもんじゃありません。姉のほうも気が強くてですね。けっして譲らないんです。たとえば、この子がテレビ見てますね。そこへ姉がやってきて、ぱあっとチャンネルを変えてしまうんですね。すると、この子は『俺が先に見ていたのに』と言って怒る。当然のことなんですけど。姉のほうは『この時間はいつも自分がみるやつがあるんだ。あなたは自分の部屋に行って見なさい』と言って譲らない。そして、品物が飛び交うような大げんかなんです。この子は姉を踏んづけたり、けったり。あの子にも大きな問題があります。」すると、父親のほうで、

「そりゃそうだよ。全面的にあっちが悪い。あの場合には。こっちは真ん前にいてテレビを見ているのに、いきなりやってきてぱっと変えられたんでは、怒らんほうがおかしい」と勢いよく強調されます。清彦は自分のほうを積極的に援護してくれる父親に対して無感動なままです。むしろ、「なんだよ。そんなこと言ったところでなんの意味があるのか」というような無言の講義をぶっつけつづけているのかもしれませんが。そこで、私が、「なーるほどね。元気のいいお姉さんですね。会ってみたいけど、今日はおられないんですか？」とその場をもちあげると、母親が、

「最近、卒業パーティだ、合格祝いのパーティだ、なんだと言って毎日遅いんです。今日も渋谷に出ています。もうすぐ帰るとは思いますが。」

と答えられます。

「はあ、それなら楽しみですね。今夜会えるんですね。じゃ、妹さ

んは？」

「あの子は塾でした。今、帰ってお風呂にはいっていると思います。」

「妹さんは小学の……？」

「今度、六年生です。」

「はあ、そうですか。じゃあ、一番上と一番下は僕のうちと一緒にすね。うちはそのあいだに二人の息子がいるんですけどね。高校二年と高校一年ですけど。」

「ああ、そうなんですか。じゃ四人？」

「そうです。上三人が男で最後が娘です。この娘が小学六年生で、ここのお嬢さんとピッタリ一緒というわけです。うちのは勉強はしなくてピアノばかりですけど……。お父さんも僕と一緒にくらいですか？僕は一八年生まれですけど。」

「じゃ、三つ私のほうが上です。」

「ああ、それは失礼しました。髪の毛が真っ黒だから、もしかしたら僕のほうが上かと思っていました。女性に年を聞くのは失礼だからやめておくとして、ご両親と僕とはだいたい、同じ世代と考えてよいようですね。」

これらのおしゃべりは、堅い父親を意識してつづけています。私のことを「気楽にしゃべれる、遠慮のいらぬ、ザックバランな人間であり、家族全員で親しみをもって接触していてもいい人」らしい、ということを確認していただくことを目的として努力しているのです。

## ●——往診先で食事をする効用

私はここで休憩がほしくなりました。そこで、「じつは僕たちは晩ごはんを充分食べていないんです。飛行機、新幹線と乗り継いで来たのですが、新幹線のビュッフェはもう閉まっていて、弁当だけだったんですよ。ちょっと近所でなにか食べてきます」と切り出しました。すると、母親が、「それはそれは失礼しました。このあたりではもうよい店は閉まっていますし、私が食事をつくります」と言っ

てくださいます。こんな場合、「そんな言葉が出るかと思ひまして、ちょっとかまかけてみたんです」なんて冗談で返すことも多いのですが、この父親はそんな言葉を出すには、まだ堅かったので、「そしたら、お言葉に甘えさせていただきます」という言葉で止めておいたのです。

往診に出かけた家族の中で食事をするということは、私のよくとる手段です。食事をする時間も有効に治療に使えるという大きな実利もありますが、「一緒に食事をする」という行為は家族の緊張をとり払い、親近感を深める手段として有効なのです。前にも述べましたように私は臍臓が少し悪くて、脂肪分とかアルコールとかを控えています。そこで、食べるものに注文を付けなければならなくなります。「うどんやおそばでいいですよ」と遠慮することもあります。これからごちそうをつくって待っていてくださるなどという場合には、あつかましく「お肉やてんぷら類は、だめですので、どうぞお魚の料理とかお豆腐の料理などを」などと注文したりします。陽気な奥さんの場合、「では、腕によりをかけてうまいものをこしらえておきましょう」とおっしゃってくださいます。そんな場合「僕も舌が肥えておりますから」仕返ししておくこともあるのです。

そうでした。この陽気な奥さんの家族も、関東のシンナー中毒の少女のうちだったのです。この少女も高校中退の一六歳で、家の中でシンナーをしていたのです。ピアノがうまくて中学時代には文化祭の合唱などではいつも伴奏者でした。勉強もできる子で、クラスの中ではリーダー的な存在だったのです。ところが、友達の一人が非行グループにリンチされそうになり「自分一人で助太刀にはいる」ということを契機にして、シンナーに手を出すことになるのです。高校を中退してしまった今では、暴走族の車にも乗るようになってしまっています。母親と娘とは「シンナーを吸う吸わない」でいつも対立していて、言葉も少なくなっています。父親とはまったくとっていいほど会話はありません。ただ、この子は小学五年生の弟と二人姉弟なのですが、この弟とだけは犬を連れて楽しそうに散歩したり、おしゃべりしたりしています。

この家族のいろいろの問題は、「夫婦がもう一〇年以上も床を別々にして交わりがない」というあたりに震源地があるようなのです。この夫婦は日曜となると、二人でテニスに行ったり、毎年、夏に一回は家族旅行をされたりして、一見仲の良い夫婦なのですが、どうしても埋められない深い隔たりがあるようなのです。この娘は、弟とは楽しく散歩するのに、父親、母親との会話はできない。それでいて、弟が父親とキャッチボールをしているのをじっと眺めている。そんな行動はたぶん、父親と母親のあいだがしっくりいってはいないということを感じとっていて、「どうにかして二人の関係を変えられないだろうか」と彼女なりに悩んでいるということの表わ

れなのだろうと思うのです。

この家のはじめての往診の日に、私は「僕も舌が肥えておりますからね」と、やっておいたのです。母親が腕によりをかけてつくってくださった夕食ができあがったところに、その娘は起きてきたのでした。前日、夜遊びをしていて今朝帰ってきた、というのです。それも母親から、「宮崎の先生がみえるから、かならず今夜は帰っておいで」と言われたことに従ってのことだったのです。彼女は、私と母親と父親と弟の四人が食事をはじめようとしてテーブルについている部屋の奥から、ヌッと顔を出しました。私は「やあ、今日は」と声をかけてみました。すると、彼女は、言葉は出さないものの、こっくんと頭を下げてくれました。母親が、優しい声で「ここに来て座りなさいよ」と言います。娘は黙って深皿とミルクとコーンフレークを持って来てどかっと私のテーブルの真ん前に座りました。そして、言葉もなく白い深皿にコーンフレークをパラパラと入れてミルクをかけようとします。私は、少しおどけるように、「こんなおいしいそうごちそうがあるのに、そんなんでもいいの?」と、彼女の顔を下からのぞき上げるように聞いてみました。彼女は頭だけでうなずきます。臭いはしませんが、たぶん昨夜はシンナーをしつづけていたのでしょう。

私はこのはじめての診察の夜は、シンナーのことをひとこともききませんでした。テーブルについてくれただけで今回はいい、と判断したのです。そこで、弟と娘との会話を引き出したり、父親が私と話すのを聞かせる、父親と母親が会話するのを聞かせる、などという方法で「間接的に娘と連絡をつけておく」という手段をとりました。私は「お母さんの料理はほんとうにおいしいね。昔からこんなにうまいの?」などと箸を動かしながら話しかけました。宮崎の海がどんなにきれいで、潜るとどんなにおもしろいかを話し、「ぜひ家族みんなでおいでよ」などと気楽にしゃべったのです。

帰るにあたって私は、父親に車で駅まで送っていただいたのですが、見送りに出てくれた娘は母親になにか耳打ちしています。私はその姿を見て、この家族はどうやろうまくいけるぞ、と期待したのです。翌日の最終便で私は宮崎に帰ったのですが、月曜日の早朝、外来診察をはじめるまえに、母親から電話がありました。「一昨日、私に耳打ちしていたのはですね、『もっと話せばよかった』って言ったんですよ。ぜひまた来てください。なにか光がさしてきたような気がします」と、心からうれしい、という電話だったのです。そ



んな言葉を聞かされると、もちろん私はいい気になって、この日は一日中ルンルン気分で仕事に精出したのでした。

このように、「家族の中で食事をする」という行為は治療的に有効に利用することができる、ということを私はほかにいくつも経験してきました。たぶん「食事をする」という行為の中に、知らない人と話すことの緊張感を和らげる作用があるのでしょう。食べるときには副交感神経が活発になるから不安がとれるのだ、と神経生理学者は説明しますが、人と話すときにやたらとタバコを吸いたくなる人などのことを考えてみると、なにか別のことをする中に緊張を和らげるという心理機制がある、ということが想像していただけるでしょう。タバコを吸わない人の場合には、ハンカチを畳んだり開いたり、手遊びをしたり、なにやかやしているものです。この家族の場合には夜も遅かったので、私たちだけで食べたわけで、家族と一緒に食べてそのことを治療場面として利用したわけではありません。しかし、このことで、家族と私たちとの距離はまた一つ短くなったのです。古い街並みの話など、家族以外のことで雑談しながら食べさせていただいているうちに、電話がはいって「姉がもうすぐ帰らしい」ということがわかりました。そこで、もう少し待てば、お姉さんとも会えるし、明日も朝もう一度「全員そろった家族面接」を試してみるのも効果的であろう、ということから、宿泊まですることになったのでした。

### ●——姉が加わると席を立つ

この家を私たちが離れたのは翌朝の一〇時でしたので、ほぼ二時間この家族の中に滞在したことになります。これだけの時間滞在すると、時間のきびしい制約がありませんので、思うままの面接ができます。しかも、人工的な場面をつくらなくても、この流れの中で刻々変化する人員構成が新しい話題の転換場面をつくってくれます。そしてそのこと自体が、家族一人ひとりの関係の中になるもののうちで「言葉にして表現されにくかったもの」を明らかにしてくれるのです。たとえば、息子が出て、父親がなにかのようで立つと母親が、「主人はあのおり無口なんです。あの子もそうですが、口下手なんです。じつはですね、この家とそっくり、主人も姉と妹に挟まれた男一人なんです。そして女が口八丁で強いんですね。主

人はほとんど友だちづきあいもありません。友達をつくることができないうんですね」と言われます。

母親が料理をつくるために立つと、父親は「今まで話していただいてわかれたと思いますが、うちは女が強すぎるんです。だから私にしても息子にしても、一緒にいたくないんですな。なにかあんたは向こうに行っていて、という雰囲気なんですよ」と言われるのです。

やがて一二時近くになって、姉が帰ってきます。すると、見る見るうちに、清彦の態度が変わってくるのです。いらいらした表情で、先ほど「どっちが呼んだんだ」とどなったときの表情に戻ってしまっています。ところが、それに対してこの姉のほうは平然としているのです。大きなからだが、まるで犬に吠えられて猫がからだ中の毛を逆立てたように怒りにふるえようとしているのに、この姉は、びくともしないのです。少し小柄ですが、母親に似てつんと澄ましたキュートな美人なのです。たぶんその平然とした姿を見ると、さらに清彦はがまんならなくなってくるのでしょうか。五分もしないうちに「おれ、もう寝る」と言って席を立ってしまいました。私は「うん、じゃ、明日の朝また一緒に話そう。お休み」と声をかけておきました。そのあとで、父親、母親、姉、そして私の五人で一時すぎまで話しました。

姉は一方的に清彦を罵倒していきます。清彦が家に連れ込んで一緒にシンナーをして、朝まで泊まっていくという女性は清彦の中学時代の二学年先輩なのですが、ということは、姉の一学年先輩でもあるのです。一回だけですが、姉は中学二年のときに、髪の毛を赤く染めたこの先輩から生意気だといってなぐられたことがあります。彼女は非行グループの番長だったのです。そんな非行少女の言いなりになっている清彦が、この姉には不愉快でしかたがなかったのです。

「あんな街のダニと一緒にいてよ、恥ずかしいよ、この私は」という姉に、私のほうから質問をしかけてみます。

私 なるほどね。その気持ちはよくわかるなあ。中学二年のときから清彦君、悪くなりはじめたんだっけ。

姉 そうですねえ。レスリング部をやめることからかな。そのころからシンナーしてるんです。

私 ああそう。お父さんもそう思われますか？

父　そうです。まあ、シンナーする子はだれも相手をしなくなりますからね。それで結局、部のみんなからも嫌われはじめたんだと思います。

姉　勉強も全然しないようになるし、相手をしてくれる子は非行の女の子だけになってしまった、それでずるずるということですね。

私　なあるほど。しかし、あれですね。お姉さんがその、非行グループの連中から暴力を受ける、と。そのときには清彦君は中学一年生ですよ。

姉　そうです。

私　中学一年の秋？　冬？

姉　寒かったから、たぶん冬。うん、二月ごろだ。あいつらの卒業前だったんだ。

私　で、清彦君がシンナーを吸い始めるのは？

姉　そうだ、あのすぐあとからだ。

私　まずさ、あなたが受けた暴力のことを話してみてよ。どんな暴力で、どうしてそのあと、暴力を受けなくなったか。

姉　うん、私の口のきき方が生意気だと言うの。髪の毛がね、私は自然にカールしているのに、パーマかけてるって言うのね。そのときの口のきき方がということでしょうね。それでその三年生たち四人に体育館の裏に呼び出されて取り囲まれて、けったり、髪の毛を引っ張ったり。そこにクラスメートたちが先生を呼んできてくれて、助かったの。それからいっぺんもないのね。

私　どうしてないんかな。そのことで先生にしかられたらうけど、その子たち、それ以来まじめになったの？

姉　いいえ、いいえ、ますます悪くなって万引き、恐喝、なんでもやってんじゃないですか。

私　なるほどね。しかし、その後ぴたりとあなたにはなにもしない！

母　この子は気が強いからですね。あの子たちも弱い子には向かいますけど……。

### ●——不愉快な表情を捨てて

母親は私がなにを言いたいんだらう、と思っているようです。父親は無表情です。私はつづけてみます。

私 僕はなにか清彦君がそのグループにはいってしまうというのは、どうもその事件に関係がある、と思うんですね。

母 どういうことでしょうか。姉はしっかりしていますから、跳ね除けられた。しかし、清彦のほうは弱かったということですよ。

私 そうですね。それはあるでしょう。しかし、中学一年生の清彦君にとって姉がそういう目に会う、という事実はそうとうのショックだったろうと思うんですよ。その暴力事件は全校生徒が知ることになったでしょうから。非行少女たちの裏にはまた非行の男性群がいるわけですからね。しかも彼はレスリングという格闘技をしていた、と。そして、お姉ちゃんは頭もよくて、口も達者で、年も上なのですから、いつも「自分より優れた姉」と彼は思っていた。その姉がああしてやられたんだから、というので強い無力感をもったのではないのでしょうか。「俺はだれにも勝てない」というぐあいに。からだは大きいのですがね。そこで、身を守るために非行グループに近づいた、ということは考えられませんか？

母 なるほど、そういうことがあるのですか。

私 清彦君がそのことを意識しているかどうかはわかりませんが、その非行少女の首謀者、名前はなんというんでしたっけ。

母 山野リカ。

私 ああ、その山野さんがね、お姉さんへの暴力をそれ以後ストップしたということには、彼女が清彦君と親しくなっていたということが関係しているように思えるんですがね。

父 清彦の姉だから、というので？

私 そうですね。姉だからという身内びいきではなくてなにか、この家に対する関心というのが清彦君とつきあうなかで深まってきて、なんか「この家はだいにしたい」という気持ちがわいてきたというのがあるのかもしれないですね。その山野リカさんというのがどういう人なのか、これから聞いていきたいと思うんですが、この家の中に自分の家の中に欠けているなにかを感じて、それが欲しくなったのかもしれない。あるいは自分のうちにあるなにかと共通のものを感じて親近感を深めていったのかもしれない。少し矛盾した言い方ですが、生活環境はずいぶんちがった家庭かもしれませんが、そのへんはどうでしょうか。

母 ええ、お母さんは若いうちに離婚されて水商売をしている家の子です。たぶん子どもは放任というか、全然教育はされていないと思います。私たちにあいさつもしませんよ。玄関で会ってもちら

っと目を下げる程度。

私 母一人、子一人ですか？

母 家、たぶん、弟が一人いると思います。

姉 うん、いるよ。この子はいい子だけどね。今、高校二年生。

私 では、三人家族なのですね。お母さんは向こうのお母さんと連絡をとられたことは？

母 以前はありましたけど、全然効果はありませんでしたし、それに、あの子は私など無視して上がって行きますから、話すチャンスはありませんしね。

私 なるほど。それなら、お母さんたちがいやな顔をしているのが、むしろ彼女たちには快感になっているわけだ。

母 勝ち誇ったようなね。私たちの無力さを笑っている、というか。この子（姉）なんか、もろに不愉快さを出すんですよ。「また、あいつがきている」ってバターンとドアを閉めたりして。ですからけんかになるんですが、ほんとうにいやな思いをさせていると思います。

姉 このままつづくんなら、私はもう、アパートを借りるよ。

私 そうか。その気持ちはわかるなあ。しかしさ、ちょっとここでお姉さんにもがんばってほしいんだけど。お父さん、お母さんだけでは力が足りない。そこで、お姉さんの力を借りると、なにか、うまくいきそうに思うんだな。

姉 私になにができるんですか？

私 うん、僕は今一つ思いついたんだけどね。今まで家族みんなで、その、山野リカっていう子がこの家の中に入ってくるのに対して不愉快な顔をしていたわけだ。しかし、実際にはどうなんだろう。彼女は押しかけてきていただけだろうか。清彦君が呼んでいたのじゃないだろうか。

父 そうです。今度、足首を切ったのも、その子がもう「別れる」って言ったんでというのがあるんです。うちの子が呼ぶんですわ。

私 なるほど。そうであれば、まさにリカさんは清彦君にとってはだいたいな人だったわけですね。

母 そうですね。

私 そのだいたいな人に対してみんなでいやな顔を向けていたわけです。

母 なるほど、そうですね。

姉 あんな、でれっとしたのっぺらぼうのどこがいいのかな。し

かしまあ、たで食う虫も好き好き、なんて言うしなあ。お母さんはお父さんみたいなのを選んだんだし、しょうがないな！

私 ずいぶんと口が悪いんですね。

母 そうなんですよ。

私 でね、僕の思いつきというのはね、その「リカさんを喜んで迎えてみる、ということをする事」なんですけど。

姉 ええっ？ 本気？ そんなことできない。

私 うーん、どうかな。実際には、今までもリカさんは一晩中この家の中にいつづけていたよね、あなたたちがどんなにいやだということを表明してみても。一晩中家の中にいれば、トイレに行ったりして顔を合わせる事だって何回もあったわけでしょう。

姉 ガンガン音楽を鳴らしたりね。試験のときなど、私はどなりこんでいたりしていたわ。

母 そうでした。それでも少しだけボリュームを下げてくれるだけなんです。しばらくするとまた同じこと。

私 なるほど。では、そういうことがあっても、それ以上のことはなかったわけだ。ということは「そんなことはできない！」とあなたは言ったけど、今までもどうにかがまんすることはできていた、ということだよ。でね……、これから作戦を立てるわけですよ。いきなりニコニコなんてできないということがわかりましたから、そうですね。ほんの少しだけ努力していただくんです。

母 どんなやり方で？

私 やり方として、そうですね。夜、たとえば一〇時とか一二時とかにね、清彦君たちの部屋にお菓子とお茶を持っていくというのはどうでしょう。お母さんはできますか？

母 ええ、しようと思えば。

姉 私はできない。

私 そうですね。お姉さんはできないかもしれませんがね。お姉さんはむしろ、お母さんがするのを応援しておくというだけでいいかもしれない。そのほうがいいでしょうね。今までのいきさつ上。そうするとね、あの子たちは「うん、これはどういうことなんだ？」となるわけです。そうすることはね、「今までは悪かった」「これから考えを変えました」って表明したことになるわけですね。そこではじめてね、「しかし、お願いだからこれからはシンナーだけはしないで」とか「夜おそくまで音楽を聞くのはやめて」と言えることになるんですよ。

母 なるほど。今日先生がシンナーのこと言ってくれましたよね。あれがはじめてなんです。家族が「やめるように」と言えたのは。

私 なるほどね。お茶とお菓子を彼たちの部屋に自然に運んでいけるようになれば、もっと強く「この家の中では絶対にシンナーを吸うことは許せませんからね！」と言えるようになるわけですよね。それまではおどおどかもしれませんが、はじめてみてください。

母 そうですね。なんだか展望が開けそうな感じです。

私 僕にはね、なにかね。その女の子も一緒に立ち直っていく、ということができそうな子に思えますね。

母 そうですか。

父親は私たちの会話を聞いておられますが、言葉はありません。しかし、清彦に対して今までのような否定的な態度で臨むのではなくて、少しこちら側が引き下がった態度で臨むということになったことに不満ではないように見えました。私は念のために確認してみました。

私 お父さんいかがでしょう。

父 やってみる価値はあると思います。

こうして、この夜は休むことになりました。小窓から石どうろうの日本庭園が見える部屋で休ませていただいたのですが、お風呂をいただいて床についたときには、もう二時を過ぎていました。

### ●——母親に怒りをたたきつける父親

翌朝、私たちが目を覚ましたときには、もうお姉さんは出かけていたので、朝食のあとで、両親と清彦を交えて簡単な面接をしました。それは昨日話したことの確認作業みたいなものでしたが、清彦に対して昨日よりも強く、「僕は君のシンナーのことでやってきたのだ」と表明することができました。私は次のような言葉で言ったのです。「もしな、君がシンナーをしつづけるようだったら、また幻覚が出てきて自分のからだを傷つけてしまうようなことをすると思うんだ。しかも今度はとりかえしのつかないことになってしまうかもしれない。そうであればね、そうやって自分で自分のしている

この意味が分からなくなってしまうまえにね、君を保護しないと  
いけない。シンナーで神経がやられて幻覚が出るということははっ  
きりしたことなんだよな。自分で今回はっきりと体験したわけだ。  
だから、君がシンナーをしつづけるようだったら、僕の病院に入院  
してもらおうと思う。まあ、そのことをご両親にもはっきりしてお  
きたいんですが、そのときにはためらいもなく、僕に電話してほしい  
と思うんですが、いいですか？ 僕はいつでも飛んできます。」

こうして、家族全員を励まして終わったのでした。

四月の下旬になって、ふたたび上京することになりましたので、  
約二週間後に電話してみました。すると、電話に母親が出られて、「今  
のところ明るくなりました。仕事はしていませんが。足首の抜糸を  
して、まだ力を出すと危ない、ということで。しかし、毎日家にい  
て、ほんとうにシンナーはしていません。しかし、まだ安心はでき  
ませんけど」と言われます。事件のあと「山野リカが泊まることも  
なくなった。来ても一二時までには帰っている、お茶も一回だけだ  
けど、出してみた、チャンスがあればまた出してみようと思う。そう  
してみて、そう悪い子ではないんじゃないかと思えるようになった」  
と経過は上々だったのでした。

この約一週間後の土曜日に、二回目の面接をしました。この面接  
は、初回の面接とちがって、時間を夜の八時から一〇時までと限定  
しました。私はこの日、関東での面接者を三家族予定していました  
ので、時間がとれなかったということもあったのですが、時間が余  
っていたとしても、たぶん時間を限定していたでしょう。時間を限  
定することで問題を明瞭にし、一人ひとりの緊張感を出すことがで  
きるのです。そして、面接の参加者としても、私のほうも一人だけ  
で、家族のほうも父親、母親、本人の三人だけにしたのでした。こ  
ういう工夫も焦点を一か所に集中させるのに役立つのです。この日  
の面接では、次のような場面をつくりだすことができました。私は  
清彦と次のような話をしていました。

私 これからどうしていくつもりなの？

清彦 アルバイトを見つける。

私 そうか、アルバイトね。なんか、ちゃんと長くつづけられそ  
うなものをとば考えないの？

清彦 うん、自動車学校に行っただンプの免許を取る。

私 うん、それどうしてすぐにはじめないの？



清彦 うーん、まだ年が一七だからね。

私 ああ、そうか。なるほど、それまでさ、宮崎とか出かけて、環境を変えてみようかなどとは思わないの？

すると、母親が急に横から「それはいい。一年くらい離れてみたら」と言われます。ところが、それまで「僕も君の友だちの山野リカさん、会ってみたいんだけど」などという僕の話しかけに笑って答えていた清彦は、母親のその言葉に対して、突然、烈火のように怒りはじめめるのです。そして、「一〇〇〇万円くれたら、出て行ってやる」という言葉を母親なりにたたきつけて出て行ってしまいます。

清彦にとっては、「俺をこの家から追い出したいのか」という怒りなのですが、問題はこの状況に対する父親の反応です。父親は清彦が席を立つと、いきなり母親を怒りはじめめるのです。それも、まるで私がそこにいることを完全に忘れていたかのような怒りようなのです。

「本人はちゃんと自動車免許を取ると言っているではないか。それまではアルバイトをするとやっているだろう。いつもお前は押しつける。あの子はどんな意見でも押し付けられるのを嫌うんだ」と、顔を真っ赤にして、ありったけの汚い言葉を母親の顔を目がけてたたきつけられるのです。母親は、きょとんとした顔です。私自身も「お母さんの言葉はそれほど子どもに押しつけているようには聞こえなかったのになあ」と、びっくりするほどでした。もしかしたら、父親はせっかくうまく行きそうだったのに「もうこれで、すべてが台なしになってしまった」と、うろたえてしまったのかもしれない。

しかし、父親が母親に向かって「怒りをたたきつける」ということは、今までのこの家族のいきさつ上、必要だったのでしょう。清彦が母親の言葉に「押しつけられる」と感じたのとまったく同じ感覚を父親はもちつづけてきていた、ということだったのでしょう。父親の大声のあまりのすさまじさに、清彦は階段を上っていく足をいったん止めたのでした。母親が口を閉じ、清彦が足を止める、ということさせた「できごと」は、家族の中に新しい変化を確実に起こしていったようです。

## 第四章 押してもだめなら引いてみな

非行の子どもたちの親は、自分の子どもだけを仲間から切り離そうとしがちです。とくに女の子どもの両親の場合、グループ化している非行の男の子どもたちから、なにがなんでも引き離そうとしがちです。ところが、そうしようとすればするほど、むしろ子どもは逆の方向へ行ってしまふ、ということを経験されているはず。もし、強引なやり方で「切り離すこと」が成功したとすれば、その子どもの心は深く傷ついてとりかえしのつかないことになってしまうかもしれません。表面上は従ったように見えても、心は全然従っていないから不満をつのらせ、やけをおこし、腐っていつてしまふしかないのです。

それはちょうど、恋愛中の男女を切り離そうとするときに「親と子どものあいだ」でひきおこされる現象とまったく同じ姿である、と考えてよいでしょう。かけおち、転落、自殺、等々の目に見えた犯行がなく、親の言うままに従って好きな人と別れたり、気に沿わない結婚をしたりしたとしても、「そうさせられてしまったことで失ったもの」は大きくて、仕事や育児に対する無気力、夫婦関係の健全な発達の傷害、やがて離婚、そして自暴自棄、親に対する絶望的な拒否感情などがおこり、神経症やアルコール中毒を来す場合すらあるのです。これはどういうことかということ、次のように考えてみるができるでしょう。わかりやすくするために、恋愛の場合で考えてみます。

(1) 多くの恋愛の場合で、好きになる相手は自分の親にそっくりのタイプか、まるっきり反対のタイプになることが多いでしょう。もちろんさほどに鮮明でない場合もあるのですが、そのそれぞれの理由としては、次のようなことが考えられるでしょう。

- a 親への敬愛が深い場合に「親にそっくりのタイプ」を選ぶ。
- b 親への嫌悪・憎悪が強い場合に「親と正反対のタイプ」を選ぶ。
- c 敬愛も憎悪もさほど鮮明でない場合には、選ぶ相手のタイプも不鮮明となる。

(2) こういうふうに分類すると、問題のおこってくる親子関係はbの場合になるといえます。

(3) こんな親子関係だと、子どもの側からは「あんな親にはならないぞ」「兄貴みたいに、親の目を気にしながら小さくなっているなんて、あんな生き方はしないぞ」「お姉ちゃんみたいに、ボーイフレンドもつくらないで、車に乗って深夜の街を走り回る楽しさも知らないで、ただただおりこうさんにしておくなんて、だれができるものか」と、親に向かって挑戦することになります。

(4) 親の側は「自分がよしとするものと反対の方向に進もうとしている」子どもを必死に食い止めようとして、「殺してでもそっちには行かせないぞ」と阻止しようとするようになるのです。

(5) そこで、「今、負けてなるものか」「今、甘いことをして、だらしのない子にしてなるものか」という壮絶な親子戦争がくり広げられていくことになります。

(6) そして、恋愛の相手と恋愛することよりか、恋愛を阻止しようとする親との戦いのほうに情熱を使い果たしてしまい、恋愛の相手を見失って、ほんとうはしようと思ひもしなかったこと、たとえば妊娠とか結婚などをしてしまうのです。

つまり、こういう場合には「押してもだめ」なのだから、「引いてみる」のがよいのです。ところが、実際には親は「そんなに簡単に引くことができない」「ここで引いてしまったら、とりかえしのつかないことになってしまう」と考えて、目先が見えなくなってしまうという場合が多いのです。

一〇年ばかりまえ、私がまだ家族療法的な治療法を充分学習する以前に、そんな家族の両親と大げんかをしたことがあります。それは「中学一年からはじまった非行少女の家族」だったのですが、これは私としては恥ずべき体験です。このケースも『葛藤する思春期』で紹介した家族ですが、簡単にくりかえして述べてみましょう。この少女の非行の内容は「万引き、夜間徘徊、学校への遅刻、早退、喫煙」などでした。もちろん家族にとってはすべてが気になることなのですが、一番気になるのは夜間徘徊でした。というのが、連れだって歩く同級生の男の子が暴力団関係者の子どもだったからです。母親はこの子の書きかけの手紙や日記を読んだり、電話を盗み聞きしたりしていますから、二人がすでに恋愛関係にあることを知っています。そこで、必死になってこの関係を切らせようとするようになったのです。夜は玄関に鍵をかけて、家から出られないように見張っておきます。しかし、そんなに一日中厳重に見張れるものでは

ありませんから、子どもはすきを見て逃げ出していくのです。どうしても出たいと思えば、知恵を使えば簡単です。彼女は「お風呂にはいる」とか「トイレに行く」とか言って中から鍵を占め、そのまま窓から外へ出て行ったりしてしまうのです。怒りの燃えた父親は子どもの顔に飲みかけのビールを投げかけたり、足げりにしたりするしまつです。自転車で逃げるのを車で追っかけて、ぶっつけて倒したりもします。

しかし、子どもは従うどころか、そうすればそうするほど、ますます悪くなって家に帰ってこなくなってしまうました。そこで、思いつめられて両親は、たぶん最後の手段として私の病院に「入院させてくれ」ということになったのです。子どもは「いとこの叔父ちゃんが東京から帰ってきたから一緒にドライブしよう」とだまされて、私の病院に連れてこられたのでした。子どもは「ひきょうだ」「ひきょうだ」といって噛みつかんばかりに泣きわめきながら、父親と叔父とに両脇を引き立てられ、引きずられるようにして診察室にはいつてきたのです。

父親の顔は汗びっしょりで、真剣そのものです。疲れ果てた父親の顔から、娘を思う苦しみが痛いほどわかりました。しかし、その感情は捨てて、私は娘に向かって、「僕はね、必要がなかったら入院させないよ。親といえどもかってなことはできないのだよ。だまして君をこうして連れてこられたのは、絶対お父さんたちのまちがいだ。しかし、お父さんたちはこうせざるをえなかったみたいだ。あなたみたいに元気な子を精神病院に入院させないといけないと考えられたお父さんたちの話をこれから聞いてみて、それから、どうするのが一番よいかを考えるから、あなたもここで聞いていてよ」と言って静めたのでした。じつに利発な、負けん気の強い元気のよい子で、父親の話の合間にも、「どうしてその男の子を悪い子と決めつけるの！　いつもお兄ちゃんの友だちはいい子で、私の友だちは悪い子と決めつけているでしょう！」「会ったこともないくせに、そんなことがよく言えるね！」などと次々とめどなく罵声を浴びせるのです。それに対して、父親は「あのね、あの家のことはお父さんたちは会ってみなくてもちゃんとわかるんだよ。まだナコちゃんは子どもだからそこまでわからないんだ。おとなになってから後悔したんでは遅いから、こうして叔父ちゃんに帰ってもらってまでお父さんたちはしているんじゃないか。ぜんぶナコちゃんのためだよ」と、ナコにおとなの考えを押しつけるだけなのです。私は二人に思

うぞんぶん話させたいうえで、「このまま家に帰っても、ナコとお父さんでは考えがまるっきり噛み合わないんだから、また家を飛び出したくなるよね」と話しかけてみました。すると「うん」と答えてくれます。そこで、「だったら、僕のこの病院でしばらく過ごさないか。ここから学校に行ってもいいし、街に自由に出ることもできるんだよ。その代わり門限は厳重だぜ」と言ってみました。そしたら、ナコは「それなら入院する。あんな家なんかにはいたくない」と答えることになったのでした。

娘が病室に上がってから、一安心された両親は二人そろって私のところにみえました。母親は自分の手は汚さなくて、うまく父親をコントロールしている母親とみました。「自分は母親として充分のことをしてきました。この私が悪い女にはどこから見ても思えないでしょう？　しかし、あのときおりあの子が悪いのです。それは私ではなくて主人のせいです」という顔をしておられるのです。父親は、ともかく「今日のところは家内を安心させることができそうなので、まず一段落」という表情です。そして、「開放病棟ではすぐ逃げ出すと思うんです。私たちは男の子との関係を切らせるために、しばらくは学校にもやらずに鍵のかかった病棟で見てほしいんです」と言われるのです。それに対して私は「そんなことでは治療はできない。今のような入院のさせ方をしておいて、鍵のかかった病棟に入れることにしたとなったら、僕が彼女を裏切ることになる。今の診察の状態からして十中八、九、逃げ出すことはないと思う。もしそういうことがあったら、病院で全責任をもって探しましょう」と答えたのでした。それに対して両親は不服そうでしたが、私の強硬さに負けたのか、「今までの疲れから開放されるかもしれない」という可能性に身を任せてもいいか、という気持ちになられたのか、その日は引き下がられたのでした。

入院を選んだナコは、女性の心理療法士に個人的なことを包み隠しなくしゃべり、日に日に明るく元気になっていきました。母子関係、夫婦関係のいろいろのものが彼女の話の中から確認されていきます。外出からも約束の時間に帰ってきます。そこで私たちは家族を呼んで、「娘をこの地域の学校に転校させて、ここから学校に通わせたい」「男の子を病院に呼んでどんな子どもかを確認したい」という申し出をしました。ところが、両親はかたくなに私たちの要求を拒否されるのです。それどころか、「外出を許可しておられるから男の子に電話をしているのではないかと思う。はじめのお願いのとお

り、閉鎖病棟にしてくれ」と強硬に言われるのです。私は「閉鎖病棟に入れつづけければ、子どもが男の子のことを忘れておられるのはどうも単純すぎると思いますね。むしろ、そんなことをすると、ますます心はひねくれて、とりかえしのつかないことになってしまうと思います」と言います。すると、「冷たい言い方のようですが、あんな種族の男とかかわりをもつよりか、そのほうがまだましなくらいです」と言われます。そこで私はあきれて、暴言を吐いてしまうことになるのです。この父親が商人でしたので、次のような言葉を使ってしまいました。「一つの商品をです。蔵の中におきつづけたら腐ってしまう。ということがはっきりしているときにね、置きつづけるのはアホでしょう。太陽に打たせ、雨に打たせ、風に打たせ、そのためにいくらか傷つくことになるにしても、腐って元も子もなくなってしまうよりもいいでしょう」と。

これは明らかに私の暴言です。「蔵の中におきつづけたら腐ってしまう」ということは父親には明瞭には理解されていなかったのです。父親は「商品ならいくらでも買い直しがききます。しかし、娘はつくり直しはできません」という名言を吐いて、娘を閉鎖病棟に収容してくれる病院に連れて行ってしまったのです。この子のことに関してはまだいろいろのことがおこるのですが、そのことはここでは省略しましょう。

家族療法の勉強をして頭を整理してから、少しだけ私のやり方はうまくなりました。次に、ちょうど似たような状況で治療して非常にうまくいった一例を、少しくわしく述べてみましょう。この例は、ナコと同じく中学三年生の少女だったのですが、名前は美子ということにしておきましょう。美子のつきあっている男性は、暴力団関係者ではありませんでしたが、以前、非行グループのリーダーをしていたような「ワル」でしたから、両親は引き離しにやっきでした。しかも高校中退者で、二〇歳が近づいているのにまだシンナーをしたりして、仕事をしようとしてはいないのです。

### ●——泥酔状態で保護室に

美子は、シンナーの泥酔からようやく覚めるような状態で入院してきました。福岡県から両親に車に詰め込まれて、高速道路をぶっ飛ばして連れてこられたのです。「入院はしない。これからカラオケを歌いにいく約束を友だちとしているのだ」と言ってふてくされて

いる状態で、強引に入院させたのです。両親が二人だけで協力して病院まで連れてこれたということ自体が、だいたい「この家族がまだまだよくなっていく可能性を大きくもっている」ということを示しています。初診後即日入院、ということは私たちとしては少ないのですが、このはじめての診察の日が「今まで何回も何回も家出をくりかえして、今朝、一ヵ月ぶりにようやく見つけ出せたのだ」ということを聞いて、「まずは預かってみよう」ということになったのです。家出をくりかえしているということは、両親と話し合うチャンネルがうまくいっていないということを示しているわけですから、「入院させずに家族だけの力で治せる可能性は残っているとしても、少し援助をしてやらないとまずい結果になる危険が大きそうだ」と判断したのです。一ヵ月も帰ってこなかった娘を探しつづけて、なによりも両親が疲れ切っておられました。

娘は、「入院なんか絶対しない」と言って抵抗します。それにまだシンナー酔いから覚めずにもうろう状態でしたので、私は大声を出して、強引に入院させ、保護室を使うことになりました。この「保護室」というのは、第一章でも出てきましたが、鍵がかかっている出られない部屋です。トイレもこの中でなければなりません。まるで、刑務所や留置場の独房とまったく変わらない構造なのです。ドアをたたけば看護婦さんは来てくれるのですが、何度も来てくれるわけではありませんし、「出してくれ」と叫んでも「私では出せません、医者か心理の先生の許可がないと出せません」と言われるだけです。これは有無を言わせない拘禁なのですから、私たちだってほんとうは使いたくはないのです。しかし、二四時間のあいだ「一人だけを看護する余裕」は現在の保険医療の診療報酬の中にはありませんので、この「保護室」と称する監禁部屋はまだまだ使いつづければならないでしょう。

そこで、昼間の職員が多くてマンツーマンで接することのできる時間帯には、この保護室から出てスポーツ、散歩、グループワークなどに出かけるのですが、夜は監禁されることになります。この美子の話はこの保護室を出る段階からはじまりますが、そのまえに少しだけこの家族のことを話しておきましょう

家族構成は四九歳の父親、四一歳の母親、それに高校三年生の姉と美子の四人です。親が国家公務員のため、転々と住居を変えています。しかし、美子は「活発で明朗、転校してもすぐにその日から友だちができる、といった社交的な子供であった」と母親は述べて

います。逆に、二歳年上の姉のほうは「気の弱い、人の中に溶け込めない子」で、美子が中学に上がるころは「姉にばかり力を注いでいた」と母親は言っています。しかし、この姉はまじめでコツコツと勉強するほうで、優秀な進学高校の三年生として、現在もがんばっています。母親としては無口なご主人に対していろいろの不満があります。二人の姉妹も父親や父方の親族に対して、あまり良い感情を持っていません。たとえば、母親が「どうして、まあ、寄りにもよって、あんな男を好きになったの」と美子の男友だちをなじると「あんただって、あんなのを好きになつたくせに」と父親のことを指して言い返すといったぐあいです。

### ●——元暴族との関係を断たせたい両親

四人の会話を記してみましよう。

私 あの部屋で今日で四日目かな？

美子 五日！

私 もう、五日になるかね？

母 四日目じゃないの？

私 火、水、木、金……、四日目だよ。

美子 今日は土曜日じゃない？

私 金曜日なんだよな。あんな部屋では曜日もわからんよな……。まだ、あと、一月くらい、はいつておきますか！

美子 いやです。もう、私、今日……出る。

私 うん、出る話を今からしようと思っているんだけどさ。

美子 あそこ、いや。

私 うん、どうだろうね。しかし、少し考えたかな？

美子 考えないとしかたがない……。

母 ほんと？ なにを考えた？

美子 だって、お母さんたちも一週間くらい、はいつたら、あそこに。……もう。

父 どうしてはいつたと思っているのかね。

美子 自分たちだって……。

母 私たちが、悪いことをした？ してはいけないことをしたかな？



そういう調子ではじまったのですが、美子はあっけらかんとしているでしょう。保護室と称する監禁部屋に入れられたことをそんなに苦痛に思っているようにはみえないでしょう。グループ活動のときなどに、他の患者さんから、「もうすぐ出してもらえるよ。この病院は、あんな部屋を長くは使わないのよ」と聞いたのかもしれませんが、心理療法士などとの会話の中で、少し心が柔らかくなってたのかもしれませんが。しかし、一番大きな要因は、私が「交際中の黒木龍治との関係について両親のように否定的ではない」と知って、味方をしてもらえる、と感じられたからなのでしょう。

両親はこの龍治との関係は絶対に断たせようと考えているのです。暴走族のアタマだった男ですし、シンナー常習者、しかも龍治の両親とこの美子の両親との関係は非常にまずくなっています。というのが、美子の母親が「娘が家に帰ろうともしないのに、どうして連絡してくれなかったのですか」と、さも非常識な親だと言わんばかりの抗議を龍治の両親にしたらしいのです。すると先方からは当然のことに、「おたくこそなんですか。うちの息子にはしっかりした恋人がいましたのに、かつてにはいりこんできて。まだ中学生のくせに家庭の教育はどうなっているんです？ 空恐ろしいことです」とやられた、というのです。私は「龍治君がどんな男なのか会ってみたい、そうでないと美子さんの治療は前進しないように思う」ということを説明して、しぶる家族を押しきって会ってみました。

私が黒木龍治と会って見た印象から話しています。

私 来てもらったんですよ、彼に。僕には彼は見た感じではそんなに悪いやつには思えないんですけどね……。まあ過去にはいろいろあったんでしょうけど。お父さん、お母さんがおっしゃると、ちょっとちがうところはですね、むこうの親は美子さんをそんなに嫌ってないみたいなんです。美子さんが一緒にお母さんと料理をつくったりするそうです。

母 あそこではよくおりにして、家でしたこともない手伝いをしたみたいですけど。

美子 （にこにこ笑いながら）してるよ、もう。

母 このまえ連れにいったときですね、お母さんと会ってからいろいろありまして。話し合いができる状況ではないんです。

美子 あの家のほうが居心地がよかったもん！ 一カ月家に帰らんで人の家にいたよ。

母 だからね、そこがおかしいわ……。

私 ああ？ 一月のあいだそこにいたの、ずっと？

美子 ううん、ずっとじゃない。中山のところでも交代でつくってた（食事を）。

私 じゃあ黒木君の家に半分くらいいたわけ？

美子 はい、三分の一か、半分くらい。

私 ほかに彼女がいるのに、その子を押しのけて美子さんが来るっていったのは、一番はじめの段階で、あとはそうじゃないということみたいです。先方のお母さんも、美子さんをいちおう受け入れているということらしいんですね。お父さんの希望どおり、「つきあいをやめろ」と言ってみても、もうやめられないような関係みたいなんですよね。どうでしょうかね。許すとか、許さないとかではなくてですよ、うまく離れられない関係になっているものをどうするかということ、今日は話し合っしてほしいと思っています。

母 離れられない関係ってどういう関係なの？

父 だって、おまえは中学生やろう？

美子 中学生って？

父 ほかの中学生がおまえみたいなことをしてるか？ 異常だろう！ 中学生が半端同棲みたいなことをしてるか？

美子 お母さんたちだって八歳ちがうやろ！

父 それはおとなになってからやろうが。

美子 そういうの関係ないやろう。年なんか、関係ないやろ！

母 二〇歳以上になってからならともかく、もう、あんなにして一カ月のうち三分の一以上もあそこに行って。出入りしているのに、こっちは一所懸命探しているのに連絡もしてくださらないし。

父 彼が逃げるわけじゃないやろう。おたがいにそれぞれ基礎づくりをして、それからでも遅くないだろう。もう明日死ぬとか、年がないとか、そういうわけじゃないだろう！ あと二、三年基礎づくりをして、それから。

美子 どうして？

父 おたがいにがんばらにや。

美子 会わなかったらなんだというの？

母 会ったらなんなの、そしたら？

美子 会いたくなって、また出て行くのよ、私は。いくら連れて帰っても。

母 だれが？ あんたがね。会いたくなって出て行く！ そした

らなおさら家に帰せない。

美子 だって、わざわざ二、三年引き離すって言うからよ。

父 二、三年会わんでも、べつにどうっていいことないやろう。

### ●——遊びじゃなくて本気

この会話が「病院の中で」ではなくて、「家の中で」であれば、たぶんこのあたりで大げんかになって、娘は家をふたたび飛び出すということになっているのでしょう。

やや間があって、母親が、私に向かって質問します。

母 黒木君のほうも離れられないような状態なのでしょうか？

私 そうですね。おたがいに相思相愛という気持ちのようですね。昨日僕が会った感じでは、そんな感じですよ。黒木君は、遊びじゃなくて本気で好きなんだ、と僕は判断しました。「将来、仕事について、結婚したい」というようなことを言っています。

母 本気なら本気なようにね。

美子 (てれるような笑い)

私 で、僕は黒木君に「シンナーはさせない、八時か九時になったらちゃんと家に帰す。無断で家に泊めるようなことはさせない、というようなことが実行できれば、もしかしたら美子さんのご両親も『二人の関係が今までとはちがう』わけだから、君たちのことを許してくれるかもしれんよ」って言ったんです。それで、「これから僕がご両親に話すから、ご両親のほうで君と会いたいということであれば、また来てもらいえるか」と聞いたら「来る」っていうんですよ。こんなに二人の関係が進んでいる状況ではですね、そんな二、三年会わせないって言ったってですね、美子さんは家を飛び出すことになるのはまちがいないと思う。かと言って、僕は保護室におきつづける気はないんです。ですから、八時なら八時に帰る、シンナーはしない、無断外泊はしない、ということを実行させるほうがね、僕は得じゃないかと思うんですね。親にとってもいいし、美子さんにとってもいいと思うんです。彼女が飛び出していきますよね。すると家に帰れないから、むしゃくしゃしてまたシンナーをしようと思うんです。ちょっとむずかしいかと思うけど、もうちょっと親のほうで考えを変えてもらえるといいと思うんですがね。恋愛は理屈どおりにいかないですよ。お父さんお母さんも、若いころのこと考え

ていただくといいと思うんですが、二年か三年会わないといったって、中学三年生にそりゃ実行できないと思いますね。

母 そうですね、ちょっと。……しかし、まだ一四歳ですよ。

私 一般的ではないかもしれないけれど、実際にそれがあっているわけですからね。子どもの成長にも遅い早いがあるわけでしょう。だから、すでに恋愛が進んでいるものを「だめだ」って言ったってね。だから、僕は龍治君も指導し美子さんも指導し、とやっていくほうがいいと思うんですね。美子さんをここに一生閉じこめておくわけにはいかないのです。そんなことをしたら、人権侵害になりますし、四日間だけここにいてもらったんですが、これからどうしていくかということですね、話し合いましょう。実行できる線、実現できる線ですね。美子さんも約束できるし、両親のほうもそこまでならがまんするという線をですね。おたがいに妥協しないといけないと思う。

母 十四歳ですよ。考えられない。(苦笑いしながら)

美子 なんでそんなことにこだわるの？ 十四歳だから、十四歳だからって。

父 おまえ、今はそう言うけど、将来そのつけが回ってくるからね。

母 そりゃ、男の人を好きになったりとか、そういう恋愛感情とかが出てもおかしくはないけど、それを実行に移すというその気持ちがね、どうも理解できない。

美子 後でつけが回ってくるって、なんのこと？

父 後悔するってことよ。しばらくは黒木君とも会わない期間をおかしてもらったほうが一番いいんじゃないかな。

私 それができれば一番いいでしょうね。しかし、それを二年から三年というわけでしょう？

母 うん、つきあうのを認めたら、毎日毎日家に帰らなくて向こうに帰るでしょうね。

父 でしょうね。

私 うーん、そうかな？

母 交際をいろいろの制約をつけて許すとなったらですね。もうそりゃあ、その範囲内せいっぱいでしてくるでしょうし……。

私 うーん、八時にちゃんと帰ってくるとなればいいんじゃないですか？ 今までのように全然帰ってこなかったときよりか、うんとうんといいでしょう。

母 それはいいですけどね。

私 美子ちゃん、ちゃんと八時に帰ってきてシンナーは絶対しない、無断外泊もしないって約束できる？

美子 うん……、できると思う。

私 よーし、「かならずできます」と言わないところが正直でりっぱだ。彼女はやると言っているわけです。やらせてみていいんじゃないですか？ やらせてやれないときに考えてみたらいいんじゃないですか？

父 毎日毎日、あそこに寄るわけ？

美子 うん、たぶんね。

父 あ？（と、開いた口が塞がらない）

私 うーん、八時までには帰るということだけにしておくほうがいい。行く回数を減らすとか、「家に行くな」とかそこまで言うのは親のほうがいすぎだと僕は思いますね。

母 でもよね、はっきり言って交際というのはからだの関係もあるわけ？

美子 どうして？

母 えっ？

私 そんなこと聞かれてもね。いきなり答えられないね。

母 でもですね。八時までとか時間的に制約してもですね、それこそお昼でも一緒にいようと思えば二人で。それこそ部屋に閉じこもって。

私 そうですね。時間をいくら制約していても、しようと思えばどんな方法でもあるわけです。

母 でしょう？ そんなの考えたら親は、ほんとう私たちの娘がですよ、あんなにして、それこそ子どもたちが離れられない、どうしようもないと言って、ああいう生活……、考えただけでもですね、ほんとうどうにかかなりそうにありますわ、やっぱり。

私 僕にもその気持ちはわかります。僕も同じ世代ですから。しかし、事実としてあるわけだから受け入れないとしょうがないと思うんですよ。どうかなりそうだ、なんて言っていたってどうしようもないことですよ。

父 無理かね。ある程度距離を置いてつきあうというのは。

母 けじめをつけて。けじめというのがないわ！

父 どうしようもないという感じだね。これが彼から捨てられたらおまえどうする？ 死ぬか？

母 二人で、それこそ二人ともがんばりながら、将来の生活設計をちゃんとできるって約束するならだけど。

父 無理だよ。そんなことは、まだ。

母 あの人も今年で二〇歳でしょうが。今から仕事について立ちできるようになるまでずいぶんかかるよ。あんたが、中学を出てから働くと言ったって、そんなにしてもし働いたとしてもよ、どれくらいの生活ができると思ってるの？ はっきり言って今までのような生活はできないよ。

美子 だれがそんな生活したりするよ？

母 でもあんた、そんなの、みじめじゃないか？

美子 なんで？ お金があるからみじめじゃないってことはないやろう？

母 あるじゃない。生活できるだけ、最低限の生活ができるだけ必要でしょう。

美子 最低限の生活ができるくらい……。できなくてもいいもん。

母 させたいもん。

父 言ったってわからんわ。

私 まだお母さん、大人の感覚は言ったってよくはわからんと思います。そのへんがね、体験して学習していく領域なのかと思うんですが。

父 でも、気づいたときには遅いんだぞ。もう！ どうしようもないぞ。だからこそ今、言ってんだぞ！

美子 いいもん。

母 去年、一昨年までとはあまりにもかけ離れているからよ。

美子 いいって言うがね！

私 ちょっと、美子さん。さっきお父さんが言いかけられた話、二年から三年会わないというのが無理だとして、一月でも全然会わないということがあなたにできる？

美子 無理かな。

父 彼が了承したらどうする？

美子 ふん。とにかくなんなの？ 会わせたくないの！？

母 どうして、会わせたくないかわからんの！？

美子 どうして、期間がいるの！？

父 まだ知り合って、四カ月にしかならんのだろう？ 彼しか目が見えんのだろうけど、彼と約束して、彼が一月に一回会うって言ったら、おまえどうする？

美子 どうするって。なにを？

父 彼に会って約束させるぞ。

美子 無理やりじゃない？ そうやって。

父 そりゃ、無理やりだよ。

美子 どうしてそんなことするよ？

父 しばらく、会わせたくないからだよ。

美子 そうしてそんなに無理やり言うの？

父 それはおたがいだろう？

母 夢中になって、会いたくて、学校にも行かないで、ずっと一緒にいるなんて……。

父 あそこの中学はじまって以来じゃないのか？ もうちょっと、余裕をもってつきあったらどうだ？ 彼だけが男じゃないだろう？ まだいろんな見方もあるし、いろんな男もいるんだから。

美子 なに言ってるの？

父 考える時間だよ。まだ一四じゃろう。おまえが二〇歳になったどうしようとかまわらないけど、親が今は権利があるんだから。

美子 見守る権利はあるけど、押しつける権利はないよ。

父 押しつけてはいないよ。

美子 無理やりそうさせる……。 (と泣きはじめる)

父 なんで泣かんといかん？

母 つきあい始めてから、どんどん崩れてきたわ。

父 おまえだけが夢中になっているみたいだよ。

母 プラスになっていないもん。マイナスになっていくからよ。そんなに離れられないくらいに好きだったら、それこそ将来のために、今がんばらんといかんのじゃないの？

父 好きなだけでは将来は過ごせんぞ。

母 今、好きになったから、なにもかも投げ出して、ただ好きなというだけで……。

### ●——けじめをつけた交際を

私はなるべくしゃべらないようにしているのですが、美子がここまで追い詰められて、言葉も出なくなると、私の出番です。

私 だからですね。お父さん、お母さん。美子さんはがんばると言っているんですよ。なるべく学校に行く、外泊をしない、シンナ

一をしない、って言ってるんですよ。しかし、お父さんたちは、それだけではすまなくて、絶対、龍治君とつきあうのをやめろ、と言うわけでしょう。ちょっとね、親のほうの要求が大きすぎると僕は思いますね。とにかく今、がんばって学校に行く。シンナーをしない、無断外泊をしない、というだけでですよ、それだけでも、うんとうんといういいことなんですから、それだけでお父さんたちにがまんしていただくしかないと思いますね。全然会わずにいたら、龍治君に対するイメージはうんとうんと膨らんで、もっと「会いたい人」になってくるかもしれません。そして、美子さんの行動はもっと大胆になるかもしれません。それが、時間制限付きの交際なら許す、となっていれば、だんだん龍治君の本体が見えてきて、もしかしたら、お父さんたちが思ってた以上に、もっといい男がいた、と気持ちがおかの男に移るかもしれませんね。

あのね、美子さん。お父さんたちの言ってることを聞いてみると、こういうことみたいなんだな。はっきりした言葉で言われなかったけど、言葉で言い直すと、今、龍治君と会って、性関係ができるようだとか困る、ということみたいなんだな。ご両親、そういうことですね。はっきり言って。

母 そうですね。心配ですもの、やっぱり。

私 そののところなんだよね。美子さんは、そのところで、そんなことはしないってはっきり言えないの？

美子 えっ!?

母 そういうことは、約束してくれる？

美子 うん。

母 それは龍治君にも言わないと……。

美子 うん。

母 はっきり、そこを約束しないと。まだ一四歳なんだから。

ここまでくると、美子は「なかなかこの先生はうまいぐあいに進めてくれるみたいだわい」と思いはじめたようです。表情がにこにこしてきます。しかし、親のほう、とくに父親のほうはおもしろくない顔をするようになります。そこで、私は両親のほうを意識して次のようにしゃべっておきます。「お母さんたちにも考えを変えてほしい」と言うよりか、次のように言うほうが、なるほど効果的なんだな、と理解していただけるでしょう。

私 まあ、今までみたいに泊まらないのであれば、そういうチャンスはうんと減るわけですよ。絶対ないとは言えないけど。(美子



のほうを向いて) そして、「そういうことがないようにする」ってはっきり言えば、お父さん、お母さんももっとちがってくると思うんだな。

父 学校に行ってどうかな。身がはいるかな。

母 そんなにして、ちゃんとけじめをつけて中学生らしくしておれば、それは絶対だめとは言えませんからね。

私 そうですね。けじめをつけた交際をしていく、ということをはっきりしておこうよ。いいかな！ ね！

母 いままでなにもけじめがなかったですものね。

私 うん、そしたら、お父さん、お母さんが、「これならいいかな」という気持ちになられると思うんだな。

父 土曜か日曜に会うのならいいけど、毎日となるとあれだぞ。

美子 そんなに毎日！ 学校が遅いんだから。

### ●——四つの約束で退院

そんな流れの中で、私はこのまま退院させようと提案することになります。

母 退院と言いますと、家にですか？

私 そうです。家に帰して、家でがんばってほしいと思います。家では自信がないですか？

母 家では自信がないですね。それこそ、この人も家にいたくないと言う。なにか、家にいたら、それこそむずむずしてから、ひとときも家にいたくないという状態でしたから。

私 そうですね。今日の会話を聞いていると、僕も家ではまだ無理かな、という気はするんですけど、家で無理というときにはその時点でまた入院する、ということではいけませんか。いったん、家に帰してね。僕は、もう一度、入院するとなった時点では、学校を宮崎のA中学のほうに転向させて長期戦で臨もうと思うんですがね。

美子 絶対いやよ。なんでいまさら宮崎なんかに来ないといけなの？

私 さっき言った四つの約束が守れなかった場合の話さ。

母 そうですね。あんた、ちゃんと学校行ける？

美子 行ける。

母 そして、今までの入院するまえのような生活はしないんでし

よう？

美子 うん。

母 学校からの帰りに、中山の家に寄ったりとか……。

美子 うん？ それもいけないの？

母 環境はみんな一緒だわ。今までと変わらないわ。学校も友だちも。

美子 寄ったからってべつになにもないわ！ べつにシンナーするわけじゃなし。

父 ああいうところに寄るから、帰りが遅くなるじゃない。九時とか一〇時とか。

私 だから、八時に帰るって約束した以上、自分で工夫するでしょう。かりに寄ったところで、シンナーはしない、八時には帰る、という気持ちをもっているかぎり、それはそれでいいとしないと……。あんまりいろいろの要求が多すぎると、本人はかえって約束が守れなくなってしまうだろうと思いますね。

母 わかりました。しかしですね。この子は約束しても盲点を突いてくるんですよ。(全員で笑い)

私 具体的に言っていていただくと、なにがご心配でしょう？

母 八時に帰るって約束したら、いちおう八時に帰る。そして「ちゃんと八時には帰ったよ」って言って、夜中にまた出ていく。

私 なるほど知能犯ですね。そのために無断外泊をしない、があるわけだ。だから約束は、八時に帰る、シンナーをしない、無断外泊をしない、学校に行く、の四つですね。

美子 八時は早い。九時がいい。

母 またそんな。八時でも遅いくらいだよ。よその子たちは受験勉強で必死になっている時期でしょう。

私 八時って最大限の譲歩みたいだよ。

母 学校は四時一五分には終わるでしょう。それから何時間ね。

私 うん、ちょっと多すぎるかもしれないけど、四つの約束は決まりや。それができなければもう一回野島に入院して転校や。このこと、カルテにちゃんと書き込んでおくからな。

こうして、私は強く八時という時間を美子に押しつけてめでたく退院ということにしました。ここで時間まで美子の言うままに譲歩するように私がもっていったとしたら、この家族はたぶん私の指導姿勢に従うことはできなかったでしょう。そうすることはあま

りにも親のプライドを傷つけすぎることになりますから。逆にいうと、美子がここでわがままを出して過大な要求を出すことができる雰囲気をつくって、それを治療者が少し強めに押しえる、ということができたことで親のプライドを保つチャンスができた、というわけです。

### ●——子どもたちとカラオケに

美子の芯の強さに関してはかなり信頼を置いていたのですが、家族とのかかわりが心配でした。退院を決めたあとでも、「八時までどこで過ごすのか」「黒木君の家に入りびたりになるのか」などと言って、とくに父親がくどかったので、このぶんだと家を飛び出さざるをえない事態が現われるか、と考えていたのです。ところが、彼女はそれらの障害をうまく処理していったようです。

退院後二週間目の面接には、黒木龍治にも参加してもらうことになりました。美子の家族の車に乗って福岡県から四人で来てくれたのです。

私 時間は守れていますか？

母 ええ、でもぎりぎりのところで。

私 しかし、それはりっぱ。

母 八時一分前とか、三分前とかですね。もう、こっちがどきどきしてくるんですね。時間が迫ると。でも、まえよりは私のほうが楽になったですね。もう、家にいるっていうことだけでもですね。

私 それは黒木君も協力してくれるからでしょう。「八時だぞ、もう帰れ」とか。

黒木 いや、彼女のほうから。

私 ああ、そう。そりゃいいですね。そんなけじめがつけばね。お父さんもお母さんも許してくれると思うんですよ。

父 そうですね。けじめが、まあ、生活がふつうにもどればですね。

私 そうですね。（美子のほうを向いて）勉強の準備はしているの？

美子 うん、ちょっと。

私 ほう、高校受験するんか？ 黒木君は中退だったよね。やっぱり卒業すればよかったなんて思ってんじゃない？

黒木 はあ。

私 思ってる！ じゃ、美子さんが高校受験に向けてがんばりはじめたことに関しては、応援してやりたい気持ちですね？

黒木 はい、それはもう。

私 君自身も検定試験でも受けてみようかと考えたことないの？

黒木 考えたけど。

私 君にやる気があれば、親は援助してくれるんでしょう？

黒木 はあ、まあ。

母 まだまだ一九歳なんだから。これからですよ。今の仕事は何なんですか？

黒木 解体業のアルバイトです。

母 それに満足してらっしゃって一生それを？

黒木 いや、たぶん夏になると思うけど、簿記の専門学校に行こうかと思っています。

母 どうせやるのなら、大学でやってみられたらどうです？ 一生もったいないですわ！

龍治は、母親の挑発的な言葉にも怒らずに答えてくれています。母親は龍治をはじめとする美子の周りの「非行というレッテルを張られている子どもたち」に対する見方が少し変わられたようです。

母 子どもたちがですね。ビアガーデンかカラオケに連れていってくれというんですよ。それで、ビアガーデンはアルコールがあるからちょっと、と思って、カラオケに行ったんです。四人で、一時までという制限付きですね。

私 へえ、そういう例外があるのがいいですね。八時ではなくて一時までという特別時間があったわけですね。

母 そうです、そうです。一人で五曲ずつ歌ってですね。まあ、そんなの見ていて、やっぱりこんなことして遊んでいる、これでは楽しくてですね、学校だとか行きたくなくて勉強したくなくなるはずだわ、と思っていました。もう、こんなに早くから味わったらいけませんね。

私 おとなの世界に早く足を突っ込んでみたいんでしょうけど。

母 それに、中山さんなんか、いつも独りぼっちなんですよ。お母さんと二人暮らしなんですけど、お母さんは昼も働いて夜もスナックで働いてという具合で、だから、こうして言い聞かせてくれる

人もいないし。

私 そうですね。しかしね、僕はまあ、お母さんがですよ。一緒にね、カラオケに肩組んで行くなんて、びっくりしました。(美子のほうを向いて) あんたもびっくりだったろう？

美子 うん、はじめてです。

私 はじめてで、しかし、半分うれしかったやろ。びっくりしながら。

美子 うん、そのとおり。

私 そうやろ。そんな親子関係になってくれるのが僕の願いだったんだ。

母 (笑いながら) しかしですね。たばこを吸ったりしている姿を見ると、やっぱりもう、がっかりくるんですよ。親はすぐ欲が出て。勉強してくれたらなあ、と思うんです。テレビを見て、CD聞いて、それから電話が長いんですよ。

私 そりゃあ、会えないんだから、電話位したいわね。(みんなで笑い) あせらずに少しずつ変えていきましょうよ。僕はまあ、中山さんなんかと一緒によくなっていくといいと思うな。その子、学校には来ないんでしょう。

美子 うん、全然。

私 そう。ぜひそのと一緒によくなって行く、と考えてください。もう親がはじめたみたいで言わなくてもいいことかもしれないけど。みんなと一緒によくなっていくということがたいせつなんです。しかし、トイレで隠れてたばこを吸ったり、それを先生や他の生徒に見られて、お母さんたちの耳にその話が届く、となると、親たちが恥ずかしい思いをするというのはあたりまえだわな。

母 そうですね。髪の毛にしても、服にしても、ふつうの子とちがいますからね。こんな格好で出てもらうと、やっぱり近所の目というのが、いろんな人がおってですね。困ります。自分もそうなんだろうけど。(自分自身がまだ非行の子たちをよく理解できていないということ)「あの子がっ！」とか「あの髪が！」とか聞こえるんです。

私 昔はあんなにかわいい子だったのにとか、親はどう思ってるんだろう、とかね。かならずそんなことを言う人がいるんですよ。あんたは何とも思わないかもしれないけれど、お父さんお母さんはちがうわな。あんたも、そのことをちょっとは気をつけてやってよ。

美子 人は人よ。私は私。

母 おもしろい格好をして自分ではまちがっていないと思うかもしれないけど、やっぱりちがっているよ。

私はここで、ふたたび龍治のほうへ声をかけてみます。

私 黒木君も以前はシンナーをしていたんだ。

黒木 はい。

私 やめてから、どのくらいたつの？

黒木 一年は、経っていない。

母 まあ、うちの子を病院に入れるまえの日に主人が「シンナーを吸ってる？」って聞いたら「はい」って言いましたよね。

黒木 (沈黙、こういう攻撃的な母親への反感も示さない)

なんと母親の言葉のとげとげしいことでしょうか。こうなると、私はこの黒木君を支えなければならなくなります。「そう、じゃあ、ごく最近までやっていたんだ。すばっとやめるということはたいへんだろうね。しかし、万が一失敗しても、もう一回やり直す、ということだと思ふな。一回失敗したら、もう全部だめって思い込んでしまいがちなんだよね。そこんどこを何度失敗してもダルマさんのように立ち上がってみてください」というぐあいに。

## ●——二人の性関係をめぐって

退院したのは七月でしたので、すぐに夏休みにはいったのでした。しかしこの夏休みのあいだも美子は、退院するときの約束をちゃんと守って八時には帰宅して、勉強もつづけていきます。姉と同じ進学高校に行くのだと言って、大学生の家庭教師までつけて勉強することになりました。シンナーももちろんしませんし、すべて順調と思えるのですが、母親の心はまだまだおだやかではありません。母親として一つだけ大きく気になることがあるからです。それは、娘の純潔ということでした。

母親は私の外来日に長距離バスに揺られて一人でみえて、次のように言われます。「すべて順調です。しかし、学校から帰るとかならずシャワーを浴びるんです。そしてかならず、黒木君の家に出かけていきます。私はシャワーの音を聞くだけで心がたまらなくむしゃくしゃしてきます」と。

この言葉がどういう意味で使われているか、たいていの方には想像がつくでしょう。そうです、シャワーの音は、娘が龍治をセックスをするための準備の音として母親の耳には聞こえるのです。それにたいして母親がイラツクことになるのはなぜでしょうか。私が「美子たちのあいだに性関係があるということをはっきりさせたあとの会話」を述べてみましょう。はじめのうちは、父親、母親、本人、私の四人の会話です。用足しに出かけていた龍治も後で会話に加わります。

母 私たちはそういう関係があるなんて考えたくもなかったんですよ。もし、それがあるとしたら、ほんとうならもうつきあいをやめさせたい。

私 そうですね。今までそのところを疑うだけではっきりさせなかったから、いつまでもすっきりしなかったわけだ。そのためにおたがいの心の中にもやもやがあったわけですよ。(娘のほうを向いて) あなたもはっきりさせたくなかったけど、今日はじめてはっきり言えたわけだ。

母 中学生で、そういう性関係があるというのは親としてはですねえ。私たちは考えられないというか、今のこの状態ではそういうことを認めたかたちになってしまうでしょう。

私 そうですねえ。

母 だから、ちょっと……。そこはもう、それこそ、もしですね。妊娠しないようにしているとは言っても……。もしまちがって妊娠したとしたらですねえ。

私 うーん、そうですね。しかし、お母さん。まちがって妊娠したらという心配よりかですよ。かりに妊娠しないようにしたとしても、その、セックスは認められない、ってことでしょうか？

母 ですね。

私 妊娠しないようにしたとしても、そういうことは親として認められない、というのが、今のお気持ちですね。お父さんもそうなんですか？

父 そうです。

そんな話の途中で、黒木龍治がやってきます。私が話の途中経過を説明して、彼を会話の中に入れます。母親は彼に向かって、真っ向から攻撃を挑まれます。娘は、彼の援護に回ります。

母 あなたはもうすぐ二〇歳なんですよ。もし娘が成人ならそんなことまで私たちが感知することではないと思うけど、まだ子どもでしょう！ まだ一四ですよ。

美子 なによ、それで。

母 そうでしょう！ 今まで、まあ、もしかしたらそういう関係にあるかもしれないとか思ってた、はじめは。しかし、私としてはね、いつも、「あっ、そういうことじゃない」って、自分で自分をね！……押さえていたんだけど。しかし、もしかしてそんなのがあるかもしれないと思って、私は美子を病院に入れたんですよ。よその娘を！ しかも一四の娘をですよ！ 私はそれこそ、そんなことがあったら、ただではおかん、と書いていましたよ！ まあ、相手の男の人でも殺してやる、ぐらいに書いていましたよ。よその娘をなんですか！ なんて思ってたらっしょと！

美子 なんね、その言い方！

母 （娘の声の大きさに少しひるんで） そうやは！

美子 よその娘なんて、あんたにそんなことが言えるとね？（この言葉は、「私のことをそんなにたいせつな娘とは思ってないくせに」と言っているわけですから、この娘が家族からやっかい者あつかいにされ、のけ者にされているかのように感じている、ということがこの言葉から推測できます。）

母 いくら、あんたがなんて言ったって、あんたはまだ子どもでしょうが。

美子 そうだよ！

このあと、しばらくの沈黙が流れますが、母親はまたもや龍治への攻撃を進めます。しかし、今日は彼は攻撃されてばかりではありません。

黒木 まあ、僕も美子さんとそういう関係になったことはほんとうなんだけど。そんな、遊びとかじゃなくて、ほんとうに好きだったからやったんで、冗談半分とか若いからそのときだけの考えとか、軽い気持ちで、というのではありません。

母 まあ、でもほんとうに美子のことを好きだったら、ほんとうに思ってくださっているのだったら、そういう態度にはでられないんじゃないんですか？ ほんとうに美子が大きくなって、ちゃんと



自分で判断できて、なんでも責任をとれるようになってからじゃないですか？ そんなふうな行動をとられるのは？

**黒木** だから、美子さんとも話して、おたがいに責任が取れるようになろうと。自分も仕事について、よし子さんは来年の高校受験のためにがんばって……、というふうに。けっして遊びではありません。

**母** まあ、それは一八歳以上か二〇歳以上の女性に言う言葉でしょう。

**私** あの……、ちょっと。そうですね。責めるとかじゃなくて、もうちょっと理解するかたちで話を進めましょう。責めたってだめです。まだまだ一九歳ですからね。そのへんの押さえる力がなかったんだと思うんですよ。僕の一九歳なんて、ほんとうに黒木君みたいにしっかりした考えはもっていなかったと思うんですよ。でね、今後どうしたらいいのか、ということで話を進めていきましょう。お母さんが黒木君を責めれば責めるほど、美子さんはお母さんを責めることになっていきそうですよ。（ここでしばらく沈黙。しばらくののち、また私がつづけます。）美子さん一人で「一四も一九もかわらんじゃないか」って言いたいわけだね。おとなが、「一四歳ならこれこれしかしてはいけない」ってそういうふうに締めつけてくると、「だれがそんなものなど受け入れるものか」という気になって、ますます反発したくなってくるわけだ。「私はお母さんのために生きているんじゃないもん！」とね。

美子は返事をしません。だれからもしばらくのあいだ、言葉が出ません。やがて母親が、「もう、しかたないなあ」と絶望したような言葉をうめくように出されます。そこで私は次のようにもってってみました。

**私** 今なにが一番だいじかといえば、僕としてはシンナーをやめることなんですね。その次に高校受験の準備をすることかな。ところが、お母さんとしては、それ以前に性関係のことをこのままでは「絶対に耐えられない」というのがあるのかな。

**母** そうです。

**私** お父さんもそうですね。

**父** そうです。

**私** そうですね。うーん。するとね。ほんとうは、そのお父さん

とお母さんの気持ちを汲んで、君が中学を卒業するまではね、その、性関係をもたないと、そんなふうなことが実行できるだろうか？

美子（声には出ませんが、はっきりとうなずきます。）

私 なるほど。君のほうは？

黒木 僕もできます。

私 そう。それならいい。今までは美子さんが八時までに帰ってきて、いつでも二人きりになれるのだからといって心配して疑ってきておられたわけだから、そういうことは今後いっさいしないと伝えてくれたら、それはうれしいことですね。

母 そうですね。実行できればそれはうれしいことです。しかし、黒木君の部屋の構造は密室ですからね。

私 となると、言葉でそう言っても信用ならないということですか？

母 そうですね、今までが今まででしたから。

私 なるほど、いきなり信用しろと言っても、それには無理があるのかもしれないね。それなら「疑いを捨てろ」とは言わなくて「だんだん薄めていってください」と言うことにしましょうか。それならできるでしょう。

母 私はもう家には上がらずにやってほしい思うんですが。

私 うん、僕はそこまで要求するのは「親の側が要求しすぎだ」と思うんですね。黒木君と美子さんとはもうすでにね、おたがいに信頼をもちあった関係なんですよ。それをね、切ることはできないと思います。それを切ろうとしたってかえってくっつけてしまうようなものです。ほんとうに切ろうとしたら血が出るかもしれません。それはしないほうがいい。むしろ二人で協力して立ち直ってほしいと僕は思いますね。そのことをご両親も応援してほしいと思いますね。どうも、お母さんは「もう！ そんなことはがまんできん」と言っているような顔だけど。

母 言いたくなかった！（少し笑い声を交えながら）

私は最後に少しだけ笑いをつくることができ、満足してこの日の面接を終えました。そして、最後に黒木龍治に向けて、「君もお母さんからがみがみ言われると、むかむかするかもしれないけれど、それをがまんしてやってみてください。君自身がそういうふうと言われる立場にあるわけだからね」と言っておきました。この言葉は両親へ「もう少し、黒木君のことも考えてものを言うようにしてみ

てください」と言っている言葉ともなっているのです。

### ●——父親と母親がけんか？

新学期がはじまった第一日曜日に行なった家族面接は、もう四回目くらいだったのでしょいか。父親は抜けていて、母親、本人、黒木、私の四人だけです。「学校は一日も休んでいない」ということにはじまって、姉との姉妹げんかのことが話されています。

私 ええ？ お姉さんとけんか！ どうしてけんかになったの？

母 電話がね。夜遅く、一二時まえですよ。

美子 一一時半。

母 一一時半すぎ、一二時まえでしたが、中学の同級生から電話があったんです。姉のほうはいつも電話で頭にきているもんですから、言い争いになって。

美子 嫌味なんだわ。だって、わざと聞こえるように言うんだもん。(電話の相手に)失礼だわ。

母 電話も一一時以降は遠慮するとかね。時間も一時間以内とか、ここで話し合いましたよね。それがなかなか実行できなくて。

美子 している。ただ、向こうから来たものはすぐには切れないでしょう。

母 一二時とか一時とか、深夜になるから。

美子 そんなに遅くかけたことはない。

母 嘘ッ。二、三日まえも、あったでしょう。お姉ちゃんが一緒に上に休めば、かかってきて話しているんでしょう？ 夜中に。約束を守らなければ、上の電話はずそうかと思うんですけど。

私 ああどうですか。深夜の電話はやはりみんな困るもんなあ。お姉さんも困る、と。あなたにいつもかかってくるから、お姉さんはいらいらするわけだ。

美子 うん。でも友だちに聞こえるように、「非常識。バカやね！」って、そんな言い方をすることはないと思う。

私 ああ、ほんとう！？ それは問題だねえ。言い方がね。やはりねえ。

母 でも、何回もですから。もう、この人たちが深夜遅く。何回言っても聞かないから、やっぱり電話の途中で姉のほうもがまんがでなかつたのだと思います。

美子 嫌味だわあ……それは。性格が悪い。

母 うーん。電話はあなたが独占しているようなものでしょう！学校の連絡網だとか、私の友だちからの電話とか、いくらしても話し中でと言われるんですよ。それに時間だけではなくて、長電話すると、やはりサラリーマンの家庭ですからね。限られたお金でやりくりしているんだから。今までとは電話代が一万円はちがうんですよ。

私 え！ 一万円も増えたということですか？

母 そうです。それで口座引き落としだものですから、主人が入れ忘れていて、それで姉のほうの高校の授業料が引き落とされなくて督促状が来たりして……。

私 へえ！

母 それでも姉はかっかと来ていたんですよ。

私 なあるほど。いろいろ重なったんですね。

母 そうです。変なところにとぼちりがきて、恥をかいたと言っ

私 まあ、わかりました。電話のことで姉妹けんかになるわけですね。ほかにはどういうことで？

美子 「お母さんとお父さんがけんかをしている！」って言うんです。

私 どういうことだよ。

美子 知らない。姉ちゃんが言ったの！ 二人で無視しているって。そして「離婚したらあんたのせいだからね」って、言い出すんです。

私 なるほどね。

美子 なんか、文句言いだけに二階に上がってくる。

私 うん？ 二階にはあなただけがいて、他の家族はみんな一階ということ？

母 そうなんです。電話がうるさいから。

私 なるほど。それはそうと、「離婚したらあんたのせいよ」とお姉ちゃんが言うというのは、お姉ちゃんは「離婚してほしくない」と思っているんだよね。あんたはどう思うの？ 離婚したらいいと思うの？ 思わないの？

美子 そうは思わない。

私 そう。思わない。それなら、どうして二人が無視しあっているのかって、聞いてみたら？

美子 聞いても無視する。お父さんは。

私 どういうことかな？

母 うーん、無視するんじゃないくて、自分で答えが出せないんだと思う。

美子 黙って、新聞を読みつづけている。

母 自分のことだってわかっているから。

美子 どういっても、理由はこっちにあるんでしょう？

母 あなたが原因じゃない。あなたのことを考えていくことをきっかけに、お母さんたちのことをこう……。

美子 元をただせば、どうせこっちにかかってくるんでしょう？

母親の返事が遅れますので、私が口を挟んでみます。

私 そうじゃないんじゃないか。なんか、お母さんはお父さんに不満があるだろうし、お父さんもお母さんに不満があるんだろうと思うわけね。その不満のきっかけがあなたにはじまったとしても、その責任はお父さんとお母さんの問題であって、あなたが責任に思うことではないと思うよ。さっきあなたが、二人で無視していると言ったけど、もう少しそのことを二人に聞いてみてよ。

美子 わけがわからん。

母 家にいる時間が短いからわからないでしょう。

美子 それで、文句だけ言われて。

私 そうか。離婚するときにはさ、お父さんに恋人ができたとか、お母さんに恋人ができたとか、いろいろあるんだけど、あなたの家ではそんなのどちがうみたいだな。

美子 知らない。

私 お父さんに女の人ができたりするか？

美子 できない。

私 できないやろね。お母さんにはできるやろうか？

美子 できない。

私 なあるほど。

## ●——自分自身の生き方を大切に

ここで私は、今まで話題の外にいていた龍治のほうに声をかけてみます。二人とも、もうシンナーを三カ月近くやめていること、美子が高校受験の勉強に精力的になってきたことなどを話したうえ

で、もう一度、父親、母親の問題に話題をもっていっています。

私 僕はね、美子さんは自分の道をしっかりと歩きはじめた、と思うんですよ。でね、もう少しお母さんも、これからは自分自身の生き方を自分で考えていってほしいと思うんですね。ご主人のこと、娘たちのこと、それはすべてだいじなことではあるんだけど、もっと自分自身の問題に時間をかけてほしいですね。

母 そうですね。できるだけそっちのほうに向かって。

美子 遊べばいいんだわ！

母 （言葉が出ない）

私 そう、そのとおり。遊べばいいのよ。しかし、お母さんは遊びが下手くそみたいだから、遊びを考えてやらんとかんみたいだね。どんな遊びがいいのかなあ。おい、そうだ！ シンナー吸ってみようか！（全員で大笑い）

母 そんなに思うんですよね。ああ、もう負けそうにある……、って。そして、私もたばこ吸ってみようかなあ、と思うんですけど。なんか、やっぱり、そんなことをするのが一番いやなたちと言いますか。たばこを吸ったり……。

私 お酒をのみにいったり。

母 そうですね。ああいう人を見るのがとてもいやなんです。

美子 どうやって生きてきたの？ 今まで？

私 お母さんはまじめ一筋の青春を送ってきたわけだ。

美子 まじめというのが、親の言うまま、先生の言うままというだけのことね。

私 そうかもしれない。酒もたばこもせずに、仕事場から家まで一直線。出かけていくのはお茶か、お花か。

美子 先生はお母さんを茶化しとっど？

私 うーん。そういう人がいっぱいいるよね。そうでない人、それに反発している人もいっぱいいる。僕はね、どっちも偉いなあ、と思うんだよ。

母 私も子どもたちが成人したら、それこそ、自分のしたいことをしようと思っているんですけど。やっぱり、まだまだですね。

美子 すればいいんだわ！

私 ねえ、するときにはおばあちゃんになってしまうよね。

美子 まあね、どうでもいいけどよ。あとから人のせいにせんでね。

母 （言葉をつくろうとしているが、出てこない）

私 もしかしたらさ、あなたのお姉ちゃんもお母さんみたいじゃないの？

美子 うん、性格がみな同じだからいかなのよ。

母 （父親を含めて家族みんなから美子だけが）一人だけ飛び抜けている、ってことじゃないですかね。

私 なるほど。で、美子さんは、お姉ちゃんみたいにはならないぞ、お母さんみたいにはならないぞ、と、そう思っているんだね。

美子 はい、そうです。

私 そうか、そしたら、お母さんもちょっと美子さんのまねを試みたらいい。時々夜遊びをして。(笑い)

母 連れ立ってくれる人がいないですからね。一人で行ったって。

私 お父さんと。

母 おもしろくない人なんですよ。(全員で笑い) 全然しゃべらないし、うんとも、すんとも。返事も一〇回のうち一回くらいしか返ってこないですね。

美子 ゴロゴロしているわ。家におったって。

私 そうか。そしたら、二人でドライブするとか、旅行に出かけるとか、考えられないか？

美子 想像もできない。

母 私はいつもそんなのを期待しているんですけど、「行こう」とか言っても、「めんどくさい」とか、「車が多いぞ」とかなんとか言ってますね、なかなか尻を上げないんです。

私 ゴルフには行かれるんでしたよね。

母 そうですね。

私 ということは、家族とはいやでもほかの人とは行かれるんですね。

母 そうですね。ほかの人がいろいろめんどくさいをみてくださるからでしょう。自分から率先してする人じゃないんです。

美子 もっと、バンバンと言ったらいいんだわ。

私 うん、じゃんじゃん要求したらいいんだよね。「めんどくさい」と言うときには、手を引っ張り上げたらいいいんだよね。

母 いや、言ってもけんかにならないんですよ。

美子 いいがね、けんかになっても。

私 いや、けんかにならないんだって。反応がないわけですね。

母 そうです。だから、こっちがババーンと言っても向こうから

なんにも帰ってこないから、なにを考えているのか、どう考えているのか、わからないしですね。それでもう、私も今まであきらめてきたんですけど、そのあいだに、そのぶん、子どもたちに向かって、というのが……。

私 あるでしょうね。みんなそうなんですよ、あのね、美子さん、ちょっと教えるけどね。たいていの家がそうなんだよ。お父さんとお母さんの仲があまりよくないとね、親の関心が子どもに向かいすぎる、ということがあるわけだ。あなたたちの家ではお母さんだけど、家によってはお父さんがそうなることだってあるわけ。今さ、あなたがお父さんに向かって、「お母さんとドライブでもしてきたら」と言える？

美子 まず、言えない。

私 なるほど、言えない。絶対？

美子 ううん、言おうと思えば言うけど。

私 じゃ、言ってみなさい。一回、遊びで言ってみて。どういうふうな反応が見られるか。

美子 うん、しかし、聞いているのか聞いていないのかわからん。

母 そう、だから返事もなにもこないし、返ってこないから、聞いているのか聞いていないのか、考えているのか、わからないのです。そういうところが、小さいころからあったんです。（この子の）作文なんかも、今思い出したら。

美子 作文書いた？ そんなの？

母 書いていたことがあるんですよ。

私 どんなことか教えてください。

美子 やめてよ。

母 「私のお父さん」という題でですね。

美子 イヤーッ。

母 だいたいの内容は、「いつも黙って、家にゴロゴロしている」と。

美子 （笑う）

母 ちょっと小太りだから、パンダみたい、とか。

美子 （笑う）

母 ゴルフに行って、ただ穴に玉を入れるだけなのがなんであんなにおもしろいんだろう、とか、そんなことを書いたことがあったんですね。

私 憶えていない？



美子 憶えていない、そんなの。

母 この子たちが小さいときから父親のイメージはそうなんです。

私 不満がたまっていたんですね。「うちの父ちゃん、もうちょっと、活発で、もうちょっと自分たちを引っ張りまわしてくれたらいいのになあ」っていう気持ちがたまっていたんでしょうね。

美子 どこにも行かんかった。

私 ああ、それで早く黒木君が欲しくなった。

美子 はあ？ (笑い)

私 お父さんはつまらん、と思ってさ。

美子 そういうわけじゃない。

私 もっといい男性が欲しくなった。

美子 性格がちがうもん。

私 うん、だから、もっと明るくて、ちがう性格でね。もっと行動的で、家の中でごろごろしていない人が欲しくなったんだ。たぶんそうでしょう。自分ではっきりと認識していないかもしれないけど。男でも女でも異性を選ぶときの相手は、自分の親によく似ているか、まったくの正反対であるか、ということが多いんだよ。もしかしたら、どう黒木君のご両親と、そうだ、黒木君のお母さんと美子さんのお母さん、案外と似ているんじゃない？

美子 似ているね、そう言えば。(と、黒木君のほうに同意を求めます)

私 だからお母さん同士はけんかになったわけだ。磁石のプラスとプラスは跳ねあうでしょう？

こんなかたちで、この日の面接は終えたのでした。

### ●——担任の粘り腰にも支えられて

この子の経過は、その後も順調でした。九月の中旬に、私は次のように宣言しました。「経過が良好ですので、家族面接はあと一回で終了したいと思います。ほんとうに遠いところをご苦労さまでした。あと一回というのは、一カ月間の経過を教えてほしいからです。それで、一一月の第二土曜日にもう一度来てください。それを最後にしましょう。」

治療をはじめたのは七月だったわけですから、足かけ五カ月で終了できたわけです。うまくいったのは、この家族が健康な部分を多

くもっていたということですが、あと一つは、この子の通学する学校の先生に恵まれた、ということでしょう。

私は、担任の先生から九月上旬の土曜日に電話を受けたのでした。その要件は次のようなことでした。「その後の美子の学校での経過は順調です。遅刻はありますが、授業を抜け出すとか早退などはなくて、一日学校にいますし、あれほどひどかったシンナーもピタリとやんで、無断外泊もありません。頭もいい子ですから、勉強のほうもずんずん追いついてきています。しかし、困っていることが一つだけあるのです」と、言われます。それは「髪の毛にパーマをかけていて、脱色していることと、連日続く遅刻のことで、学校の同僚の先生がたから『指導方針の統一をはかってくれ』と言われて困っていること」と言われるのです。「学校の指導方針として、校則違反の子どもは教室に入れずに、特別教室で指導することになっている。しかし、今、美子に『その髪では教室には入れられない』ということをも自分としては言えない。めちゃくちゃだった一学期とはちがって、ここまでよくなっているものを、そんなことを言ったらすぐにまた元に戻ってしまいそうに思える。しかし、このまま放置していくわけにいかない状態になってしまったんです」と、まるで、ハムレットのセリフのような電話だったのです。私はこんなすてきな先生もまだおられたのか、とすごくうれしくなりました。

この先生に私がどう答えたかというのと、「先生の今の悩みをそのままぶっつけていただけませんか」と言ってみました。「俺はおまえにずっと教室に来てほしいと思っている。しかし、この学校ではそんな髪では教室に入れないという決まりになっている。俺は他の先生から非難されて非常に困っている」と。そこで、先生はそのとおりに実行して下さったらしいのです。すると、その時点では返事をしてくれなかった美子は月曜日に「髪の毛を染めて」登校するので。このことは、母親から私のほうにいち早く報告がはいりました。遠くなければ電話ではなくて病院まで飛んでいきたいといわんばかりのよろこびの声で。しかし、カールした髪は少しだけそのままにしておくというのが、じつにこの子らしいところです。

学校全体をしては担任教師を生ぬるいと判断されていたようですが、この担任の粘り腰が美子をうまく引き上げてくれる大きな力になったといえるでしょう。九月一五日の面接の場面を再現してみましよう。

私 担任の先生の名前は岩田先生だったかな。いい先生だね。

美子 ちがう。

母 いい先生ですよ。

私 うん。遅刻のチェックって、いやなものよね。僕もチェックされるのが、すごくいやだと思った体験があるよ。僕のは高校のときだけだね。そう、中学まで遅刻はしなかったんだな。僕の出た高校は都城の泉ヶ丘高校っていうんだけど、裏門の前に川が流れているのね。僕はその川にかかる橋の欄干にかけて、わざと遅刻になるまで待っていたの。はじめのうちは怒られていたけど、しばらくつづけていたら、怒られなくなったよ。たぶん、あいつは頭がおかしいからほっとけ、ということになったんだね。美子さんはちょうど今、僕のあのころみたいだな。「もう、美子は怒ったってしょうがない」って、遅刻しても怒られない。

母 そんな感じですよ。気の長い先生ですから。担任になるまえも、「あの先生はなにも言わない。怒らないよ」って言ってたですよ。だから、美子が髪をあんなままにしている、怒られない。だから他の生徒や先生から文句が出るんです。

美子 話が長い。

私 岩田先生の話が長い？

美子 長いというか、職員室に呼ばれても、怒るわけじゃなくて、なんか、だらだら言っている。

私 そうかな。よく考えてみてよ。このまえ、電話を僕がもらったときに聞いたことだけど、他の教室の先生から怒られるんだって。「他の教室の生徒は髪が赤かったり、遅れて来たりすると、教室に入れられないのに、なぜ、美子だけ入れさせるのか」って、他の先生が抗議するんだって。学校全体で統一してくれって。そりゃ、そんな規則や他の先生の考えがおかしいよ。しかし、それが現実で、岩田先生はそれで悩んでいる、というのが事実なんだ。僕は悩むくらい先生だからりっぱだと思うんだよ。ふつうだったら、悩まずに、「はい、なんとかしましょう。今度から教室に入れないようにします」って言ってしまおうだろうと思うんだな。

美子 うん。もう、教室には入れるようになった。

私 どこの学校でも今わね、苦勞をしたくない先生が多いわけよ。「赤信号、みんなで渡ればこわくない」でさ、してはいけないことをいっぱいしている。校則をつくることは必要だけど、それを守らなければ教室に入れ、ってことを形式的にくりかえすのはして

はいけないことよ。なぐったりけったりするのもね。しかし、そんな先生がいっぱいいるんだな。岩田先生、好かん、と思うかしれんけど、先生のいいところを考えんといかんわな。「みんなの先生たちで決めた、決まりどうりのことを自分が納得しなければけっしてしない」というのはほんとうにすばらしいことだと思うんだよ。しかし、それでも、というか、だからこそかな、岩田先生は悩むことになるわけだ。そういうものなんだな、世の中というものは。家で、お母さんが「君のことを心配しすぎて寝込んだ」としたらね、あなたも少し心配になるでしょう。

美子 うん。

### ●——友だちと一緒によくなる

あと一つ、この子がよくなっていく過程で大きな力になったものがあります。それは友だちの力です。最後の面接で友だちの治療のことをとり上げていますが、まず美子の髪のことからはじめています。

母 色を黒くしただけで、まだパーマっ気は少しあるんです。

私 じゃあ、学校側としてはいやがっているでしょうね。

母 そうですね。

美子 なにも言わんよ。

母 いずれ、言われるわ。

私 カットしたら？

美子 いや……、にあわないもん。

私 (笑いながら) にあうと思うけどね。

美子 いやあ、男の子みたい。

私 そうかな。君はしかし、顔色よくなったね。シンナーが完全にかからだから抜けたかな。

母 わりと食べますからね。食べ出しましたから。まえは、ねえ、ほとんど朝は食べなかったし。それが朝からお代わりすることもあります。

私 そうか、もう、なんか、この五月、六月のころのことがばかみたいじゃない？ またしてみたい？

母 (笑う)

私 またやるなんて思わんだろう？

美子 もう、入院したくないもん。

母 いや！そこんところが、だから、学校の先生もですね。その歯止めがただもう入院したくない、とかいう歯止めのうちはだめだ、と言われてたんですよ。ほんとうにあんなことがあほらしいと思わんうちは。

私 口ではああいうけど、ほんとうは思っていると思うけどね。

美子 今はしないよ。

母 私たちも、もう後戻りはしないだろうって、少しは感じがしてきましたけど。

私 そうですね。でね、僕は一つお願いというか質問というか、あるんだけど。あなたの親友の山中さんのことね。

美子 中山。

私 ああ、反対か。彼女はまだシンナーしてるの？

美子 うん。

私 ふーん。彼女も、うちに来たらいいのにね。

美子 え？

私 入院したらいいのにね、いっぺん。

母 ですよ。

私 いっぺん入院しないと、治りきらんと思うんだな。

美子 うん。

私 環境を変えて、治すんだ、という姿勢をつくらないと治しきらないでしょうね。同じ家の中では。そんな環境では。

母 ねえ、なんか、シンナーの罐ごと家にあるみたいですよ。

私 ほんとうですか。あなたの親友なんでしょう。

美子 うん。

私 そしたら、勧めてみなさい。いっぺん入院しろって。

美子 いややって言うわ！

私 いやと言うよ。そら、はじめからいやと言うに決まっているよ。精神科なんて、たいてい、どこかわけのわからんところやと思っているからね。ただ、閉じこめられるところだって思っているんだな。しかし、ね、ほんとうにやめようと思えば、しばらく保護室も必要なんだっていうことを説得してみたら。だいじな友だちであればさ。

母 親がですねえ。ほったらかしですよ。親も家に帰らん日が多いんでしょ？

美子 しかし、山ちゃん（中山）はねえ。おばちゃんは二、三日

しか帰ってこんよ。

母 一週間のうちで、二、三回しか顔を会わせないんだそうですよ。私も気にはなるんだけど。

私 親友であれば親友であるほどですよ、会えばね、自分だけよくなっていくというのがねえ。いつも仲よしだったんだらう？

美子 うん、洗濯も学校でするんだから。

私 ほんとう！ 学校に週に一、二回は来るの？

美子 それだけ来ない。

私 へえ、そんなに少ないの！

母 先生たちも、もうあきらめてらっしゃるんでしょうね。以前はほら、うちの子と一緒にしたから、私がせつせとつついていましたから、先生たちも朝迎えにいたりとか、してらっしゃいましたけどね。

私 なるほど。

母 顔色も悪いしですね。

私 肺だとか、肝臓とか、血液が悪くなっているんでしょうね。早いほどいいから、まずあなたが説得してみてください。

美子 (笑いながら) やっぱり、強制すると？

私 お母さんがうちに来てくれれば、僕が福岡まで往診して連れてきてもいいし、逃げそうなら足の早いのを二～三人連れて行って捕まえてきてもいいよ。

美子 先生はいつも、そうやって言うが、好かん。(まるで、動物を捕まえてくるような言い方のことを言っているのでしょうか。しかし、反感は込められず、笑いながらの抗議です。)

母 あのさあ、自分で経験して、いやだった？ 悪かったと思っているの？ 後悔しているの？

美子 なにを？

母 お母さんが先生に頼んで、ここに入院させたりしたことよ。

美子 入院したほうがよかったと思う。

私 じゃあ。中山か、山中か、「山ちゃん」のためにもそのほうがいいわけだ。

美子 うーん。

ほかにもいろいろのことがありましたが、省略します。結局、美子は中山を説得して病院まで連れてきます。中山の母親も祖母も来てくれて、中山の治療も進展していきます。中山の家族にしても、

今まで「どうしたらよいか」がわからなかっただけで、けっして子どもへの愛情が欠けていたわけではない、ということが確認されるだけで、ぐんぐんと「山ちゃん」もよくなっていくのです。

くわしいことは省きますが「親友がよくなっていったということ」は、また美子にとって非常に大きな力となっていきます。一月で診療を打ち切ったのですが、翌年の三月のある日、美子は中山と二人で私の診察室をたずねて来てくれました。美子のほうは念願の第一志望の高校（姉と同じ高校）に通って、「山ちゃん」のほうは、県外に出て夜間高校に来年から行くことになった、と言うのです。二人は福岡空港から飛行機に乗ってやってきたのですが、二人だけの旅がひとしおうれしそうでした。中山は「生まれてはじめて飛行機に乗ったんだ」とはしゃいでいましたが、私は心からの喜びの顔に祝福の言葉を送ったのでした。「また、来いよな。いい恋人を連れて！でなかったらまた捕まえにいくぞ！」と。

## 第五章 学校も変わらなければ

今まで家庭のを中心に述べてきました。子どもたちは家庭の中で人格の基本をつくっていくのですが、その人格がはじめて展開されていく主な場所が学校です。ここでその人格は強化され修正されていくのです。担任教師がどんな人格の人であったか、学級の中にどんな友だちがいて、学級運営はどんなかたちで進められていったか、それらのことは「一人の子どもが成長していく過程で非常に大きな光と影を生むことになる」でしょう。

ところが現在、私の知るかぎり「学校は大きく歪んでいる」といえそうです。これからあげる対話記録の中から、校長に厳重に管理された教師たちが「子どもの柔軟性をもった心の中をのぞき込む余裕を失ってしまっているさま」を読んでほしいと思います。前章の美子の担任や、2章の昭子や夏美の担任のような教師はごくごく少数派のようなのです。教師たち自身がきびしい管理の枠から離れて、のびのびとした一個の人間となり、自分たちの思春期の心にたちかえって生徒の心の中にはいっていけるようになったとき、はじめて学校は健全な方向に動きはじめるでしょう。

学校のことにはいるまえに、子どもたちの精神的な成長にかかわ

る社会的な機関のあらましについて述べておきましょう。

### ● ——少年法・児童福祉法・教育基本法の定める機関

法律は社会生活を安全で便利で楽しいものにしようとしてつくられていると考えてよいでしょう。そのために、法律の中身は「援助していくための条項」と「禁止していくための条項」との二つから構成されることとなります。この節の見出しに並べた三つの法律の順番は、「禁止条項の割合の高い順番」です。人の価値観はさまざまなのですから、法律はなるべく禁止条項を少なくするほうがよいと私は考えます。禁止条項として許されるものは、社会生活の基本的な安全をそこなう「傷害、恐喝、殺人、窃盗」等々に限られるべきでしょう。「命令、規則、罰則などでもたらされた安全よりも、教育によって高められた人格による安全のほうが楽しい」ということは歴然としています。たとえば、「文部省から命令されて歌わされる国歌」などになんの喜びがありません。国家の側にしたって、命令して歌わせるよりか、「喜んで歌いたくなる国歌が欲しくなるような社会を実現する」ことのほうが楽しいにきまっています。

これらの法律にもとづく機関を簡単に列挙してみます。

#### a 少年法にもとづく機関

これは、一五歳以上の子どもを対象にしています。次節でふたたびとりあげますが、この機関の実態は「社会治安を乱す犯罪傾向の行為」を取り締まることを主な目的にしているといつてよいでしょう。警察・学校・一般家庭などから情報がよせられて、最終的な決定機関は家庭裁判所となります。軽い犯罪の場合には、家庭裁判所の調査官の「呼びだし」だけで終わったり、あるいは保護観察所への定期的な「指導面接」「家庭裁判所が決めた特定の保護士との面接」だけですんだりします。しかし、回数を重ねたり、重い犯罪傾向の誤ちを犯した場合には、少年鑑別所へ収容され（ここは構造的には刑務所とまったく変わらない）、ここでの判定の結果で少年院、少年刑務所などへの送置が決定されるのです。

#### b 児童福祉法にもとづく機関

これは一五歳以下の子どもを対象としてきます。この主な作業をする機関が児童相談所です。ここでは少年法とはちがって、「援助し



ていくための条項」の比率が高くなります。しかし、万引きや傷害などの犯罪傾向の行為は少年法と類似の取り扱いを受けることになります。ここにも警察・学校・一般家庭から情報がよせられて、家庭裁判所が最終的な裁定機関となるのです。児童相談所で四週間のあいだだけ収容する「一時保護」がいわば鑑別所の役割を果たしていますし、そこから送置される教護院、養護施設などがいわば少年院、少年刑務所にあたるわけです。児童相談所では登校拒否や非行の子供たちのカウンセリングも行なっているのですが、学校や家庭からは「児童相談所に入れるよ」などという「おどし」の言い方で扱われる場合が多いのです。

### c 教育基本法

小学校、中学校、高等学校、図書館、文化ホールなどの運営は、この法律にもとづいています。そしてこれらは形式的には、各地域の教育委員会の独自性で運営されていることになっています。たとえば、国立大学の附属小・中学校以外のほとんどの公立の小・中学校は市町村立となっていますし、特殊な市町村以外では高校は県立のものがほとんどです。しかし、それは実に形式だけです。「小学校から高校までの学校は、今や実質的には文部省に完全に支配されている」といってよいでしょう。このことは、教育委員会の公選制が廃止されて、市町村長、県知事の任命制になっていく一九六〇年代からの流れの中で進められてきたことです。

少し遠回りになりますが、教育委員会の公選制のことを述べてみましょう。一九四五年に終戦を迎えた太平洋戦争は、軍部と財閥の独走によってもたらされた悲惨な戦争でした。それは国民にとって悲劇であったというだけでなく、朝鮮・中国・東南アジアを中心とした人びとに対して言葉に尽くせないような犯罪を犯したのです。教育委員会の公選制は、この廃墟から立ち上がるための努力の中で編み出された大きな改革の一つでした。私は、「戦争の放棄」と「主権在民」とを高らかにうたった憲法のもとで進められた改革の中で、軍部と財閥の解体に次いで大きな仕事は、農地改革とこの教育制度の改革であったと思います。大地主から、奴隷のように扱われていた小作人を人間らしい生活がおくれるように「大地主から土地を取り上げ、農民に与える」という大革命が敢行されたのです。そして、農地を農民が守り抜くために農地委員会がつくられたのです。学校も「国家の意志で国民の意志が踏みにじられることがない

ように」という意図から、文部省の直轄ではなくて、各地域の住民が実権をもって運営する、と改められたのです。そのために各地域に教育委員会が設置されました。いわば、「農地委員会」と同様に教育委員会も、憲法の保障する「主権在民」という思想にもとづいて生まれたといえるでしょう。当初この二つの委員会の委員は、地域在民による直接選挙によって選出されていました。ところが、農地委員会は今でも公選制のままですが、教育委員会だけが、先に述べたように、任命制に変更されていったのです。

これは「戦争放棄をうたった新憲法に挑戦して、軍備を備えはじめた一九五〇年代からの政治的な流れ」の中でひきおこされたことであり、「軍備を持つこと」と同じく、「教育の国家統制を進めていこう」という文部省の姿勢」は明らかな「主権在民をうたった新憲法への違反である」と私は思います。教育の現状を変えていくためには、どうやら教育委員会の公選制をふたたび勝ちとり、教育を住民のためのものにしていかなくてはならないのだらうと思います。

数年まえに、東京都中野区の教育委員会で準公選制が勝ちとられたのでした。しかし、その後この運動が日本中に広がっていかなくなったのはなぜだったのでしょうか。今こそこの運動を強力に広めていくことが必要なときのようなようです。

## ● ——早くなくしたい少年法体系下のシステム

ところで私は、少年法にもとづく家庭裁判所—少年鑑別所—少年院（あるいは保護観察所）というシステムは、少年たちにとって効果的に働いているとは思いません。というよりか、こんなものが存在することがさらにまた少年たちを悪くしていくのだ、と考えています。ただ、これから述べるように、学校が現在のような状況であるうちは、この「少年法体系の下の機関」はなくなるわけにはいかないでしょう。しかし、なるべく早いうちに抜本的に改革されなければならない「恥ずべき国家組織である」と私は思うのです。そう考える一番大きな理由は、この体系は「少年の保護指導を目的としては考えられていなくて」、国家体制の安全のために少年たちを「監禁するための合法的道具としてしか考えられていない」ということです。言葉を変えていえば、「少年の人権侵害を公然と行なうためのまやかしのシステムである」ということです。つまり、少年法体系は、表向きは「未成年者の保護及び指導」をうたっているのですが、

そのじつは「刑罰体系」にはほかならないのです。そのことは、「こんなことをくりかえしているとお前は鑑別所送りだぞ！」と言って「少年鑑別所」が話題の中に出されるように、実際的な運用のされ方の面で歴然としています。私は、「こんなものがいかに偽善者よろしく存在すること」が、むしろ非行を助長させている現在の社会機構の象徴的な存在であると考えます。

それはつまり、社会体制の管理の道具になっているだけのことで、「いうことを聞かない子どもをぶんなぐる親」「規則違反者に対してその理由を聞くこともなくぶんなぐり、排除する学校教師」などと同じ姿勢であって、ここには「子どもたちに対する理解の姿勢」は皆無であるといつてよいでしょう。これらのシステムの中で働く人びとの中には個人的には少年たちのよき理解者がおられるかもしれませんが、しかし、その人たちがこのシステムの中で「できるだけのことを行ってみよう」と努力されてみたとしても、少年たちのためにプラスになることは、ほとんどなにもないでしょう。

子どもたちといえども、社会秩序を乱すことが許されてよいはずはありません。しかし、そのことへの指導は刑罰であってはならないのです。ところが、この社会秩序を乱す子どもたちに対して指導教育する適切なシステムは、今のところ完全に欠如しているといつてよいでしょう。本来であれば、それこそが学校なのですが、学校はその仕事を放棄してしまっているというのが実状であるからです。そこで、まだ数十年は、この家庭裁判所を中心とする少年法体系は活動せざるをえないことでしょう。しかし、可能なかぎり早く、それは「刑罰ではなくて、真に治療教育のための機関である学校」にとって変わられるべきです。それ以後の家庭裁判所はその治療教育機関の監督指導をすればいいのであって、塙の中に閉じ込め、準犯罪者としての記録をとどめるための中枢であってはならないのです。

国家権力は、今やマスコミという絶大な力をもった情報手段を手玉にとって、国民の上に威圧的に臨んでいます。登校拒否や非行の子どもたちを診てきて、この子どもたちをつくってきた土壌は、まるで「国家権力の紐に縛られた家畜」のような生き方をさせられてきた国民の「何世代にもわたる社会の歴史の積み重ね」の中に醸成されたものである、と私は自身をもって言うことができます。「戦争を遂行する」といった事態でもっとも明瞭となりますが、国家権力はいつでも、権力をふりかざして、「最終的にはてめえらは、わが輩の言うままに従うのだぞ」と有無を言わせない姿勢で臨んでいるの

です。それに対して多くの家族が、ただ生き延びんがために「人間的な感情を押し殺してしまって」戦々恐々とした人生を送ることになる、といえます。

### ● ——芥川龍之介の「河童」への共感

中学二年のときだったか、三年のときだったか、はっきりしませんが、このころに読んだ芥川龍之介の「河童」という短編小説に大いに同感したときのことを、私は今でもよく憶えています。これは、「河童」の世界では産まれるときに必ず父親が母親のおなかに耳をくっつけて、「おまえはこの世に産まれてきたいか？ 産まれてきたくないか？」と質問する、そして「産まれてきたいという子供の意思」を確認するのだというのです。もし「いや、僕は産まれたくない」と子どもが答えたとしたら、産婆さんがガラスの管を母親のおなかにブスッと突っ込む。すると、今まで大きかったおなかがしぼんでしまった、というのです。少しこわい話なのですが、中学三年生前後の私はこの話をおおいに気にいっていたのでした。

たぶんそれは、このころの私が「疲れていた、というか人間世界の窮屈さを身に染みて感じはじめていた」からなのだろうと思います。これはちょうど第一章の川上晃の「僕はまるで絵の中を行き来しているような、そんな感覚でした」と述べていた現実感覚の希薄になる体験と似ているのですが、川上晃の体験と私の体験とのあいだには共通する部分が多いのでしょう。

私の父親は、中学の英語の教師をしていました。中学時代の私はよく父親から小言を言われていたのです。私の父親は優しさのない人間ではけっしてなかったと思うのですが、父親の私への小言は、「今日も、おまえの学校から電話がかかってきたよ。また先生を怒らせたらしいじゃないか。どうして俺に何度も恥をかかせるんだ。俺はもう学校に勤められなくなるじゃないか」と、そんなぐあいのものでした。同僚の中学教師からの電話はずいぶんこたえたのでしょうが、私は、「それならやめればいいじゃない！僕は自分のしていることがまちがっているとは思っていないんだから。お父さんが恥をかかないようにと、自分の生き方をがまんしようなんて絶対しないよ！」と答えていたものです。中学から高校にかけての私は、先生からなぐられたり、廊下に立たされたりしたことは数限りなくあります。で、どれがどのときのことだったかはっきり思い出せま

せんが、全校生徒の前で教頭からはでになぐられたのは、中学三年の冬でした。それは、寒い朝の全校朝礼のときで、教頭が指揮する「天突き体操」を私だけしなかったというのが、なぐられた理由です。

この全校朝礼ではいつも校長が訓話を述べるのですが、この日は校長がいなくて教頭が校長代行をしたのでしょう。教頭はたぶん、訓話を終えてから体操をさせようとしたのでしょう。この「天突き体操」というものは「はじめ下半身を中腰におとして、両手で天を突くような格好で勢いよく伸ばしながら背伸びする」というものです。中学三年生の私は、そんな「幼稚っぽい不様な格好をすることなど恥ずかしくてできない」と思ったのです。

このとき私は級長をしていました。級長は全校朝礼のときにはそのクラスの整列している列の先頭に立たされるのです。つまりそのクラスの模範になって行動しなければならない立場にいるわけです。その立場の私が一人だけ教頭の指揮する「天突き体操」をしないわけです。教頭は烈火のごとく怒って「おい、おまえ体操しろ！」とどなります。私はそれでもできませんでした。というより、命令されたからなおのことできなかったのです。すると教頭は教壇から飛び下りてきて、大声でどなりながら私をぶんなぐったのでした。そして「あとでおまえは職員室に來い！」と言ってふたたび大声でわめきました。職員室に行くと教頭はいきなりみんなの先生がいる前で、「謝れ！」とどなります。私は「謝らなければいけないことはなにもしていません」と答えました。すると、私の言葉が終わるか終わらぬかのうちに、教頭の平手が右から左から飛んできました。中学三年生ともあろうものが情けないことに、つい、私は涙を流してしまったのですが、それでも最後まで謝りませんでした。すると、教頭は虫けらでも追い出すように「出ていってもいい」と言い放ったのです。私が職員室を出て数メートル歩いていると若い先生が追っかけるようにしてやってきて、「水野、おまえもバカじゃね。あんなときにはすみません、と言って、あとは舌を出しておけばいいとよ」と言ってくれました。しかし、このときのおとなの世界への不快感をさらに深めることになってしまいました。つまり、慰めてもらったことは少しうれしかったけれど、「そんなずるいことなど俺はしない」「そんな薄汚い人間などにならなくてもいい」と、こんな先生がかけつけてくれたことを、むしろ不愉快に思ったのでした。そんなことがあったりして、私のこのころの心の中には「ど

うして俺はこの世に生まれさせられたのだろう」などと考えはじめていて、「河童の国の話」は私の心をとらえていたのだと思います。

### ●——先生たちとの対話記録

ここに、学校の先生たちと私たちが対談した記録があります。学校は宮崎県内の中学校なのですが、そのだいたいの姿は日本全国の平均的な学校とさほど大きな隔りはない、と考えてよいでしょう。

時は、数年まえの四月で、新学期がはじまって二～三週間すぎたころです。学校側は校長、教頭、学年主任、生徒指導主任、私がかかわっていた子どもたちの担任教師二人の六人。こちら側は私と心理療法士の曾原と矢島の三人でした。

この対談はちょっと対立的な響きで終始しています。だいたい、話のはじまりから敵対的なかたちではじまったのでした。まず「この対談を録音にとって記録したい」と申し出たところ、先生がたの強烈な抵抗に会いました。その抵抗があまりにも強烈でしたので、こちら側も引っ込めなくなってしまいました。しかし、このことが学校の体質の一端をすでに語ってくれているのです。

それはつまり、日本中の学校でよく見られることですが、「学校の中でおこっていることをなるべく外に漏れないようにしたい」という体質です。人は人中で発達し成長していくのですが、学校がこの「学校閉鎖主義」の暗闇の中に潜り込もうとするのはなぜなのかということを考えておく必要があるでしょう。それはどうも残念ながら、「子どもたちのため」という考え方の次元」から出ているものではなくて、「教師たち自身の自己防衛の次元」から出てきているものである、ということに尽きるのだらうと思われます。つまり、この「録音されることに絶対反対だ」とはげしく抵抗しているのは「子どもたちのプライバシーを守るため」という次元から出ているもの」ではなくて、「自分たちの行為に自信がないから、自分たちの学校内でしていることが外部に漏れて、そのことで自分たちが批判されることになってはたいへんだ」という自己防衛の次元から出ているのです。つまり、先生たちの反対が強固であれば強固であるほど、先生たちは「今まで自分たちがやってきた学校内での行為の中には批判されるおそれが充分にある」と自覚しているということを物語っているのです。

そして、もっと重大なのは、「誤りを訂正していく努力をしよう」

ということよりか「誤りは隠して、今のままのやり方ですり抜けよう」としているということです。自分たちがしていることに自信があれば、「どうぞ、そのときには受けて立ちましょう」と構えることができるはずです。もし自信がない場合でも、「まちがっているところがあるかもしれません。そのときにはそこを指摘してください。そしてどうしたらよいか一緒に考えさせてください」と謙虚な気持ちで臨むのが誠実な先生のとるべき態度でしょう。結果的に私たちは録音することができるのですが、どうしてそれが実現できたかを簡略に述べると、またもう一つの体質が見えてきます。

- (1) まず私が「今日の話し合いは録音しておきたい」と発言しますと、「なんのためにそうするのか」と言われます。
- (2) 私は「一回聞いただけでは誤解があるかもしれないから、あとで聞き直したいためだ」と答えます。すると「それならノートのメモで充分ではないですか」と言われます。
- (3) 私は「メモでは書き漏らすし、それに言葉にできないような微妙なものは記しにくいんですよ」と言って、家族療法のときのやり方を説明しておきました。

私たちはテープにとったり、ビデオにとったりして面接状況を記録に残しておくのですが、それをあとで再生してみて、いろいろのことに気づくのです。確認し、誤解していたものを修正し、さらに新しいものに気づくことができるのです。三回聞いたら三回の新しいことを発見するといってもよいでしょう。たとえば、私が父親と真剣に話していたとします。私の頭の中では父親の言葉を通して一つの情報が収集されます。ところが、そうしながらも私の片方の耳には話の中へ割り込んでくる息子の言葉とか、小さな声でつぶやく母親の声とかがはいつて来るのです。しかし私は父親の声に注意の中心を向けているのですから、どうしてもあとからビデオとかテープとかを再生してみて、息子や母親の気持ちを確認したくなるのです。

もうひとつ、録音しておくことで得られる大きな収穫は「家族の人が使った言葉、あるいは言い回しを確認できる」ということです。このことは家族療法を進めていくうえで非常に大切なことなのです。まさに言葉の意味づけは一人ひとり微妙にちがいます。しかも、話し合う内容は普段は言えないような微妙なことが多いので、私たちが解釈して私たちの言葉で言い直すと、そのことで話がとどこおってしまう、といったトラブルはよくおこることなのです。そこで、

その人が使ったままの言葉で、そして、表現したままの表現法で面接を進めていくという方法が「治療の進行をスムーズにする」ために有効となるのです。

(4) ところが、またしても「必要なところだけメモするというようなことではだめなのですか？」とこられますので、少し頭にきて、「なぜ録音が悪いのかを教えてください」と、少し気色ばむことになりました。

(5) すると、今まで黙って聞いておられた校長がやおら発言されて、「鶴の一声」で録音了解となったのでした。

私たちにとっては、校長が了解すれば、それに対して今まであれほど大きな声で抵抗されていた先生がたの声が完全に途絶えてしまった、という突然の現象がじつに大きな驚きでした。「学校の先生たちが鶴の一声でだまりこむ」という事実が、また一つ、学校の今の体質を教えてくれているのです。推測するに、どうやらこの先生たちは「校長はテープに録音することを望んでいないはずだ、と思って抵抗していただけ」だったようなのです。つまり「校長に録音をしないようにさせる悪役の役割をさせるのは忍びない、自分が犠牲になろう」と、いわば織田信長の草履を暖めている木下藤吉郎のような心境で努力しておられたのだらうと思うのです。その涙ぐましい努力があって、すったもんだ「録音させろ」「させない」でもめているところへ出てきて「どうぞ、録音されてもいいではないですか。話がはじまるまえからもめなくても」と太っ腹の役割を演じることが校長にはできた、というわけです。

### ●——「学校に出てくるな」という教師

これから引用する対談は、このいわくつきのテープから採録したものです。ききにくいところや、意味のとれないところなどには少し想像がはいりますし、少しわかりやすいように私の説明も追加しますが、可能なかぎり生の言葉で読んでいただきたいと思います。しかし、そのまえに、この対話が対立的になってしまったことのもう一つの理由を説明しておきましょう。

私がこの学校の生徒たちとかかわりをもちはじめたのは、三年生の川島涼子がはじまりです。涼子はまだシンナーなどはしていないのですが、学校を六ヶ月以上にもわたって休んでいて、非行という烙印を押されているグループと交際があります。母子家庭で母親は



働きに出るので、昼間は一人きりでアパートに残ることになります。その部屋にシンナーをする男の子たちが出入りをはじめたというので急拠、入院ということになったのでした。この子の担任が岡本という若い先生でした。川島涼子が「明日から学校に行きたい」と申し出たので、私は「学校が了解すればいいよ」と答えていたのです。川島は自分で学校に電話をしたのですが、岡本教師からは「今週は高校受験の準備があつたりして忙しいから出てこないでくれ」と言われたというのです。そこで、私は真偽のほどを確認するために電話したのでした。すると、岡本教師はなんと、「そうです。今は生徒も先生も高校受験につきっきりで、あの子たちのめんどろをみる余裕がないんです」と言われます。「あの子たち」という表現は「非行の子たち」という意味なのです。私は「それはどういう意味ですか？」と聞いていくことになるのです。思い出すままに書くと、次のような会話がつづいていくのです。

「どういう意味と言われますと？」

「いえ、一人の生徒が『学校に出て行きたい』と言うのに、『出てくるな』というのは今まで聞いたことがないですからね。しかも、その理由が『みる余裕がない』とはどういうことなのですか？もっと具体的に教えてください。」

「私たちは、あの子たちは一般の教室に入れないことにしています。特別室、相談室に入れるんです。」

「そうだそうですね。そして、授業が済んで他の生徒が帰途につくまえに『学校から消え失せろ』と言って追い返すのだそうですね。ほかの生徒と会わせないために。それでもいいから学校に行きたいと川島君は言っているんですよ。」

「それが、しばらくはその相談室の番をする先生もいないんです。」

「おいおい、相談室の番人！しかも、期限なしのしばらく！今のところ、番人がいないから出てくるな！それはどういうことかね」と私は声を荒げてしまいました。すると、「それが学校の方針なんです。私にはわかりません」と投げ捨てるように言って、受話器をだれかに手渡されたようです。そして、電話からはいきなり男性の声がします。

「教頭ですが、なんででしょうか？」という声です。私は唾然としてしまいました。電話のやりとりは聞いていたはずですから、状況はわかっているはずで、そこで、

「僕は今、岡本先生と話しているところです。『教頭先生と代わりませう』とかひとこともなしに先生が出てくるとはなにごとです。いったい、今の先生はなんの先生ですか？」

「国語の先生です。まだ若いものですから、失礼しました」とそういうようなやりとりがあったのです。

それはつい一〇日ばかりまえのことなのです。ところが、この対談を岡本教師は急用を理由に欠席しておられます。しかも、本来であれば、ほんとうに急用であったのだとしても、教頭なりから、私が指摘するまえに「岡本教師が欠席することの説明」があつてしかるべきだったのです。それが私が「今日は川島涼子の担任はおられないのですか」と質問するまで、言及はなかったのです。

### ●——四角四面な校則の遵守

対談の内容に移りましょう。次のように、私のほうから発現をはじめたのでした。

**私** 僕らがお願いしたいと思っていることは、ここの学校の規則がね、子どもたちにとって四角四面すぎるのではないかということなんです。どこだって規則がありますし、校則があるわけですけど、その運用にある程度の「柔軟性をもってほしい」ということですね。それが僕たちの一つのお願いなんですよ。規則があまり厳密すぎると、むしろそれは害になってしまう。あまり厳格すぎると生徒たちはその規則があるっていうことで歪んでいくと思うんですよ。たとえば、日本の法律だってかならず柔軟性があるわけですよ。道路交通法だって六〇km制限でも四〇km制限でも一〇kmぐらいのオーバーは認めてくれますよね。そうでないと現実の道路は走れないわけです。その程度の幅は学校でも認めてもらえないと困るなって思ってますよ。

**教師の一人** 私たちもそれほど四角四面にやっているつもりはないですよ。

**私** そうですね。当然そう思っておられると思うんですが、抽象的な言い方では話が進みませんので、具体的な話でいきましょうか。高橋君に関することからはじめようと思うんですが、彼は今、すごくよい方向に向かいつつあると僕たちは判断しているんですよ。そうですね……、彼の経過から話してみましようか。

まず、川島涼子が野島診療所入院していたんですね。川島が入

院してきて二、三週間目かな。あの横谷と高橋と二人でやってきたんですよ。というのが、川島が話している電話を僕が横からふざけてとり上げて、出たんですね。そしたら、ちょうど横谷たちと話しているところだったんです。そうだ、この時点で横谷は僕とはすでに顔見知りであったわけです。入院はまだしていませんでしたが、若草（病院）の外来に通院して、心理療法士の矢島君のカウンセリングを受けてたんですね。で、横谷がそのときの電話で「野島診療所に遊びにいいんですか？」って聞くもんですから、「うん、いいよ。高橋君と一緒に出かけようよ」と僕が答えたんです。一般の治療場ではこんな場合には「面会謝絶」にするでしょうから、この子たちにとっては「出かけようよ」と言われたことが少し驚きであったようです。「俺たちがシンナーをしている、非行と呼ばれている子どもたちであるということはわかっているはずだ」と考えているわけですからね。僕たちは子どもたちの行動を知るために、こういう場合逆にわざわざ友達を呼ぶんです。この場合、自分たちでやって来るというわけですから、手間が省けるというものなのですね。そしたら、やって来たんですね。

それが、ちょうど、日曜日、たまたま僕が鹿児島まで往診に行ってきたんですね。鹿児島から若草病院に帰って、ほっとしていたら、野島診療所の看護婦さんから電話があって「高橋と横谷という生徒が来ていて、なかなか帰りません。夜の九時をすぎただけけどまだ帰りません。もう帰りの汽車もないんですよ」と言うんですね。そこで、僕はだいぶ疲れていて、きつかったんだけど、野島までまた走ってみたんですね。そしたら、シンナーやってんですよ。この二人でシンナー持ち込んでやってんですね。それで横谷を叱ったら、横谷は、「私はシンナーしてない」と言うわけですね。そのことだけは事実だったようですが、「しかし、シンナー持って来てることは知ってたろう？」って言ったら、しばらくして、「知ってる」と言うんですね。あの子はなかなか要領のいい子なんですね。けっして不利になることはしなくて「白状したほうが信頼を得られて得だ」と判断すると、くるっと背を変える、ってところがありますね。まあ、非行の子どもによくあるパターンですがね。

そこで、「まさか他の子たちにシンナーやっとならなう？」って言ったら、「そんなこと絶対しとらん」と言うわけですよ。それで僕は横谷と高橋、二人を連れて帰ったんです。汽車がなかったもんですから、私の車に乗せてね。帰るにあたって横谷のほうは、「家に

は絶対帰らん」と言うわけですね。「高橋ノリ君の家なら行く」って言うわけですよ。「じゃあ、ノリ君の家に泊めてもらうのか？」って言ったら、「うん」って言うもんだから、僕も「半分そうしてもいいか」という気で、先にノリ君の家に行っただけですね。彼の家に上がると、そこには高橋のお母さんもおるし、お姉さんもおるしということで、本人すごく、そう……あの子のもって生まれた天性というのか、「人の前ではいい子ぶる」ことができるわけですよ。学校に来れば、「家がおもしろくないから学校にこないの」って言ったりしますよね。今度は家に帰ると、「先生たちがおもしろくないから学校には行かないんだ」って言うわけですよ。それと同じように、このノリ君のうちにいったらブリッ子になるんですね。借りてきた猫のようにおしとやかにふるまうわけです。だから、僕が、「さ、家に帰るぞ」って言ったら、全然抵抗なく素直についてきて家に帰るんですね。先ほどまで「家には絶対帰らない」と言っていた言葉のかけらもないんですね。そういうふうにして僕は、その夜に高橋ノリ君という家の家庭環境を知って、それで横谷君の行動様式を確認できたんです。

そのとき、高橋の家での約束で、「もしまたシンナー吸うようであれば、うちに入院させにゃあいかんぞ。シンナーせんでおれるようだったら、ここでがんばってごらん」と言っておいたわけですね。お母さんも、「シンナー吸うようであればぜひお願いします」っていうことだったんですよ。それから二週間がんばったのかな、シンナー吸わずにね。二週間ぐらいたって一〇日ばかりまえに、「シンナーをした」と言って来院しました。そこで、「約束だから入院するか？」って僕が言ったら、「します」ということで、そのまま入院と、そういうことになったわけです。

で、まあ、ちょっと話がズレますけど、じつはそのときシンナーを野島の診療所に「持ち込んでない」と言ったのが、実際には持ち込んでたんですよ。しかし隠してたわけですよ。それを知ってたのが、どうも川島なんですよ。これは推測なんですけどね。川島は全然シンナーはしてないんですけどね、シンナーを野島診療所に持ち込むことによって「ここで起こる変化を楽しみたかった」のかもしれない。ほかにシンナー中毒者が二人おったもんですからね、ほかのシンナー中毒の子どもたちに「吸いたければ、あるよ」って教えたらいいですよ。「シンナーがどこそこに隠してあるよ」と。その中の一人の女の子が、これは大阪から来てる女の子なんですけ

どね、その子が、シンナーのありかをつかんで、この子がまた今度は福岡から来てるシンナー中毒の男の子に渡して吸う、ということになっちゃってですね。あのときは三人だったのかな？

矢島 そうですね。

先生たち そりゃー悪いことをしました。(という声と表情)

私 いや、それは全然先生たちが悪いわけではありません。三人の子どもたちがシンナー吸ったのかな？全員、横谷と高橋が持ち込んだシンナーを吸っているんですよ。まー、そんなふうなことがあって、ずいぶんこっぴどく二人をしかってですね。「自分たちだけじゃなくてほかの子どもたちまで巻き込もう」というところがね、どうもこの子どもたちの特徴なんですね。一人ひとり話すといいわけだけど、いつもグループになるとシンナーをはじめてしまうというところがあるんですね。そこで、野島で一緒のままではやっていけないと、ですからあの子たちが入院するときには、野島じゃなくて若草にしたいということになったんです。おたくの学校の子どもたちの僕たちとのかかわりは、そんなふうな流れなんですよ。

先生たち そういうことですか。それでわかりました。

私 で、あの二人は家族のこともあって、A中学に転校するのではなくて、病院からこの学校に通いたいっていうのも一つあるんですよ。それも、野島診療所ではなくて、若草病院にいる理由の一つです。それで今、僕たちがあの子たちに言ってることは、「学校に行く行かないは僕たちはべつに強制もなにもしない」と。「行きたければ行けばいい、しかし、シンナーだけはしてはいけない」と指導しています。

それに夜の八時までは外出を許可してるんです。これは甘いと思われるかもしれませんがどね、夜の八時以降は外出は禁止する、八時までには少なくとも病院に帰らなければいけないということにしています。つまり、「八時までに病院に帰ることとシンナーをしないことさえ守れば、君たちは自由にしてもいい」ということにしてるんですね。少し甘いと思われるかもしれませんが、それくらい受け入れてやらないと、この子どもたちとのコンタクトは維持できないわけですよ。

先生たち (不満そうであるが、沈黙したまま声にならない。)

私 高橋君の場合、「学校に行くとすれば、そんな髪、格好じゃないけんじゃないか」ということで、いちおう、染めたんですよ。しかし、染めて学校に来てみたけど、学校では「髪が長いから教室には

入れられん」ということで「入れてもらえなかった」と言って帰ってくるわけですね。ですから、つられて横谷のほうは今日は早く帰ってきたみたいですね。高橋のほうには、「今日が学校には行くな」と言ったんですね。「今日、学校に僕たちが行って話し合いをするから、その結果で君が行くんだったら行くということにしてくれ。それまでがまんして今日は行かないように」って。そしたら横谷も「私も行かない」ってことになるわけですね。ですから、行かなくても、今のところ、病院があるから病院の中で陶芸をしたりして過ごすわけですね。病院がない場合には、清宮君だとか、いろいろな子たちのうちに集まって、結局、グループがだんだん肥大して行って、そこでシンナー吸うっていうようになることが多くなるんですね。だからそのことだけでも、彼らの生活は「いくらかは改善されている」と判断してるんです。

で、まとめてみると、「彼女たち、彼たちが学校から追い出されてしまう」わけです。そして結局、「行く場所がないから同じような連中の所でたむろして、さらにもっと悪いことをしていく結果になっていく」ということになっているわけですね。ですから、やはりなにか学校のほうが工夫してもらってですよ、「おまえらは規律違反だから教室には入れん」だけじゃなくて、なにかもっと工夫ができないのかなあ、と一言をね、今日聞きたいんですね。それが、僕たちが今日来させていただいた一番大きな目的なんですよ。「教室に入れん」というかたちでは子どもたちは来なくなりますし、来なくなれば結局、どこかにたむろして、なにか事件をおこしていくことになるんですね。先生がたもいろいろ新聞をにぎわす事件をごぞんじでしょうから、いずれかならずそんな事件につながっていくだろうという心配は心の片隅でしておられると思うんですね。「他の子たちに悪いから絶対原則を崩さないんだ」って言う一点張りの姿勢でこられたら、非行の子どもたちっていうのは犠牲者になるわけですね。それは、「学校の責任じゃない、家族の責任じゃ」って言われたってね、少なくともその子どもが学校に来ようとしている以上ですね、「来ようとしている力を利用してなにか導いていこうとすることが教育だろう」と思うんですね。それで、そのあたりを、できれば校長先生は最後でいいですからね、担任の先生がどのような意見をもってらっしゃるかということからお聞きしたいと思ってんですけど、どうなんでしょうか？

**担任** いいですか、横谷を担任してるんですけども。

私 どうそ。

●——校則を緩めると他の子どもも緩む？

**担任** 始業式の日ですけども、靴下が白と黒のストライプだったんですよね、去年からそういったスカートとか、とくに靴下なんですけども、靴下が悪いときにはもう教室に入れずに相談室というところがあるんですけども、そこに入れたんですよ。で、「靴下を脱いでいけば教室に上げてやる」といったんですよ。それは去年からずーっとつづけてますから本人もよく知ってるんですけども。で、始業式のときは教室に行きたいということだったので、素直に靴下は脱いでくれました。時間はちょっとかかったんですけども、二時間ぐらい話をして、いろんな話をして聞いてくれて、脱いで上がったんです。

先週の水曜日、テストが次の日からあったものですから、「テストは受けない」って本人が言ったから、ワイシャツを着てくることと、それから靴下は白いのをはいてくる、そういった二つの条件で許可したんです。ところが、結局、靴下は白をはいてきたんですけども、ちがった種類の白をはいて。で、やっぱり時間も守らんで遅れて来ました。で、結局この日も、他の教室でテスト受けさせて帰したんですよね。だから、学校に来る時間は自分のいい時間に来て、それから担任のほうに報告せずに自分かってに帰るとというのが、一昨日、それから今日とつづいてますけども。だから高橋が行かないと言えば横谷も行かないと思うし、たぶん途中まで一緒に来てて、横谷だけ学校に来るというかたちだと思うんですけど。

**私** なにかですね、高橋が送ってきて、降ろして帰ってくるみたいですね。そして横谷だけちょっとはいつてくるみたいですね。

**担任** だからうちのクラスでは、そういった特別視でやっていくと、そういうふうになっていく子たちが増えてきてますから、そういうふうにやりたいって子がたくさんいるんですよ。髪の毛を伸ばして、それから横谷みたいにパーマかけて、そういったふうにしてみたいという子が何人もいますよ。そういったのをがまんしてるんですよね。服装関係もやっぱり自分で、学校ですからね。教育を受ける場ですから、そういったのをがまんしてきてると思うんですよ。やっぱりそういった横谷の場合だけ特別視していくと、そういった反発する子が何人も出てくると思うんですよね。だからその

ために校則はある程度あると思いますし、そういったものを守って  
いっておとなの社会へ行くと思うんで、ある程度の校則は必要です。  
うちの学校はだいたい他の学校と同じようなことだと思っ  
てますけど。

**私** 先生がたは、「校則を緩めちゃうとほかの子どもたちも緩んで  
しまう」と思われるんですよね。そういう発想がよく使われると思  
うんですけどね、校則の守らせ方っていうのをですね、もうちょっ  
と工夫してもいいんじゃないかと思うんですよ。「一人認めちゃうと、  
みんな崩れてしまう」「みんながまんしてんだ」とおっしゃるけど、  
みんなじゃないと思うんですよね。それはたぶん、全体の中の一〇%  
か二〇%だと思うんですよ。しかし、それをきびしく管理的に縛っ  
たらですね、教育的かっていうと、かならずしもそうじゃないと思  
うんです。むしろ「規律違反をしていることはおかしいことだよ  
ね」ということですね、ほかの子どもたちに教えていくことの  
ほうが、むしろ教育的じゃないかなって気がするんですけどね。そ  
れを規律違反だと教室には入れないって縛るだけでは効果がないと、  
僕は思うんですけどね。他の先生もそう思われるんですか？ 規律違  
反だからきびしくしたほうが効果が上がると考えられるんですか？

**他の教師** あの一、言われるのはわかるんですよね。子どもたち  
は髪を短くしたくない、坊主にしたくないというのがあってですね。

**私** みんなじゃないでしょうけどね。坊主のほうがいいという子  
もいるでしょうけどね。たまにはね。

**担任** でもね、ほんとうに子どもにそういったことを言ってきた  
ときには、いろんな障害っていうのが出てくるもんでですね。だか  
ら、われわれがガンガン、ガンガンやってきびしくやってるわけじ  
ゃないんですけどね、規則を守るためには髪はこうしなくちゃ  
いけないんだよ、服装はこうしなくちゃいけないんだよという話を  
して、あの二人だけ例外ではないんですよね。やっぱりこの中学校  
で生活していくうえで服装はこうだよ、髪はこうだよと話をしてい  
ます。ところが「オレは髪を切りたくないから切らない」という  
言い方ですね。「オレはしたくないからしないんだ」、もっと大きな  
言い方をすれば、「オレは勉強したくないからしないんだ」というこ  
とで、授業中に教室からかかってに出て行くとか、あるいは授業中  
にかかってに席を立って授業を乱すという、そういうことにまで発展し  
ていく可能性があるわけですね。だから、そういうふうの一つのこ  
とを緩めてやって、そして、「これぐらいはいいんじゃないの」と



やっていったのが、靴下にはじまったときに靴下、髪、制服といったものにだんだん発展していく。ま、あの二人は朝、自転車でですね、二人乗りをしてきた。横谷は降りる、高橋は帰る。それをほかの子たちが見て憧れじゃないんですね、やっぱりしかめっ面して見てるわけですね、「あんなことしてる」って言って。そしてみんながあんなことはいけないことだと自認してくれることはいいことですけど、しかしやっぱり逆に言うと、不快な思いをするわけですね。そういう子たちが、「何であんなことしてるんだろう？」ってなって、規律をつくっていることがあつてなきに等しいものになってしまえば、学校として收拾がつかなくなってきましたよね。わずか一〇%だろう二〇%だろうと言われますけど、結局その一〇%、二〇%の子が同じようなことをしてしまったときには「教育の場」として成り立たなくなるわけですよ。そうであれば、時にはきびしくしながらも、われわれだってそんな四角四面にですね、ぴしっとは言ってません。ある程度は緩やかに緩めてですね、そういう教育観のもとで指導してるので、そのなかでやっていってもらわないと、教育はできません。

私 じゃあ逆の言い方で言うと、高橋ノリ君が髪を染めてきましたよね。あのことは少しほめてくださいましたか？

担任 そうですね。

私 どんなふうなかたちで？

担任 私は今年あの子の担任になったばかりで、染めた状態を知らなかったんですけど、お母さんから染めたと聞きまして、「それは偉いね」と言って……。髪も切りに行ったと、切りに行っただのもここ（額の端を指差して）だけ切ってますね、「よくこれだけ切ったね」って言って、「そういう短い部分だけじゃなくて長い部分も切ってよかったんじゃないかな」って言って、「そういう切り方はできなかったのかな」って話をしてですね。染めたということはぜひ、学校に来たいという気持ちがあったんだろうから、それは非常にいいことだ。真っ赤なままよりね。そういう意思是認めたい、と。やっぱり尊重したい、というのは言ったんですね。「学級にも入れてやりたい」しかし、「髪の毛は『この中学は坊主』っていうのは守ってもらいたい」っていうことで、ちょっとまえだったんですけどね。

●——一ヶ月だけ認めては

私 そのときにですよ、たとえば、僕たちだと、こんなふうなやり方をすると思うんですよ。たとえばその、「髪の毛を切っていないからほんとはまだ違反だ。しかし、髪の毛をいちおう染めてきたんだからね、教室に入ることを認めることにしよう。しかし一ヶ月以内にはかならず切る。切らんようであればね、やっぱり教室には入れんぞ」というふうにしたいと思いますね。そうすると、少し本人もね、「ああこの先生は自分の気持ちを認めてくれたんやな」ということになると思うんですよ。「たぶん教室には入れてくれんだろう」と考えて斜に構えていたところに、あにはからんや入れてもらえた、というところに効果があると思うんです。先生がかりに口でほめてくれたにしてもですよ、彼がやっぱり教室に入れてもらえなかったということになったらですね、「オレは努力したのに先生は全然オレのことを理解してくれん」と思っちゃうんですよ。子どものほうはね。だからそのときに、僕は子どもたちに余裕をもたせるために、言葉じゃなくって具体的にですよ、「一ヶ月間だけ教室に入れることにするわな」と。「しかし一ヶ月たっても髪の毛を切らんときにはやっぱりダメだぞ」というくらいに言っとくとね、もっと子どもの心は楽になると思うんですよ。それぐらいの「具体的な柔軟さがほしい」というのが、僕らの今日来たお願いなんですよ。彼にとってはね、「教室に入れてもらえない」というのは全面否定と同じなんです。そういうときにもっと具体的に行動面で、認めてやるということをするといいたいと思うんですよ。

担任 結局ね、一人の子だけをね、まあ、一人の子を救わないといけないんですけど。一人の子だけを救ったときにね、ほかの子に影響を及ぼさないときならね、そういう余裕がもてると思うんですよ。

私 だから、ずっとというのではなくて、それは一月間だけなのだからいいじゃないですか。一月間だけなんですよ。違反を認めるのは。

担任 ちょっと待ってください。一つのこと、一人のこと、高橋君なら高橋君だけを見てね、育てていくっていうか、その子だけでね、やっていくときならそれは充分できると思うんですよ。ところが、その子を育てながらほかに学級には三〇何名、四〇何名の生徒がいるわけですよ。この中学校では九三〇名以上の生徒がいるわけですよ。その子たちは、やっぱり、つねにそういうのを見ているんですよ。あの子だけ1ヶ月できた。じゃあ俺も今度1ヶ月試して

みよう。そういうのがどんどん増えてきたら……。

私　どんどん増えそうに思うんですか？僕はそれは逆だと思うんだよな。それを気短に切っちゃうからね、逆に今、増えてると思いますよ。悪い子たちが。むしろね「高橋君に一ヶ月間の余裕を与える」ということをほかの子どもたちに見せることでね、かえって先生たちに対する彼らの見方がちがってきて、よい変化がくると思うんですがね。高橋君と横谷君だけギャングギャング締めたからね、悪いのがいなくなったかということ、そうじゃないでしょう。実際には、たとえば清宮君のまわりにもっと増えてしまってるでしょう。いろんな子たちが清宮君の家に集まる。そんな子たちがまえより増えるみたいですよ。

一ヶ月だけやってみようとする、「じゃあ俺もやってみようかな」っていう子が出てくるかもしれんていうのはですよ、これは先生たちに対する子どもたちの不信じゃないですかね？先生たちが子どもたちを信じないから子どもたちも信じないということなのだろうと思いますね。「先生たちをまだ信頼しとらん」から、「じゃ俺もやってみよう」となるわけですね。

だから、たとえば、「高橋を髪の毛の長いまま来るのを認めてるわけじゃないんだ。しかし、あいつのために先生は一ヶ月間がまんしてるみたいだ」っていうことを見せる方がね、もうちょっとほかの生徒たちとしても心が柔らかくなると思いますよ。「うん、先生も石頭じゃねえわい」となってきた、真心で考えることができるようになると思うんです。そんなとき、「いや、だめだ。俺はおまえだけ見てるんじゃない。ほかの子たちに悪い影響を与えるから絶対だめだ」って堅くいかれたんじゃない、逆に子どもたちは堅いほうに行くんだと思いますよ。真心で考えた行動ではなくて、むしろ「心にもなく」「したくもないこと」をしてしまうことになると思うんです。それは見解の相違かもしれませんが、少なくとも僕はそういう「かたくななかたち」でいかれることが、もっと高橋を悪くしていくと思うんです。いっぺん試してもいいと思いますよ。「一ヶ月くらいは許可しよう」と。「一ヶ月たっても髪の毛が長かったらやっぱり許可せんぞ」とぐらいにやったらね。「許可せんぞ」という言葉も生きてきて、もっと彼らは変化していくと思うんです。相手は子どもですからね、おとなと同じようにですよ、理想一本で、あるいは罰則一本でやられるんだったらダメですね。おとなだったらそれやれますけどね。子どもっていうやつは損や得では動かないんですよ、

立身出世ばかり考えているおとなたちのようには。

### ●——来ない子どもたちをどうするのか

このあと、全体がシーンと静かになって言葉がどこからも出てきません。そこで、ふたたび私がつづけました。

**私** 今のこの中学では「もう少し柔らかくやったほうがいい」と思いますけどね。たとえば、全然来なくなった子どもたちにですね、どんな方法で指導していこうかということを考えて、その方法をとりながらやるんだったらまだいいけど、「おまえたちは学校に来たら困る子だから」というかたちでいかれて、子どもたちが学校からいなくなってしまう。いなくなっただけじゃ僕たちが全然なにもしないのであればですよ、その子たちというのは、僕はやはり犠牲者だと思いますね。少なくとも僕たちは、それを知っていて放置はできないですね。心理療法士の曾原と矢島の二人が今日来てるんですが、二人はよく家庭訪問するわけですよ。清宮君とも彼らは会ってるんですよ。清宮君の家庭の雰囲気だとか、清宮君のうちに来る子どもたちだとかね、あるいは年上の子どもたち、バイクを乗り回す子どもたちを知ってるんですね。この子どもたちの多くは、たぶんもう学校に来なくなってますよね。この子たちというのも、ここに籍があるわけであって、先生たちが教育者としての対応を考えられないといけない問題だと思うんですよ。それを、「いやあ、あの連中は校則違反をしているわけだから俺たちには責任はないんだ」というのは、ちょっとおかしいと思いますね。

**担任** 責任がないとは思ってないです。ほんとうはわれわれも救いたいんです。やっぱりやかましいことを言うなかで、指導するなかでやっぱり救いたい。彼らをそのために校則、校則で縛っていくと言われるかもしれんけど、やっぱりわれわれはがまんすることもね、学んでほしい。そしてやっぱり、社会のなかで自分の心を鍛錬していかなければね、やっていけないんだと、そういうことを学んでほしいんです。

**私** 教えたいたいですね。ところが、教えたいたけど今の方法では、教えることになってないでしょう！来ないんだから。あの連中はまちがいなくだんだん来なくなっているでしょう。そして、だんだんだんだん悪くなってるわけだから。結果ですよ。自分たちの頭の中

の理想論じゃないわけですよ！結果的に子どもたちが耳を傾けてくれないし、学校にも来ないっていうことはね、なにか別の方法を考えんといけないうことを要求してるわけでしょう！「自分はほかの子どもたちで手一杯だ」ということじゃ困るわけですよ。

「校則違反の子は来ちゃ困る」「校則をちゃんと受け入れれば来てもいい」という発想はですね、ちょうど、いわば国家でいったらですよ、たとえば「ヤクザだとか犯罪者なんていうのはもう国民として認めない」ということと一緒になんですよ。しかし、日本の法律はヤクザであったって犯罪人であったってですよ、「国民として認めない。そんなやつはガス室送りだ」というような、ナチスみたいなことはしないわけですよ。ところがその、どうも、「校則守らないやつは学校来させない」というのはですね、「おまえたちは学校の生徒として認めない。ガス室送りだ」と言ってるのと同じになっていくわけですよ。

「そんなこと自分たちは考えちゃいないんだ」っておっしゃったって、結果的にそうなるんです。結果的にね。だから頭の中で考えるんじゃないで、実際学校に来ない子どもたちがですね、暴走族の中にはいっていくとか、シンナー中毒でからだを壊していくっていうところをね、ちゃんと見て、「じゃ、この子たちをどうしたらいいのか？」ということを考えていかなきゃいけないでしょう？そこが僕は「教育の原点」だと思うんです。なにも高校合格者の数を上げることが教育じゃないと思うんですよ。

### ●——教育者ではない管理者の言葉

先生たちは非常に疲れておられるという印象です。校長からの管理、父兄会からの突き上げ、そういったものからの批判を受けないためにどうしたらよいか、といったことだけで手一杯になっていて、「教育の原点」などといった認識からは遠いところにいつてしまっているように思われます。ですから、これからつづく生徒指導主任の私への返答はじつに紋切り型の国会答弁のようになってしまっていて、おおいに誠実さに欠けています。校長の言葉はさらに言葉数だけが増えて「今の教師たちの砦」を堅くするためだけに腐心されていて、まさに「教育の原点からはさらに遠ざかってしまっている」のです。くわしい応答は省略しますが、生徒指導主任は次のように述べています。

**生徒指導主任** 「一人を生かして、全体を犠牲にするか」「社会全体、たとえば学校、あるいは、非常に広げれば社会全体をみるか、個をみるか」「一人を生かすか全体を生かすか」そこまでも考えが及ぶと思うんですよ。

**私** もちろんそうですよ。そして、先生の考えでは両方は成り立たないというわけですね。一方は犠牲にせざるをえないと？

**生徒指導主任** だからたとえばですよ。まあ髪を伸ばしたいと、ま、そういう学校もあるし、そういうことで要求があったと。で、その子はいろいろ事情もあるだろうが、一ヶ月余裕をもちましよう。そうした場合にその子が学校の配慮があつて一ヶ月すぎたと。ま、それでうまくいけばいいんですが、逆に今度は髪で一ヶ月待たたと、次はまあ、生徒が制服が好きな子もいれば嫌いな子もおると。いろいろ制服にも規制がありますよ。たとえばズボンもですよ、こういうきちっとしたズボンよりはゆとりのあるズボンのほうが動きやすいし、したらまあ、そういうふうを考えていくと実生活っていいですかね、そういうことを考えると非常にむずかしいわけですよ。

**私** 次々に要求してきて繁雑だ、とでも？

**生徒指導主任** で、あることが受け入れられたと、次はこれしてみようかというふうに、ま、そういう考えをもってしまうと危険な場合も出てくると。ま、そういう場合にやはり、さっき最初に申し上げたように社会生活ですから、ま、がまんをさせていく、それが長い目で見れば教育の愛だと思えますがね。今はそういう欲望を持っているかもしれないけど、長い人生、社会生活を考えると、今ここでそういう学校のしつけになりますか、そういったものもやっていく、そういう効果があると思うんですが。

**私** 効果が上がっていないじゃないですか。そうしようとしていくなかで、学校に来なくなってるわけでしょう？

**生徒指導主任** いや、それが一個人のことですよ。

**私** じゃあ、他の子たちに効果が上がっていると言うんですか？ 来てる子たちには？ 来ない子はもちろん効果が上がらずに犠牲になってるけど、ほかの子たちには、いい見せしめになって効果が上がっていると言うわけですか？

**生徒指導主任** いや、そこは人間、耐性ちゅうのが必要であるし、その耐性、ま、要するにがまんするということを教育過程のなかで考えながら行なってるわけで……。

私 あー、なるほど、ほかの子どもたちにはがまんさせると、がまんさせることはいい教育だからだと。だから来なくなってるほかの子たちは別にしてね、来てる子どもたちにはいい教育をしてるんだというわけですか？僕が言ってるのは、さっきから言ってるのはですよ、来なくなった子どもたちをどうするかってことを質問してんですよね。

私はここで、生徒指導主任との対話をあきらめました。そして校長に質問を向けてみました。

校長 院長先生がおっしゃること、よくわかります。あの一、けっして私たちは公という立場でですね「切り捨て御免」で行なってるわけじゃありません。あの一、親のほうの要求、もちろんこれは子どもの要求があったから親がそれに同調して、今から八年ぐらいまえですか、長髪を認めた学校があるんです。ところが、今ではPTAの役員でさかんに元に返してくれというのが言葉として実際に出ています。それと、つい最近では、一昨年になりますかね、その学校に通ってる子どもの保護者から聞いた、直接聞いた話なので、ま、その、事実であることはまちがいないと思いますけども、これが以前の学校と同じ学校かと思うほど、学校の様子が変わったと、そういう状況がじつはあるわけです。

それから院長先生がご承知のとおり、今から七、八年前、宮崎市内がずいぶん荒れましたね。そのときにまず現れましたのは服装のまえに頭髪、あのモヒカン刈り、真ん中からピーンと、髪を立ててやってる。いっしょに勉強してる子どもたち、とくに女の子にとっては、それが恐怖だったわけですね。言いますなら、非行文化のシンボルだったわけですね。そういう子どもたちが育ちますと学校によっては、「あの子どもたちだけの学級をつくってくれ」という切実な子どもたちの要求、家庭の要求があるわけですね。しかし、それはあまりに極端なので、実際にはそこまでやらずに、まあ特別な子どもだけ普通学級ではとてもついていけない、しかも頭髪から服装から非常に違反の度合いが高い子どもたちについては、たとえば、教育相談室にその子どもたちを集めて小学校の五、六年程度、あるいは3、4年程度までレベルを落として国語辞典の引き方まで勉強させたんです、一時代！それで、そういう学校の状況というのは、これが学校かと思いたくなるほど、学校の秩序、生徒の学校生活に

おける秩序というのは、破壊されておりましたですね。で、それを本人たちは英雄気取りでやりましたけども、大多数の九〇数%の子どもたちにとっては、その学校生活の時代というのは、子どもたちが納得する充実感を覚える、そして保護者の学校に対する期待が充足されたかといいますと、もう、こういう状況だと、うちは私立学校に入れるとか国立学校に入れるとか、そういうことを真剣に考えた一時代がありました。宮崎市内の場合にはようやくその時代から抜け出して、ま、今日があるわけですけども、少なくともやはりみんなが楽しくやって来れる学校でありたい。楽しくと言いますのは、個人の自由を最大限に認めた学校じゃありません。その理由は、子どもたちは精神的のも肉体的にも、今、発展途上、もっとも発達がいちじるしい時期にあるんですが、裏を返して言いますと、その子どもたちは発達段階にあるということは逆にしますと、未成熟な段階にある面もあるんだと思いますね。

私 そうですね。

校長 そういう子どもたちを、やはりこれから有為な国家社会の一員として人格を完成させながら、子どもは国家社会の一員として育てなくちゃならない。そういう子どもたちに対してどういうふう  
に人としての生き方、そしてそれはどういう社会においても自分の意志だけでは、その自分の意志だけで自分の自由だけを貫くことはできないんだということを、あの、指導していかなくてはならない。

じゃあ、頭髪とのかかわりということですけども、先ほど言いましたように、多数の子どもたちが頭髪を伸ばしたいという気持ちがないにしても、うちの職員が言ってますように、伸ばしたい子どもたちもたくさんいるわけですね。で、一か月でも余裕みてみたらというお考え、それも一つの方法だろうと思いますが、これはあの一、今までの私の経験ですと、そういうこともやってみたんですけども、「一か月先生は認めてくれたのに、これから切れとはいったいなにごとか？」と逆に開き直りましてね。で、そういうのが習慣化しますと、期限後というのは非常にあとの指導がしにくいという状況にございます。

私 そこでちょっとちがうんですけどね。そして、そこが一番だ  
いじなとこなんです。僕もね、子どもに規律を教えることは教育だ  
と思ってんですよ。まさに社会の中で「人の物を取っちゃいけない」  
とかですね。その、ちゃんと「結婚しないうちに性的なものはがま  
んしないといけない」んだとかね。そんなこと教えていくのは社会



生活を送っていくうえで基本的な重要なことですよね。性的なことにしたって物的なことにしたって、これはどこの社会だって約束事は必要なことだと思います。しかし、その教え方が問題だと思うんですよ。その教え方が「子供が理解するように教える」のとですよ、もう「理解なしに強くボンボンと強制的に教えていく」のとですよ、言わばスパルタ式に教えていくのと、教育の二つのやり方があるのでしょうかね。つまり、強権的にやっていくのと、子どもたちが理解するのを待ってやる方法とあるのでしょうか。ですから髪の話で一月間というのはたしかに甘いと思われるのかもしれませんがね。そのやり方は、かなり厳密にやらにゃいかんと思うんですよ。一月たったときにまた一月なんて言ったら、こりゃあ教育にならないと思うんですよ。しかし一月間考えてみてね、やっぱりダメなのかと。そしたらそこで、やっぱりダメだと厳重にやったっていいと思うんですよ。要するに「認めた」「裏切らない」という信頼関係が先生と生徒のあいだに生まれてきて、ほんとうの教育がはじまるんだと思うんですね。

### ●——スパルタ式は教育に非ず

私はここで、教育に二つのやり方があると述べていますが、スパルタ式の教育をほんとうに「教育」とよんでいいのかという問題があります。その二つの教育方法の差を単に「教育のテクニクの差」と言っているのかどうかということは、よく考え直してみなければなりません。

つまり、子どもたちをスパルタ式に従わせて、彼らが指導どおりに従ったからとげんってそれが教育かということ、いやこれは教育とはたがう、と私は思うのです。そんなことをして従わせたにしても、「子供たちの心には従わせようとするものへの強い反感を残し、ただ表面だけ従ったふりをしているだけ」ではないかと思うのです。

そんなことでは、子どもたちの心の中には「教育の目的とはまったく逆行するものしか育てこない」と思うのです。つまり、教育からは心の中に「生産的なもの、あるいは建設的なもの」が生まれてこなければなりません。ところが、スパルタ式の指導の中からは「破壊的なもの、破滅的なもの、投げやりなもの」しか生まれてこないと思うのです。スパルタ式の指導でできるのは技術の習得とか知識の蓄積くらいのもので、心の教育は絶対できないでしょう。そ

ういう意味で、スパルタ式の教育は「管理教育」の中でしか効果を発揮できないといえます。つまり、社会の管理機構の中で「がまんし、従い、不平を押し込めるテクニックの強化学習」におおいに役立つというだけのことでしょう。

そう考えてくると、「教育の二つのやり方」が「教育のテクニックの差」ではなく、一方のスパルタ式の指導は「教育」ではなくて、ただ教育のまねごとでしかない、ということがわかります。つまり、スパルタ式の教育に甘んじているということは、先生たち一人ひとりが「しっかりした自分の教育理念をもって余裕をもって教育にあたっておられない」ということを示しています。先生たち一人ひとりには校長からの要求、PTA からの要求という言葉に代表される「社会から要求されている教師としての努め」を果たしていくことに追いまくられておられるようです。そしてその結果、疲れた頭の中で「ただただ非難されずにすむだけの道に逃げ込んでしまっておられる」ようにみえます。そのことを少し具体的にいうと、「ただ教師やおとなの言うことに素直に従う子どもたちを育てること」「競争率の高い高校にできるだけ大勢の子どもたちを合格させること」ということだけを目標にしておきさえすれば「どうにか教師としての責任が果たせていると言って、逃げおおせるのではないか」と決め込んでおられる、ということです。そう決め込んでしまったときはじめて、「スパルタ式の教育」が「これも教育の一つのやり方である」かもしれないと錯覚されてしまう状況ができあがるのだろう、と私は判断します。こんななかから、生き生き伸び伸びとした人間教育が出てくるはずはないでしょう。

校長は、先の発言の中で子どもたちへの教育のことを「有為な国家社会の一員として育てなくてはならない」と述べています。この言葉こそ非常に重要なことです。私は、子どもたちへの学校教育の目的は「国家社会への役に立つ人間をつくることではない」と思っています。現在の国家がいいことをしているか、悪いことをしようとしているか、という考えか、一人ひとりの感覚で異なるのです。ですから、「こんな国家を批判もなく受け入れて、その役に立とうなんて考えてはいけないのだ」と考える人はいくらいてもいいのです。それは日の丸を上げることが教育的か反教育的か、という議論と同じです。どうもこの協調は「反対意見なんて認める必要はないと言って、日の丸を有無を言わせずに日本全国の校庭に掲げるように命令するのがなぜ悪い？」と考えているようです。

一つの価値観を子どもたち全員に押しつけることはまちがっています。「国家にとって役立つ人間をつくる」ということは、国家への奴隷をつくるということと一緒なのです。私は、学校とは単に「子供たちが集まる溜まり場のような場所」なのだと思えばいけないと思います。そこに行くと「同じ年の子どもたちが集まっていて、おしゃべりしたり、かけっこしたり、歌を歌ったりして楽しいし、いろんな先生がいて、いろいろの知識を教えてくれて楽しい」から集まって来るのです。それを卒業資格を与えて、それがあれば「うまいものが食べられるよ」「楽ができるよ」などと言って、「学校に子どもたちが来るよう」に国家が仕向け出したところに、学校の歪みが始まっていると思うのです。それこそが、スパルタ式の指導が教育の一つのあり方である、と勘ちがいしはじめられる起源といってよいでしょう。

「学校は子どもたちが集まってくる溜まり場みたいな場所なのだ」と考えることができるようになれば、子どもたちへの教育の中心は変化してくるはずで、変化の方向は、「知識を詰め込み、技術を磨くこと」「犯行もなくただ従順におとなたちに従うこと」から、「自分の頭でものごとを考え」「まちがっていれば徹底的に反抗すること」の方向でしょう。もちろん学校は社会規範を教える場所でもあります。しかし、それはけっして押しつけられてはならないのです。社会生活を送っていくうえでの最低限のルール以上のものを子どもの意思に反して押しつけるということは、たとえそのことがその子どもにとって役に立つということが明らかであったとしても、それは子どもの人権侵害であり、子どもの心に深い傷を残すといえるでしょう。

### ●——校長への援護射撃をかいくぐって

このあとの話をつづけてみましょう。私はまだ校長に向けて話しているのですが、他の先生が割り込んでこられます。これは、この先生たちが本音で話したいと考えておられて意見が活発になっている、というのではなくて、校長への援護射撃としての発言のようなのです。私から攻撃されている校長に対して助太刀に出られる先生がたの奮闘ぶりは、まるで「校長の管理システムの中で、従順な従事者として忠誠を表明しておられる」涙ぐましい努力の姿です。そして、この姿こそが学校側が子どもたちに対して要求している姿な

のでしょう。

校則の運営に対して「子どもたちの心をもう少しくんでから」と話しているところへ、若い担任の先生がはいり込んでこられます。

**担任** 病院の指導としては、学校に遅れて行っても早く帰ってもいいと、そこらへんも本人に任せておられるのですか。自由だと？

**私** そうです。ですからそこんところは学校側で先生たちが自由にされていていいわけです。たとえばね「そんなことでは来るな」って言われたってかまわないわけです。

**他の先生** 帰った場合に病院に帰らなくて街歩いてもいいってことなんですか？

**私** ええ、そうです。なぜそれをいいことにしているかっていうとですね、僕らの当面の目標は「シンナーをしない」ということだけなんですよ。

**矢島** 僕は横谷の担当なんですけど、八時までにはだいたい帰ってますよ。

**担任** 帰るのは八時まででしょ？

**矢島** 暗くなってからになることもありますけど、今日は昼に帰ってきました。

**私** ちょっと先生、そこんところ誤解を招かないように言っとくとですね。要するに僕たちは彼や彼女たちに「八時には帰ってこい」と言っているわけです。これ以後は絶対許さないと、かなりきびしく。……そうですね、その点は先生たちよりもっときびしいかもしれないわけです。その約束を破った場合には、一週間だけ出れない部屋に入れると約束してるんですよ。保護室というんですけどね。まあ、実態は独房みたいなものです。「シンナーと八時以降の外出だけは絶対に許さない」ということになってるんです。それ以外のことは自由にしていいいことにしてあるわけです。自由にする部分と、きびしくする部分と二つ、僕らは使い分けてるんですよ。「自分たちのほうでそれを選びなさい」ということにしてるんです。僕たちは彼女たちを動物みたいに「鞭打ったり、鎖につないだり」はできないわけですから、自分の中で「ものごとを考えていく力を養っていく」ことを治療の目標にしているんです。ですから、学校も自由にされていていいわけですよ。その、「朝遅れて来るなら来るな」とかね、あるいは、「黙って帰るようだったら来るな」とか、それでかまわないわけです。それをやってもらってかまわないわけなんですけど、

そのやり方のことを言ってるわけですよ、今ね。

**担任** いちおう、だから時間すぎたら門前で帰すと。

**私** それでもいいじゃないですか？やり方としてやろうとされればね。ただテクニックとしてですよ。たとえば、いわば機械的になっちゃうか、それとも、こんなふうなことが一週間に三日もつづくようであれば絶対受け入れないぞというかたちで臨まれるか。柔軟性が欲しいというのは、そこなんですよ。

**担任** そこは、われわれも考えてるんですけどね。

**校長** ま、それは、うちは病院とはちがうんで、あの一、九〇〇人以上の生徒を預かってますから、充分保護者とも相談して、こういうことでうちは今後指導していきたいということで保護者の了解のもとでやらなくてははいけないのです。で、先ほどのお話ですけどね、私、本校でやっているやり方で当分やっていきたいと思っているんですけど、これ、まだ来たばかりでよくわかりませんが、以前の学校ではですね、今、先生がおっしゃるようにいろいろとやってみたんです。そうしますとね、じゃあ一か月間の約束で一か月たったら切るだろうということで、これは全校生徒に向かってこういうことは言いませんからね。「あの子が伸ばして、なんで先生、俺が伸ばしていかんのか？」とかなるでしょう。今度は下級生は下級生で、「上級生は先生、ちゃんとやっ取るじゃないか。なんで俺たちは伸ばしたらいかんのか？」と、非常に学級担任はそれに責められてですね。すると、今度はブレーキがなくなるわけです。

**私** そのブレーキがきかなくなるから、うんぬんということが一斉取り締まりの理由にされることは多いようですが、それではまさに教育ではないですね。警察とか軍隊と一緒にですね。

**校長** それで先生はもっとブレーキの遊びの幅を広げたらどうかとおっしゃるんですけども、今、生徒指導主任が言いますようにね、ブレーキぎりぎりということではないんですよ。学校は学校でこれ、どこの学校でもそうだと思うんですが、ブレーキはちゃんと遊びは残してるわけです。その残してる部分を踏み外した場合には、やっぱり生徒の規律ある、しかも多数の子どもたちの教育、そして保護者の依頼、そういうものから限界をおのずから考えなくてははいけない。そのへんの矛盾がですね、たとえば、今おる職員の中でもですね、あの、ほんとうにつらい。つらい！つらいけれども今のところではベストじゃないにしても、そうせざるをえないというのが偽らざる心境だと思うんですよ。

**私** それはだから、ほかの子どもたちのためにということですよ。ほかのこのためにですね。僕は、もうちょっとですね、僕が言いたいのは、その子どもたちの問題はほかの子どもたちにとってもいい教育のチャンスのはずですよ。なぜ規律を守らないといけないのかと教えるチャンスのわけでしょう。それを規律違反の子どもを罰することで教えていくのではなくてですよ、ほんとうは理屈としてこうなんだって、社会で生きていくってこういうことなんだって教えていくのが教育のはずなんですよ。

**校長** これはですね、道徳の中でも社会科の中でも、あらゆる教育を通して社会規範の必要性についてはですね、今、院長先生は知りすぎていらっしゃると言われるかもしれませんが、心の教育ということについておろそかにしている中学はどこにもないはずですよ。それが子どもたち、ゆがんだ自己主張の強い子どもたちは、そういう社会の規律とか規範とか、人に迷惑がかかるとか、そういうことは頭から考えなくて、どのように今の青春をエンジョイするかということで一途なんです。「高校行ったら、先生ちゃんと僕は切るよ」という、「中学校時代になぜ切れん？」と聞くと、「高校だったら退学がある」と、そういう論法なんです。ですからそのへんの理解をさせるのが非常にむずかしい。よーく、先生が高橋やら横谷をどう軌道に乗せていただくか、今、一所懸命苦労していただいている、たいへんありがたいと思います。私たち、決して切り捨て御免で「そういう枠に外れた子はうちにいらん」と言うんじゃないで、そういう子どもたちも、なおかつうちの正常な生活ができるようにと、うちのうちでしょっちゅう家庭訪問もしてくれておりますし、教育相談もやってくれてるんですが、これは高橋がね、先生にね、このあいだずーっと話をしたときに、「先生、将来、俺どうなるとやろかい？」って言うんだったらいいが、「今楽しけりゃいい」って言うんですよ。ま、そのへんがあの子たちがもってる非行文化の、特徴の一つのようです。

**私** そこは、ちょっとちがうですよ。口では子どもたちはそう言うでしょう。「今楽しければいいんだ」って。それはたぶん裏返しの言葉だと思いますよ。ほんとうはその言葉をそのままとっちゃいけないと思うんですよ。子どもちゅうのは、「今楽しければいいんだ」っていう言葉使いますけど、ホントはちがうですよ。やっぱり自分たちは見捨てられてるっていう気持ちが強いんですよ。それをそんな言葉で抵抗しているんですね。

**校長** そこもあると思います。

**私** そこを理解してもらおうと、またちがうと思うんですよね。なにかその、あの子たちっていうのは、ほんとうは言いたいこといっぱいもっててですね、横谷が使ってた言葉、君になにか言ってたんじゃないの？矢島君、ちょっと話してみてくださいよ。

**矢島** はい。お母さんがですね、家族面接の場で、本人が、「マニキュアと口紅とつけて学校に行く」と言った。ま、そのなかで、「そりゃあ困る」という親の話があって、「土、日につければいいじゃないか。土曜日の午後から日曜日にかけてつければいいじゃないか」っていうふうに私が言ったら、横谷が言うには、「それでは意味がないんだ」って言うんですね。「学校につけて行くことに意味があるんだ」って言うんです。そういうことを考えると「学校でそういうことをしてる自分の存在」っていうのがあるっていうことですよ。そのなかでその「横谷っていうのはこういう人間なんだ」っていうのができあがっていて、それを壊せないんです。で、逆に言えば、そういうふうにして「攻撃されればされるほどそのことで遊ぶことになる」と横谷が言ったんですけど。それでシンナーなんか使っていて「気合いのはいった存在でいたい」って言うんです。気合いのはいつているっていうのは「みんなから一目置かれるような存在」。それはどうしてそうなるかと言えば、「先生たちには歯向かえないんだ」と。そしたら「この学校の中で特別な存在として見られていたい」と。というのは、逆に言えば、その、関係をもちたいからこそそうするんだということですよ。で、マニキュア塗ってきたり、違反して追い返されること自体さえも彼らにとってみれば一つの勲章が増えたようなもんで、彼らの中では、「いいな」って、「特別に帰れてる」という思いも逆に言えば与えてるっていうことですよ。

**校長** まったくそのとおりです。自己主張とか私が言いましたのは、これは自己主張をなぜするのかと言いますと、あの子たち自身のアイデンティティのね、やっぱり確認なんです。そして自己存在の主張なんです。それをふつうの子どもたちとちがった方法であの子たちがやってる。自己主張という意味はそういう意味で使っておるんですけど、通常ある言葉で。

非常に腕力がある、ゲンコツするとなにをやるかわからない子どもたちでもしんみりと話していますとね、非常にさみしがり屋なんです。何を要求しているかっていうと、教師なら教師の愛情を独り占めしたい。まー、あなたがおっしゃるように、そのめだつ格好

したいっていうのはみんなの注目をひきたい、その注目をひくことによって自分の存在感というのをもっと今の小さな自分よりか大きな自分として自覚をしたい。これは人間の、僕は本能的な欲求だろうと思いますけどね。

**矢島** もう一つ付け加えるとですね、この中学にはたいへんな伝統があるみたいですけど、彼ら非行のグループにとってはまた、彼らのそれがあるみたいなんです。先輩から綿々と受け継いできた非行の伝統というのが。

**私** 先輩がうちに入院してるんでわかるんですがね。去年の卒業生で高野というのがいるでしょう、電気屋の息子……。

**何人かの先生** はい、はい。

**私** あの子の連れの連中がね、シンナーの先生なんですね。あとだれだったか、暴走族にはいっているとかいう連中が二、三人ばかりね、ここの卒業生がいるんですよ。一人は吉野かな。ぜんぶ、いわばこの中学の裏文化なんですよ。校長先生の言葉で言うと。そんなふうな歴史がずっとあるわけですよ。この学校に。先ほど、「今はずいぶんよくなった」などという校長先生の言葉がありました、逆に悪くなってますよ。すごく根が深く、広がってますよ。僕らの情報は子どもたちを通してはいつてくる情報なのですがね、おたくの在校生とつながってるみたいなんですね。

ここでまた校長への助太刀がはいってしまいます。

**生徒指導主任** 清宮の家庭訪問はしてますしね。

**私** 家庭訪問されて、効果が上がってますか？効果が上がらずに学校に来ないほうがむしろいいと思ってんじゃないですか？

**生徒指導主任** それは考えてません。

**私** どうかな、それは。結果的にはね、そういう結果にずーっとなってきましたね。去年から、ずっと。よくこういう場合に、形式的に「家庭訪問くりかえしてます」とかね、「ちゃんと行動は把握してます」とか学校の先生はおっしゃるんだけど、そこんとこ効果が上がらないものに関してはね、かたちだけしたって、そんなことは口にしないほうがいいですよ。効果はまったく上がってないのに口にするなんて、裁判官の前で小さくなっている被告の弁解みたいなものですね。



## ●——学校を変革していく力

私はだんだんいらだちを深くしてしまいます。「心の教育ということについておろそかにしている中学はどこにもない」などという校長の言葉は、演説口調の完全な国会答弁です。「歪んだ自己主張の強い子どもたちは、社会の規律とか規範とか、人に迷惑がかかるとか、そういうことは頭から考えてなくて、どのように今の青春をエンジョイするかということで一途なんですね」「『今楽しけりゃいい』って言うんですね。ま、そのへんがあの子たちがもってる非行文化の、特徴の一つのようです」なんていうのは、まるで子どもの心を完全に踏みにじっています。子どもたちの心からの要求に対してなに一つ耳を傾ける余裕がもてていないのです。子どもたちはめだちたいからしているのではけっしてなくて、「おれはほかの腰抜けどものように先生たちの言いなりにはならないぞ！」と、精一杯虚勢を張らなければならないところまで追い込まれているのです。そのことが理解できていないどころか、追い込んでいるのは自分たちなのに、そのことに気づこうとする余裕をもなくしてしまっている、と考えていいでしょう。

生徒会活動というのは、まさに心の教育とか、社会規範の教育のためにあみ出されたものと考えてよいでしょう。ところが、この中学の生徒たちの生徒会活動をめぐっての学校不信は次のようです。これも治療の場面で、生徒の生の声で聞いたことですが、この子も弁の立つ頭のいい子でした。私が、学校への不満があったら「自分たちの要求をじゃんじゃん学校にぶっつけなさい。みんなで力を出し合って。たとえば生徒会などの場を利用しなさいよ」と促したことに對して、彼はこう答えたのです。「俺たちはね、今度の生徒会でも言ったよ、長髪を認めてくれって。しかしね。先生たちはひきょうなんですよ。ぐずぐず言っていて、結局『時間切れだ！』ですよ。そして、この議題は次回持ち越し、と言うんですよ。次回って来年のことですよ、ばかばかしい。先輩たちに聞くとね、去年もそうだったんだって。一年経ってからまた同じことを言われるわけ。俺たちをばかにしてるよ。結局、先生たちの押しつけや。」

そんな教育姿勢で、子どもたちがついてくるはずがありません。しかし、先生たちは表向き一所懸命である、というふりをするようにしむけられておられるようです。

ここまで読んでこられて、「今の学校は幾重にも幾重にも脱皮して行かなくてはいけない」と皆さんも考えられるでしょう。ところが、第一章の中で「精神科医療の世界がそうだ」と述べたように、学校の中にも自分の力で脱皮していく力はないようです。校長の言葉の中に「PTA の意見」という言葉が頻繁に出てくるのが、私としては一番不愉快なところです。広く意見を聞くことはだいじなことです。この校長は「PTA」を「自分の責任を覆い隠すための隠れ蓑」に使っているのが明らかだからです。「強い力を味方につけてことをうまく運ぶ」というやり方は、現在の体制を維持していこうともくろむ人がよくとる手段です。このことは、一九九〇年末の中東地域への多国籍軍派遣依頼、わが国の施政者が「国連の決議」を錦の御旗にして再軍備を進めていこうとしている姿勢そのものです。

わが国は憲法の中で「いかなる紛争の解決のためにも武力は使わない」と宣言しているのです。武力とは、相手に有無を言わせない手段を行使することです。これは相手の人間性を完全に抹殺することなのです。いかなる場合であれ「暴力で解決した結果は、さらに大きな問題を生んでいく」という事実を私たちは、宇宙の中でも一番小さな宇宙「家族治療」の中でよく知ってきました。

太平洋戦争をひきおこした反省のなかで、わが国は完全に「戦争をする能力」を放棄したのです。私たちが今すべきことは、世界中から戦争をなくす努力をすることです。その具体的な方法としては「世界中の軍需工場を解体する運動をおこすこと」でしょう。イラクのクウェートへの侵入を「武力で解決しようとした一九九〇年末の国連決議」は明らかにまちがっていたわけで、平和的な手段で紛争の解決を進めるようにわが国は主張しつづけるべきだったし、今後も断固としてそうしつづけるべきだ、と私は思います。

ところが、国家権力を保有している施政者は「国民を有無を言わずに支配する手段」を持ちたがるものです。自衛隊は一九五〇年にはじまった朝鮮戦争の最中につくられたのでした。それは共産主義者の侵略から国を守るために、というのが大義名分でしたが、私は、これは「国民を支配するための力として保守的な施政者たちに歓迎されたのだ」と考えています。いつの世でも軍隊は外国に対してよりか、国民に対してその銃口を向けているのです。明らかに自衛隊は憲法違反なのですが、現在の施政者は自衛隊がわが国の憲法に「合憲か否か」という議論を避けるために、「国連の決議」を錦の御旗に利用して「国際的に孤立してはまずいでしょう」などという

言葉を使っているようです。「戦争をやめよう」「兵器を破壊しよう」といいつづけることで孤立するとしたら、それこそ名誉ではないですか。

私はここで、第四章の美子と両親との対話をもう一度紹介してみたいと思います。

母 あんたが、中学を出てから働くと言ったって、そんなにしてもし働いたとしてもよ、どれくらいの生活ができると思ってるの？ はっきり言って今までのような生活はできないよ。

美子 だれがそんな生活したりするの？

母 でもあんた、そんなの、みじめじゃないか？

美子 なんで？ お金があるからみじめじゃないってことはないやろう？

母 あるじゃない。生活できるだけ、最低限の生活ができるだけ必要でしょう。

美子 最低限の生活ができるくらい……。できなくてもいいもん。

母 させたいもん。

父 言ったってわからんわ。

私は、美子たちの力こそは、学校の今の体制を変革していくための力の一つなのだろうと思います。それに対して、心あるおとなたちは「もう一度、自分たちの思春期に立ち返って」自分になにができるのか考えて、立ち上がっていただかなければなりません。

## あとがき

私は、世の中が表面だけは「いかにもおおげさにもったいぶって」いて、そのじつ、裏では汚いことばかりが横行しているようすに、非常な怒りをおぼえます。役人とか、学校の先生とか、お巡りさんとか、そうそうマスコミとか、中にはもちろんりっぱな人もいっぱいおられるのですが、どの職種の人でも権力をもってしまうと、「りっぱなままでいづづけること」はそうとうむずかしいことのようなのです。多くの人びとがその権力がもたらしてくれる利得に甘やかされてしまうのです。しかもやっかいなことに、そういう人びとは

そのことのもたらす弊害に気づくことができないのです。

だから「理由もなくなぐりつけ」「機械的に校門を閉じ」「ただただ内申書のことばかり言ったり」する先生が、簡単に校長先生の命令で答案用紙の書き替えををするといった犯罪を犯す先生であったり、婦女暴行で検挙されたりする先生であったり、家の中では全然立派な親ではなかったりしてしまうのです。

それに、マスコミは「世の中の不正を正すことを使命としている」という顔をしています。ところが、実際のところ「ショッキングなニュース、つまり売れるニュース」を流して「社会の現状の中で得られるかぎりの利益を追求している」だけ、ということのほうにがめだちます。たとえば、少年犯罪にしても、親子の傷害事件にしても、精神障害者の事件にしても、単に興味本位で流しているだけのことがじつに多いのです。すると、そのニュースに接した人は、「そんな者はすぐ少年院にぶち込んでしまえ」とか「すぐ精神病院に閉じ込めろ」とか「なんてこの子どもたちの親は無責任で、だらしがないだ」と軽蔑することしか考えないことになってしまうのです。マスコミの人たちが本心から襟を正すことができれば、「どうしてこんな事件が起こったのか」ということを考えて、こんな子どもたちを「すぐ少年院に入れたり精神病院に入れたりするようなことになっている社会の今の状況のほうに大きな問題がある」のだということに気づくはずです。そして、けっして興味本位の記事にならないように配慮することになるはずです。

この七月におきた広島県の「風の子学園」事件のニュースの場合も同じでした。「とんでもない施設があった」で終わってはいけません。教育行政の責任がもっと深く追及されたければならないし、思春期の子どもたちの治療施設が少ないことの背景がえぐり出されていかなければなりません。ところが、今までの四か月ほど、その努力はほとんどみられませんでした。

私は今年四八歳の「年男」です。今や「分別」とやらを少しだけ心得てしまっていて、「怒りの心」をやや薄くしてしまっているというのが正直なところ。「分別」なんてずるさを言い直しただけの言葉なのかもしれません。「これこれの欲望を満たす」ことになると「これこれの困難』がおこって、「さらに苦しむことになる」から「この欲望はがまんしておくほうが得策である」というぐあいに、「分別はずるさによって養成される」のでしょうか。いわば、現在の学校の中の多くの教育は、「人間のずるさを強化していく」という手段を

道具にして進められてきているように思われます。「なぐられないように」「恥をかかないように」「内申書で悪く書かれないように」などなど、なんとも「ずるさの教育の羅列」ではないですか。考えてみると、日本全体がそういったしくみで運営されてきているとあってよいでしょう。「悪いことをしたら罰金だぞ」「もっと悪いことをしたら刑務所に監禁するぞ」「もっと悪いやつは死刑だぞ」というぐあいに。

今では、それに、マスコミというリンチが加わるのです。しかもマスコミは司法組織の断罪よりももっとも悪質で、人格のすべてを社会の中から葬り去るようなことを平気でしてしまいます。司法体系のもとでは上告すると逆転無罪を勝ちとることもできるのですが、マスコミでは訂正記事はなかなか書こうとしてくれません。しかも、マスコミは逮捕された時点で大々的に報道して犯罪人と決め込む人権侵害を平然とすることができるのです。あとから「無罪」とわかって報道された誤報はもう国民の中から消し去ることはむずかしいのです。かりに訂正記事を出すとしても、それは誤報記事よりも大きいことはけっしてないし、誤報を流したことの抜本的な反省はないのです。

さらに私がマスコミのことで不愉快に思うのは、司法体系下の行政官をはじめとした現在のすべての行政官はこのマスコミの力をフルに利用しているということです。しかも、マスコミの側の人びともそのことを十分に認識し、計算して行動しているのです。なんと薄汚くも恐ろしい関係でしょう。こういうしくみの大構築の真ん中から、「それでも、俺たちに立ち向かうことができるというのかね？」という偽善者たちの薄気味悪い声が聞こえてくるようです。まさに「ずるさの教育」を基本において組み立てられてきたこの社会は、「電波と活字をフルに活用して巨大化したマスコミを利用すること」によって、完全に国民を管理しようとしているのです。

そうです。私たちはこういう「ずるさの教育」という空気を吸わされておとなになってしまっているのです。「ずるい空気」など吸うのは、だれでもいやです。たぶん99.9%の人びとが、そんなことなどいやなはずですが、しかし、この社会に生活するすべての人びとは、息を吸うたびにこの空気を吸い込まざるをえない構造になっているのです。そのためにおとなの「良心」「正義感」は日々浸食をうけ、鈍化させられている、とあっていいでしょう。

ここまで述べてくると、私がなぜ「思春期の子どもたちに関心を

もつのか」ということがお分かりいただけるでしょう。そうです。こうしてなくしてしまった「怒りの心」を少しだけでも取り戻したいのです。

私は、この本の読者からお便りがいただけることを楽しみにしています。それは私自身がさらにさらに教えていただき、励ましていただきたいからです。そしてまた、みなさんと力を合わせて、この世の中の「ずるい空気」を減らしていくことに力を出し合っていく道を探したいからです。私たちの病院と診療所には私のほかに、二人の医師と、五人の心理療法士がおります。お困りの家族の場合は往診いたしますので、どうぞご連絡ください。

一九九一年十一月一日 野島診療所の当直室にて

水野 昭夫